

---

# シンデレラバトローション

榊屋 紫雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シンデレラバトローション

### 【Nコード】

N2336Q

### 【作者名】

榊屋 紫雲

### 【あらすじ】

僕はまだ中学生だった。確か、卒業式が終わったときだったろう。僕は戦争を開始した。相手は教師達だ。僕らが戦う時間は午後6時〜12時まで。よって戦いは「シンデレラタイム」で行われる。僕は高校生活を始めるために教師たちと戦う決心をした。大人の階段を昇るために、殺しあう決心をした。この戦線は『シンデレラバトローション』。僕らが成長するための。僕らが大人になるための。僕が僕であるための戦争の物語である。 毎話、大体1000文字程度です。ほぼ毎日更新

### 3日目・戦線（前書き）

バトルロワイヤルみたいなものです。

### 3日目：戦線

ここは南瓜生中学校（「かぼちゃ」ではなく、「みなみつりゅう」だ）の3年生の階。僕は2組。

現在の時刻は5時20分。授業は7限目が終わる寸前だった。

「・・・」

先生の話は僕はいちいち聞いていない。どうせ、後30分もすれば敵のようなもの。

今回の授業を受けないように、早めに・・・今日にでも殺しておくか。

そんな事を考えていると、チャイムが鳴った。

「じゃ、今日はここまで」

あなたの人生も今日で終わるかもしれないね。言わないけど。

ということ、授業が終わって、クラスの女子が数人質問に行く（どうやら数学だったらしい）。

くそ真面目だな・・・。女子くらいのもんだろう。

いや、そこでこの間の小型爆弾をポケットにいれる。殺せ殺せ殺せ！！1時間後に爆発だ！ルールとしては、時制限の武器は、それ以前に仕掛けてもいいらしい。いや、範囲がどこまでかはまだ決まっていない。

仕掛けることなく、女子は質問という非生産的行動を終えた。

仕方がない。僕がやるしかない。

職員室前に着いた。

俺はそういえば、数学係だったようだ。ちょうどいい。明日の（あるはずのない）予定を聞く事にしよう。

先生いわく、今日と同じ事をするらしい。まあ、半分くらい聞いていないから気にしない。小型爆弾を、落し物入れに入れて退散する。

5時45分。

HRが始まった。3年生だけの。

5時50分。HRが終わった。先生が速やかに教室から退去する。放送が入った。

『10分前になりました。速やかに準備を開始してください』  
始まった。

「・・・ちゃんと仕掛けたか？」

僕の隣を同級生が通る。同じ「はぐれ者」だ。僕たちの作戦は遂行中だ。他の奴らの仕事はしらん。

「まあ、いい感じだろ」

「そうか」

5分程度たって、うちのクラスのリーダー・・・学級委員が教卓で口を開いた。

「今日は、いつもとは違い、拠点破壊を遂行する事にする。また、保健室から必要物資を奪う事も、昨日の反省を生かして今日やろうと思う。待機班は、いつも通りで頼む」

本当に頼りになる男だ。他の奴らとは違い、的確な指導をしてくれる。僕たちはぐれ者に関しても、何の差別もしてこない。故に、皆も僕たちに差別意識を向けていない。助かり者だ。

「上手いこと奇襲行動を仕掛けた。おそらく、6時に何らかの反応

がある」  
と、さつき僕に確認してきた「彼」が学級委員に説明した。いや、行ったのは僕だぞ。

そして。もう一度放送。

『開始時刻まで後10秒。準備はいいですか？・・・5秒、4、3、2、1』

沈黙が流れる。今回はこちらが優勢になって、食糧と武器をもらう事にしよう。

『開始です』

ドゴオオオオオ！

爆発音。僕が仕掛けた奴だな。死んだかな・・・。向こうもこちらと同じくらい（運悪く）いるから、まあ分からない。相手は大人だし。

「開始する。救護班と遊撃班は保健室へ。攻撃班と守備班は慎重に職員室に向かえ。待機班は、さつき言ったとおり、いつも通りだ」  
学級委員・・・ああ、面倒だ。木戸が言った。

つまり、好きにやれと。遊撃班よりも最も悠々自適だ。

「行くぞ！」

作戦開始の合図だった。

他のクラスもファイトー。と、涙ながらに彼らを応援することしかできない僕たちは、僕たちの立場を恨む事しか、償いができないのだろう。まあ、そんなこと考えてませんけどねー。

さて、状況が分からない読者のみなさん。心配入りません。僕らも分かりませんから。

じゃ、一緒に3日前から振り返りましょう。

この戦線を。

「シンデレラ・バトローション」を。

### 3日目・戦線（後書き）

感想、評価、どしどしお願いします！

悪い点や誤字脱字も教えていただきたいと思います！

応援宜しくお願いします。

1日目：卒業式と開戦式直前（前書き）

僕が鳥になったとしても、その内、飛ぶのも飽きたりしちゃって、羽もぐだろっな・・・。

もし瞬間移動ができたとしても、風景見たいなあ・・・とか思って、能力を忘れるだろっな・・・。

万能になんでもできるより助けられたほうが気分いいよね？

## 1日目：卒業式と開戦式直前

さて、今回で12人目か。何も考えずの行動なので何も感じない。ああ、いや、初めから何かを感じていたわけではなかったと思う。しかし……12人目か。

おっと、ささっと、片付けて学校に行かないと……。

おい、手伝えよ。と、女性に話しかけてみたけれど、動く事は無かった。シートとか片付けるの面倒なんだけども……。

てな感じで。

3月20日。中学3年生の僕は卒業式だった。

何でもどうでもいい、校長の馬鹿話を聞いてから、適当な動きで証書をもたらって、席に座り気が付いたときには教室に居た。

おお、これが巷で噂の記憶喪失。初めての経験でとても嬉しい気持ちを感じず、流し目殺法で対応してから、廊下に出る。

こんな僕でも友達はある。叫び声と頭がちよつとあれな背が少し高い、少年。髪の毛が自然リーゼントな猿。頭が逆三角形でデルタな少年。まあ、これ言つと全員から、ミサイルパンチが飛んでくるだろう。怖い怖い。

そんな3人と卒業後の話をした後、結局2度と会うことは無い可能性が高い事を知った。まあ、いいや。また高校で友達を作ろう。そういうことにしよう。さあて、これから何をして時間をつぶそう。と思つて、最後のHRに参加した。

その中で、運動場を見させられた。窓際族の僕としてはその動きをしないことでフル目立ちするほうが良くないと思つたので、ちゃんとそつちの方向を見た。1、2年生が3年生に向かって手を振っている。なんだこりゃ。ドッキリか？全く涙も何も生まれてこない。

「じゃあ、これでもう会うこともないと思いますので、最後挨拶をしましょう」

先生が言って、

「起立、気をつけ！」

で、体をまっすぐにして、

「さようなら」

【キーーーーー】

アラレちゃんの登場だ！嘘だけど。

放送の音が響き渡った。音量ミスだ。

【後10分で開戦します。準備してください】

という声が聞こえた。変声機で声を変えたような音。

これが、僕らの青春を終えた、いや、終わらないことを知らせた。

僕は 如月 幽鬼。名前をつけた人のセンスは疑うけれど、つけてくれた事には感謝する。

職業 学生。

趣味 殺人。 現在11人殺した列記とした指名手配の殺人鬼。

ああ、今朝ので12人目か。

死んだ方への追悼の意志はありません。

1日目・卒業式と開戦式直前（後書き）

結局のところ、

タケコプターとかどこでもドラマよりもドラマえもん本体のほづがよくな？

## 1日目：開戦（前書き）

一応宣伝。

僕、榊乃幽也は、この小説とは全く違う（だろう）イメージの作品で「丸く収まったこの世界」というのを書いています。読んであげて下さい。

僕はどちらも好きですけど。

## 1日目：開戦

「………何だ、今の」

ふむ。ベタな反応だな。もっと面白い反応は出来ないのか。と思っ  
てしまうような解答をどっかの誰かがした。

「………えっと………帰っていいのかな？」

またも誰か。ん？僕、クラスの人間を覚えずに卒業したのか。ハ  
ッハッハー。本当に殺す事以外、考えていなかったらしい。まあ、  
どうでもいいや。

「少し状況を確認するので、皆さんは待機しておいて下さい」

はい。皆元気に返事をした。嘘だす。僕は心でそう思ったけれ  
ど。ん？先生って性別なんだったつけ？ま、いつか。先生は教室を  
出た。現在の時刻5：53。

それから周囲の連中の何人かは、緊張感を持たずに、休み時間の  
ように話している。今の放送とか、卒業後のこととか、例の殺人鬼  
（つまり僕）とか。まあ、そんなところだった。僕はと言えば緊張  
感はないにしても、動いたところで現状が変わるわけではないので、  
運動場を見た。1、2年はそこで先生の話の聞いている。暇だなあ。  
というところで。

【6時になりました。開戦です】

放送が流れた。と同時に。

天井のエアコンのふたが外れた。あ、説明しておく、この学校  
には全教室にエアコン完備で、それは天井についているタイプ。前  
方と後方に2つある。そこから、食糧と調理器具が落ちてきた（包  
丁はその真下の机に突き刺さる）。これが前方。ワンテンポ遅れて、  
後方のふたも外れる。

前方から、あからさまに「爆弾」といえるような黒い物体。ドラマや映画でしか見たことの無いような「銃器」（名前は知らない）。僕の殺しのおとも「ナイフ」。日本刀、よく分からない基盤等々・・。そのそれぞれに白い紙がついてくる。

それら全てが落ちてきて、ふたは埃を撒き散らしながら自動で戻る。

「・・・何・・・だよ・・・これ」

誰かが呟いたのを皮切りに、周囲がざわつき始めた。しかし、

【皆様。コンバンワ。そして、御卒業おめでとうございます】

という放送が流れ始めた。優しい言い方だが、それが恐怖が増幅させる。誠意も全く伝わってこない。伝える気も無いのだろうか。

【早速ですが、皆さんには殺し合いをしてもらいまーす】

バトロワか。皆さんも同意見を もってなさそうだな。周囲の人間はそんな余裕はなさそうな顔をしている。焦燥と不安か。

【嘘です。安心して下さい】

その声で、教室が一瞬、安堵に包まれる。感情の入り乱りが見て取れる。だが、誰がどう思っているのか、そこまでは俺にも分からない。

【殺し合うのは、生徒と先生です】

空気が凍りついた。

沈黙。

空気の中に物音1つ振動しようとしないう。凍りついたこの空気を壊さまいと、全てが頑張っていると考えられる。それら全ての人と物がどんな努力をしているのだろうか。本当にお疲れさまです、と  
辛い言葉を呟いた。

はい、嘘です。

1日目：開戦（後書き）

しりとりするぞー！

「りんりん！」

「じはん！」

・・・しょーもな。

## 1日目：証明（前書き）

五感って有りますよね？

視覚・聴覚・味覚・触覚・嗅覚ですね。これらって全部刑事ドラマに採用されてますよね？多分。

でも、1番すごいのは第六感ですよ。どんなドラマでも一度はある。「刑事の勘」って奴。

## 1日目：証明

口火を切ったのはまたも誰かだった。そう記憶している。というか、誰もわからないからほとんどが誰かだ。

「ふざけんな！何言ってるんだ！」

【至って真面目です。ふざけているつもりなんて毛頭有りません】  
だろうな。ふざけているだけの愉快犯なら、とつくに先生に捕ま  
っているだろう。僕は愉快犯ですよ？

「じゃあ何の冗談だ！大体」

「うるさいぞ」

誰かが遮った。興味深いので容姿を紹介しよう。眼鏡をかけた、  
少し赤みがかかった茶髪の少年。身長は175cmくらいだろう。  
体重は59kg程度だろう。名前は神道結弦<sup>かみちゆうづる</sup>か。おお、名前を覚えていた。奇跡に間違いないだろう。あ、ちなみに身長体重は殺した  
人のそれと比べているに過ぎない。

「もし、放送室にコイツがいるのなら、とつくに捕まっているだろ  
う。恐らくジャックしたか、見えないように透明マントでも着てい  
るかのどちらかだろう。そして、俺たちの声が聞こえているという  
事は、スピーカー近くにマイクでもあるのだろう。それを全教室・  
．．．少なくとも3年の教室全てに設置しているとなれば、それ  
は簡単なことではない。かなり用意周到な犯行であるからして、愉  
快犯やドッキリイベントの類ではない。となれば、さつき貴様の言  
葉に反応したように、こちらの質問に答えるつもりはあるというこ  
とだ。今は、必要な情報を集めるのみだ。分かったら黙れ。席を立  
っている奴も席に座って、現状理解に努めろ」

「．．．．．」

それらを全て理解したかは分からないが、全員自分の席には座っ  
た。どうやら、彼はこのクラスにおいて、纏める力があるようだ（  
「ようだ」って．．．）。

【3・2の神道クンの発言でした。ご理解頂けて光栄です】

どうやら他のクラスに彼発言を聞かせていたようだ。ま、懸命な判断だな。僕がとやかく言うことでもないと思うけど。

【では引き続き質問を受け付けます。神道クンはどうやら質問があるようなので、彼を優先しましょう】

「俺達が殺し合わなければならぬ理由は何だ？」

【質問を分析、解釈します。つまり、あなた達が殺し合いに参加する意義ですね？】

すると放送の声は笑った。いや笑ってないかもしれないが、少なくとも僕はそう感じた。

【僕はあなた達に殺し合いを強制しません。参加するかどうかは皆様の自由です。好きなようにして下さい】

そしてもう一度笑った。いや笑ってな略。

またも空気が安堵に包まれる。しかも、今回は小さな歓喜の声付き。それはともかく。

【但し、不参加者は問答無用で殺害します  
と。】

放送の声は続けた。辛辣且つ凄惨な事実であった……だろう。

うん。僕は知らない。そんな感情は昨日においてきた。それにしても、この5分程度で感情が入り組んでいるな……。

「そんなこと……可能なんですか？」

学級委員長の木戸が聞いた。彼は僕も慕っている。というか、うちの学校で彼を慕ってない奴はいないだろう。この状況に慣れて来ている。流石委員長だ。適応力は死活問題だからな。

で、放送の声は、その質問にも答える。

【可能です。そのために証明方法まで用意しましたから。窓の外を見てください】

窓の外……あの1、2年生か。そんな風に思っただけ窓の外に目を向けた。

【今、彼らもこの放送を聞いています。1、2年生の皆様、手を上げてください】

その声の後、彼らは洪々手を上げた。あ、違う。ビクビクしてんのか。まあどつちも似たようなもんだ。

【申し訳ありませんが、物分りの悪い3年生のために、只今から皆さんには死んでもらいます】

放送がそう言った後、野球部の投球マシンが1、2年生にその銃口を向けた。ざわついていた彼らの動きが止まる。

【発射してください】  
ボンッ！

直後に1球。そのたった1球が、1人の男子生徒に向けて発射された。その1つだけで、後方の女子、さらにその後方の男子。さらに後方の女子……。計8人の胸部を貫通した。

「う……。うわあああああああ！」

多分先生だろう。野太い男の声がした。それに乗じて、女子生徒と男子生徒が悲鳴を上げる。

【先生方は逃げてください。あなた達も参加者ですので】  
淡々と放送の声は述べた。とほぼ同時に2、3球目が発射される。どんどんと生徒が倒れていく。逃げ出して行く人達が続出した。

【第2砲 準備完了】

学校に備え付けられている時計が、上に向かって開く。中から大砲が飛び出す。そして発射。弾はそこまで飛びはしなかったが、大きさや威力だけに、運動場にいたほとんどの人数が消滅した。

【第3砲 準備完了】

屋上にある5つの貯水タンクから、機関銃が出る。運良く校舎の方向に逃げ切れそうになった生徒を1人残らず殺戮した。

5分も立たずに、全ての生徒と数人の先生を殺害した。

【これが証明です。僕にはこれだけの武力があります。第4、5の

砲撃方法も用意しています。一応行っておきますが、彼らは死んでいます。ドッキリやあなた達を嵌めようなどという魂胆は一切ありません】

放送の声は、そう言って黙った。  
と、思ったが、

【何が理由か・・・つまり、僕があなた達を参加させる理由ですね？】

と、尋ねてきた。どうやら、他のクラスからの質問らしい。

【そうですね・・・。。僕にはあなた達にそれを言う理由はありませんが、1つ言うならば、僕は救世主です。あなた達のね】  
救世主・・・!?

どういうことだ。絶望的に理解不能で、本格的に意味不明だ。

【メリット・・・ですか？そういうええばそうですね。確かにそちらの方が、モチベーションも上がるでしょうから・・・。と  
いっても、実は考えていたんですけど】

また、他のクラスからの質問のようだ。いや、先生からの質問という可能性も有るのか。

【最後まで残った人のどんな願いでも1つだけ叶えてあげます  
と、放送の声は答えた。

【・・・では、この辺りでいいですか？】  
放送の声は締めるように言った。

【これから、質問がある際は黒板を3回叩いてください。基本的には何でも答えます。それでは  
】  
「待った」

誰かが、放送の声を止めた。僕がその人物を探すためには、トイレか洗面所、あるいは女子にでも手鏡を借りて確認するしかない。  
つまり、僕だ。

「お前は一体誰なんだ」

僕は単純な興味本位で質問した。正体よりも、単純に人格に興味がある。だから、少しでも長く会話したい。

【私が誰か……ですか？救世主以外の解答を求めると言う事ですね？】

そして。

そして、今度こそ本当に笑った。そして言った。

【そうですね。呼び名もあったほうがいいでしょう。私は物語を創り、管理するもの。このゲームの支配者であり、支配された者。ゲームマスター……「ヒラオカ」です】

「ヒラオカ……」

日本人でどこでも基本的にはありふれた名前だった。

【では、これからのことをお好きなように相談してください】

## 1日目：証明（後書き）

「ただいま」とか「おかえり」って、メチャクチャ言いにくいんですよね。

なんか、明日を待つてる感じとか。

「ありがとう」とか「ごめんなさい」もとっても言いにくいんですよね。

なんか、当たり前前を噛み締めている感じとか。

何より、いづれ言えなくなる事が怖いんですよね。

1 日目・岐路（前書き）

分かれ道のこと。

生きるか死ぬかとかね。 殺すか生かすかとかね。

ああ…いつかは自分も立つことになるんだろう。

## 1日目：岐路

放送が終了して、教室は静けさを保った状態を、3秒ほど続けた。

「委員長。貴様だけが頼りだ」

神道が、木戸に向かって言った。

「俺は、皆を黙らせても統率力までは存在しない。この俺でも、この現状は貴様に頼らざるを得ない」

神道の声に

「そ．．．そうだ。木戸。何とかならないのか？」

「お前が頼りなんだ」

と、賛同の声が上がる。

「．．．え．．．あ．．．ああ．．．。今のところ、少し考えているのは、先生が僕達に攻撃の意志があるのかということなんだけど．．．」

「確かに、向こう側から仕掛けてこなかったら、俺達が何とかする必要はないな。流石だ」

神道はどうやら、木戸を信頼しているようだ。彼のようなタイプが人に対して敬意に近い物を表すのはとても珍しい気がする。

「うん。僕達が今どうすればいいのかは、先生の対応によるん」

ガララッ！

「大丈夫ですか？」

ほら来たよ。僕らの道筋を決める、「JOKER」が。性別は女か．．．．．。

「あ、はい。取り敢えずは、今のところはあの話は信用していません」

ナイス判断だ。わざわざここで、正直に生きる必要は無いだろう。あ．．．．．僕も彼に敬意を持つてるな．．．．．こづいづいの

も珍しいんだろうな。

「そうですか。今、警察に連絡して現状把握に急いでいるので、このまま待機しててください」

それだけ伝えると、扉を開けて出てきた。

「……………今のところは信用していいんだよな？」

誰かが言ったので、

「そんな訳無いだろ」

「そんな訳無いだろう」

「そうでは無いよ」

……………被ったな。上から、僕、神道、木戸である。しまった。こんなタイミングで目立ってしまった。思わず口走ってしまった。しかも勝手に言っただけならばまだしも、陰の委員長と日向の委員長の両方と意見が被ってしまったので、すなわち、

「どうということだよ、如月」

と、僕に意見を求めることは間違いない。ああ、皆の視線も僕に集まっている。いやだなあ……………

「……………ここまで用意周到な犯人……………『ヒラオカ』が、電話が通るような電波回線を残しているとは思えない。実際、俺達はあの兵器が有る限り、この学校からは出れないのだから……………まあ警察が来ても殺されるだろうけど。それはともかく、つまり、あの人達は電話が繋がらないのを知っていて、僕達にそう伝えてきたのさ」

「心配させたくなかっただけじゃねエの？それが教師の判断」

「心配かけたくないなら言うだろう。この生死を争う状況で隠し立てなんかしたら、むしろ、殺される危険性が高まる。あの人達はそこまでして隠したい何か……………或いは、実行したい何かがあるのさ」

「……ふう。皆も納得してくれたように黙っている。まあ、きつと単純に、驚いているのだろう。ああ、目立つのは苦手だ。」

「へえ……。すごい奴もいたもんだなあ……」

神道が俺に感嘆の声を上げてくれた。あー、嬉しいなつと。

「じゃあ、その、何かは一体何なのかな？」

「僕には分からないよ」

取り敢えず返答。

「……何か仕掛けられた……とか」

誰かが言った。的確な指示だな……。誰だろう。と、見てみると、気弱そうな女子だった。名前は知らん。女子は殺しの対象だからな。

「じゃあ、ちよつと見てみつか」

気楽に先頭の席の奴が入り口に近づいた。

「んー。何も無いな……。って、ん？」

その男が止まった。

「……なんか聞こえんぞ」

「はあ？何言ってるんだ、羽賀」

どうやら羽賀という名前らしい。おちゃらけている感じだけれど、見た目もチャラいが、若者っぽい感じというよりは、髪型が異質と言っ感じだ。詳細は略。

「機械音だ。うん……？」

教卓の中を調べる羽賀。

「……あつた」

と、中から何かを取り出した。

「何だべ？コレ」

妙な基盤だった。妙な機械音を出している。ピコーン、ピコーンと、ウルトラマンのカラータイマーのような音だ。

「……ソレって、コレじゃない？」

さっきの気弱そうな女が言う。例の武器の中にある奴だ。

「何なんだ？ソレ」

「紙になんか書いてある……。『時間差を1時間以内に決められる  
時限爆弾です。大きさが割と大きいですが、威力は部屋を1つ破壊  
できます』だつてさ」

「残り10秒だぞ」

羽賀が言った。はは。あゝもう！

気づいた時には走りだしていた。そう！正義感ゆえに！なわけね  
えって！

「よこせ！」

俺は羽賀の手から無理やり基盤をぶんどった。そして、窓をタイ  
ミング良く開けた木戸に感謝しながらそれを外へとぶん投げた。

ドゴオオオオ！

それは外で爆発して、俺と窓際の他の人たち（木戸も含む）は吹  
っ飛ぶ。心配ない。風圧だけだ。死にはしない。

けれど、それでも僕らは感じているはずだ。生死と隣り合った人  
という生物はいとも簡単に命を奪おうと戦い始める。これが、寝返  
った。裏切った。裏返ったというやつ。最後だけは違つかもね。

1日目・岐路(後書き)

1 + 1 = ?

?に当てはまること。

2、1 1、田、古、甲、由、申

とか言ってる人、バカじゃね?って思ってたけど。

よく考えると、これ初めて考えた人天才じゃん。

## 1日目・決意（前書き）

更新がたびたび遅れている。とても残念なしい。

## 1日目：決意

ばらばらと音を立てて爆発した爆弾を見て、否、だからこそ、誰一人として口を開こうとはしなかった。

「くそッ！」

口火を切った羽賀は、黒板を3回叩いた。黒板3回は質問の合図だ。

【何ですか？】

ヒラオカが返事をした。

「今のは、向こうの宣戦布告なのか？」

怒りを抑えつつ　この怒りは先生方に対する物で、ヒラオカに對するものではない　ヒラオカに尋ねた。

【本当は相手側の作戦を話す事は禁じられているのですが、まあ、今回は致し方ありませんね。向こう側の作戦はあなた方を騙して、勝ちを自らの物にして逃げようとなりました。そしてその目論見はほぼ成功に至りました】

「どういうことだ？」

「この放送は、このクラスにのみ流れている、といえは分かりませんか？」

「・・・？」

羽賀は不思議そうにしている。

「・・・まさか・・・！」

木戸が目丸くして言った。神道は冷静な目で下を向いている。

【このクラス以外の生徒は全滅です】

そうか。全クラス同時進行で破壊したのか・・・。羽賀の耳と気弱女子（仮）の指摘が無ければ、このクラスも全滅だっただろう。

【・・・放送を切り替えます。先生方、生徒の皆さんに忠告です。まず、裏切り行為は許しません。先生対生徒の戦いです。ど

ちらかがどちらかに裏切った時点で負けです。僕はどこからでも見ていますので。先生の人数は残り60人。生徒の人数は32人です。生徒の皆さん。今度こそよく考えてください。大人は生きるためなら、生徒も子どもも関係なく殺そうとします。コレが現実です」

ブツッ

荒々しく放送が終了した。

「どうするんだ、木戸」

神道は木戸に方向性を任せた。任される方は堪ったものではないだろうが、それでも木戸は言った。

「・・・やろう」

木戸が立ち上がった。そして、前に出る。教卓に手を置き、  
「始めるしかないだろ。黙って死ぬのを待つ訳にはいかない・・・  
・・・だろ？」

またも沈黙。しかし今までは意味が違う。死んでいった者への追悼とこれからの戦いへの覚悟。

「・・・そうだな」

「ああ、やろう！」

誰かが言つて、それに乗じて数人の男子が野太い声を上げる。そして、女子もお互いに励ましあう声がある。そして、32人中、30人が立ち上がった。もちろん1人は俺。もう1人は・・・女？アイツ・・・誰だっけ・・・。

しかし、流石の神道も気付いていないような事実に気づいたと言うあの女子には興味がわく。その事実は・・・まあ、今言っても仕方が無いから言わないで置こう。敢えて「禁句」という言葉を使っておこう。その事実は今のこの人たちに言ってしまうと大変な事態を招きかねない、それこそ「禁句」なのだから。

1日目・決意（後書き）

嘘だけ。

## 1日目：部隊編制

「おい、如月。やんぞ」

羽賀が誘った。ま、いいか。どうせ少ししたら分かる。皆の無謀さや、考えの浅はかさが。

という訳で起立。女のほうも同じような感じで立ったようだ。アイツは僕と同じような感情及び考えだということだ。

にしても、あの女子……。なんか不思議な感じだ。謎を知る者、深窓の令嬢、妖艶という言葉がよく似合う。

閑話休題。

で、これからどうするのだろう。

「まずは部隊分けをしようと思う。攻撃・守備・遊撃・救護に分けて、それでバランスを取ろう。大体8人くらいで」

「ねえ」

先の女が言った。

「無花果さん？どうしたの？」

無花果……ああ、無花果弥生か。僕がまだまとまった頃に好きになった女子だったな。そうか、あの不思議な感じはそういうことか。

「待機部隊は作らないのかしら？何かあるか分からないし、人員を残しておかなければならないんじゃないの？つまりは待つ人」

「待つ……か……。ああ、それもそうだね。うん。ありがとう」

「じゃあ僕それで」

はい、僕です。

「お前戦いたくないだけじゃねえの？」

「うわっ……ダサッ」

男子と女子にそう言われた。

「そう言うなよ。彼は、さっきも見た通り信用はできる。心配ないって」

ナイスフオロー。僕はもう少しで「禁句」を言いそうになった。これ言うと士気がさがるだろうから、やめとこつ。

「そうだね……。待機部隊に入ろつと思つ奴、他にいる？」

「後で変更は出来ないよー」

木戸の発言に勝手に付け加える。誰も手を挙げない。勇敢だねえ。……

「じゃあ私もそつちに行くわ」

無花果だ。提案者が来ると言うのは、まあ、この場合は当然だろう。しかし、前に好きだった人が同じ班(?)ていうのはドキドキしないな。うん、期待してみたけど全く無かった。そういう感情も消え去つた。

「……俺も参加しよう」

まさかの神道登場。

「あ・・神道君には、指揮側に来て欲しいんだけど……」  
木戸が神道を止めようとする。

「大丈夫だ。戦線には出れなくても、武器の中に通信機があった。それで指揮は手伝う。それよりも俺はコイツらの見張りを担当させてもらつ。この2人はどうやらこの戦争に一家言あるようだからな。最後まで席を立とうとはしなかった」

あ、見られてたか……。コイツは厄介そうだからな……。

「一家言つて？」

木戸が僕と無花果を見る。

「戦いたくないだけ」

僕がそう言つと、無花果は納得してくれたようだが、僕と同様で本心ではないだろう。いや、彼女は一般人だし女だ。ともかく、

「……そうか。じゃあ早速、会議に移ろつか」

「その前に、羽賀祝人と橋田明日香もこちらに<sup>のりひと</sup>来い。その2人は能力が高そうだ」

またも神道。しかし、この人選にはどんな意味があるのだろう。

「能力が高いなら、普通に戦線に居た方がいいんじゃないかねえの？」

羽賀はそう言っただけで隼人を睨んだ。というか、羽賀・・・そのまま自分ほめた感じになってるぞ。

「能力が高いという事は、誰とでも代われるということだ。口答えせずに来い」

木戸以外には厳しいな・・・この人で、結局、2人は理解したようだった（橋田というのは、あの静かな女子だ。素晴らしい指摘能力だ。神道と木戸には劣るが）。

「・・・じゃあ、残りの27人でバランスよく4チーム・・・いや、そんな大雑把で適当じゃダメだ。運動部でラグビー部の男子は守備に。陸上・野球・ソフトボール・サッカー部の男子と女子は特攻。剣道部と他のメンバーで、遊撃。剣道部の人で、他の人は決めてくれ。但し、友達とかそういうのは無しで、本気で戦う部隊・・・どんな態勢にでも対応できる人選で頼む。残った女子で器用な・・・そうだな・・・裁縫とかが得意女子で救護部隊を担当してくれ。残ったメンバーは、どんな目線でもなく「客観視」という目線で、自分がどれに1番相応しい部隊に入ってくれ。じゃあ、早速分かれて」

初めてこういう状況に出会ったとは思えないな。いや、間違いなく初めてではあるだろう。もし1度でもこういう状況になっていたら、僕の思っている「禁句」を間違いなく最初に言っただけ、皆を正しい方向に向けさせるだろう。

「まあ、僕らははぐれ者つてところか・・・」

取り敢えず纏まってきたな。しかし、彼らはこのまま戦っていくことは出来ないんだろうな。戦いが始まればすぐにでも、士気が下がる。僕はその原因も既に分かっている。

7時30分・・・それにしても

「腹減ったな・・・」

1日目・待機部隊はぐれ者(前書き)

あーした天気になあれ

あれって、晴れと雨のパターンは決まってるけど、横になった時って決まってるよな・・・。

## 1日目：待機部隊はぐれ者

「で、お前らの話を聞こうか」

部隊決めがひと段落つき、待機部隊以外は校内の探索に向かった。遊撃部隊と救護部隊が一緒。守備と特攻が一緒というバランスだった（ちなみに木好は遊撃部隊で指揮）。

で、皆が探索に向かうと同時に、自分の席に座った神道が言った。

「……は？」

羽賀が疑問の声（だと思っ）を上げた。

「貴様じゃない。無花果と如月だ」

「……何のこと？」

反射的に反応したのは無花果の方。僕は無視するつもりだった。

「どうして最後まで立とうとしなかった」

「足がつってすぐには動けなかったのよ」

「都合良く、そのタイミングで……か？」

「何の都合が良いのかは知らないけれど、そんな感じね」

「……如月は？」

はいきた。同じ言い訳は使用できない。

「誰かに話しかけられるのを待ってたんだ。でも、都合良く友達が  
いなくて、結局残ってしまったんだよ。ああ、悲しきかな」

「貴様らとは真面目に会話しても無駄なようだな」

と、神道が睨んできた。次の瞬間、神道は動いた。

「……」

神道は僕の頸動脈を的確に狙って、カッターナイフを当てた。切らないように、しかし、力強く。まあ僕は動じないし、無花果も興味が無いようだ。羽賀と橋田は驚きを隠せず、足を一步引いている。目を丸くしているな。そうやって自分の弱さは見せないほうがいいぞ。

「真面目に答える」

「そんな事で僕が動じるとでも？」

「答えなければ殺す」

「答えを知りたいのなら、僕を殺してからしろー」

「ふざけるな！」

「僕、この会話が終わったら、結婚するんだ」

死亡フラグっぽいのを並べてみて、挑発したところ

「！」

あ、蹴られた。んで、倒れた。でも、カッターナイフは、はずしている。セーフ。

「……一応教えておいてやる。俺は人を殺す事など怖くは無い。俺は殺人事件をいくつか解決した。その際、殺された人間の写真を見ている。目の前で、死刑も見たことがある。俺にとって命とはそこに合つて、すぐ消えるものなんだよ」

「へえ……。じゃあ、お前には一生かけても、僕の考えは理解できないな」

「何だと……？」

怒りを拳に溜めている。

「僕にも分からない。だからこそ、アイツらと一緒に戦いたくは無  
い。だから、最後まで戦うことを拒否したんだよ。そして、こつや  
つて待機してるんだ」

「お前は何を言っているんだ……？」

神道は分からないようだ。だろうな。

「大丈夫だ。明日には分かる」

僕は手をだした。神道に手を貸してもらったために

「何のつもりだ」

「僕達は待機部隊。一応でも、部隊であり、仲間だ。仲直りくらい  
はしとかないとな」

「フン……」

で、神道は手を取った。

「俺はお前らを利用してみせる。仲良くなんざしてたまるものか。が……」

神道は笑った。

「俺が選んだ、最高の部隊だ。せいぜい頑張れ」

あ、そう。本当に嫌な笑い方だが、事態の収束は出来たな。おけ、おけ。

でその後は作戦会議という手法を取った。なので、真ん中の机を5つ、動かして、班活動のような形を取った。

「で、俺らはどうすんの？」

羽賀が訊いてきた。僕が訊きたいよ。

「あの、リーダーとか、決めたら、いいと思う、けど」

橋田……もう少し、強気に行こうぜ……。

「そうね。じゃあ、リーダーは」

「俺だ」

うん、神道だな。

「後は、雑務だが……如月。貴様がやれ」

「何でだよ……」

「リーダーの命令は聞け」

「チツ……」

まあ、こんなところで喧嘩したところで仕方が無い。

「じゃあ、ゲーム部でも行って何か取って来い」

「は？」

「ここには娯楽道具が無さ過ぎるだろう。トランプでも取って来い」

「分かったよ……ったく」

面倒だな……。

現在、8時25分。

1日目・待機部隊はぐれ者(後書き)

明日転機になれますように。

1 日目・無花果（前書き）

## 1日目：無花果

2階の3年生用の教室（とは言え、生徒はもう3 - 2だけなんだが）を出て、別館3階の娯楽室に行こうと、渡り廊下に差し掛かった時だった。

「待って」

と無花果がやってきた。

「私も行くわ。量が多かったら大変でしょう？」

「・・・ああ」

取り敢えず、女子の誘いを断るのは失礼だと思ったので、同意した。

渡り廊下では一言も喋らずに別館にわたって、彼女は口を開いた。

「あなた、どうして最後まで立たなかったの？」

「・・・無花果はどうなんだ？」

「話を変えないで。質問しているのは私」

「僕は戦いたくなかっただけだ。本心はこれだけ」

「嘘ね。あなたは私と同じ考えのはず。さっき神道君に向かって言った発言で確証を得たわ」

「じゃあ聞かなくても分かるだろう」

俺は突き放すようにそう言った。

「・・・そうね」

そして結局、娯楽室まで何の話もしなかった。

その後は、娯楽室で、持っていくべきものを整理している最中だった。

「チエスってルール分かるか？」

「私は分かるわ。羽賀君は分からないでしょうけど、橋田さんは知っていそうね」

「羽賀は将棋の方は知ってそうだな。将棋も持っていくか」

「やっぱり荷物は多そうね。段ボールにでも入れましようか」  
「そうだな」

とは言え、上のように本当に他愛も無い話だった。

「トランプは定番だよな？」

「そうね」

「そういえば、トランプのマークって意味があつたよな？」

「専門的には、スートというらしいけれどね。確か、スペードが「剣」で軍隊や王侯、クラブが「棍棒」で農民、ハートは「洋杯」で聖職者、ダイヤは「貨幣」で商人だったわね。また、スペードが冬、ハートが秋、ダイヤが夏、クラブが春よ」

「詳しいな。何か宗教的なものか？」

彼女の動きが止まった。

「………どうして？」

「首につけてるネックレス。ハートとスペードとクロスだから、ハートは聖職者だろ？クロスはキリスト教だと思うからさ。3つもつけてたから気になってな」

そして、彼女は動きを作動させて、こちらを向いた。そして、その3つに触れながらこう言った。

「そうよ。私の家系は聖職者でありながら正義の軍隊……らしいわよ」

「軍隊……なのか？」

「昔はね。今は……そうでもないわ」

「それでもない？どういうことだ？と聞こうとしたが」

「もうこのくらいでいいでしょう。帰りましょう。彼は怒らせると怖そうよ」

と、先に部屋を出た。俺もそこに有ったものを手当たり次第に段ボールに入れた。

どうやら、娯楽室での件は長く時間がかかったようで、既に9時をまわっていた。

## 1日目：現状

そろそろ現状を理解するために、長々と他人の紹介をしようと思  
う。

神道 結弦の説明だ。身長体重見た目は省略する。少し前の話を  
読みたまえよ。というわけで、境遇について話したいと思う。彼の  
父親は国を動かす、政治家を動かしている「裏」の人間で、彼の父  
親の命令ならばこの国の法律は変わってしまうらしい。母親は検事。  
正式名称は忘れたが、上の方にいるらしい。故に、彼女が認知して  
いる極秘情報を神道が知る事もできるということだ。兄が裁判官で  
姉が警察官だそう。まあ、こんなに知っているのは、偏にパソコ  
ンのおかげだろう。何のために調べたかと言うと、僕の殺人をばれ  
ないようにするためにあらゆる情報を集めるためである。あ、そう  
だ。どうしても訊いてみたい事があるのだ。

「神道」

「何だ」

「例の連続殺人犯はどう思う？」

「……犯人は、子どものようで、大人として完成している。  
しかし、結局子ども。というところか」

「……なんだそれ」

「犯人は学生でありながら、物事の分別ぶんべつをつけて考えている。その  
証拠に、万引きの常習犯やいじめっこ、不純異性交遊者等々の犯人  
を殺害している」

とは言え、犯人は分かっていないがな。と、神道は続けた。

へえ……。まあ、俺は犯人知ってるけど。とか言ってみる。

橋田明日香。身長150cmと小柄。体重は隠して置くがかなり  
軽そう。髪は肩までで全面的に緩やかなカーブで少し上を向いて

いる。若干、後ろ髪も前髪もギザギザだ。で、茶髪。しかし、不良のような染めたという感じではなく初めからその色だったようだ。上向いているが、上付いた奴ではないようだ。うん。上手くない。

閑話休題。

で、そんなに長い髪ではないので何かで束ねたりもしていない。服装も顔立ちも基本的には目立ったところはない。が、注目すべきは「目」だ。左側は黒で右側は青・・・いや、藍色だった。こういうのを「オッドアイ」というのだったか。

「橋田。それってカラーコンタクトなのか？」

「え、あ、違うよ。生まれつき・・・かな？」

かな？って・・・質問しちゃってるよ。

では、羽賀祝人の説明と洒落込もうと思う。身長183cmくらい。体重は60kg弱だな。見た目に関しては前にも言ったけど、「チャライ」という感じでは無い。が、髪型が特殊だった。いや、特殊だと言うならば、その髪型から考えれば服装も異質であった。まず、髪の色は黒だったが、その黒こそ違和感を感じさせる。自らの姿をやみに潜ませるための黒という感じだ。黒の上から黒を塗ったような感じだ。で、その髪型はオールバックだった。少し年上っぽい印象を受ける。だが、そんな髪型の奴はそうそう居ない（少年から片田舎の中学校には）。そして服装はと言うと常に首とネックウォーマーをしている。しかも黒。で、制服なのだが、ズボンのベルトの上から、ウエストポーチを巻いている。「羽賀。そのウエストポーチって何が入ってるんだ？」「ん？・・・ああ・・・貴重品だよ。ケータイとサイフとか・・・そういうの」

「先生には預けないのか？」

「アホか。貴重な物を人に預けてどうすんだよ」

「・・・成程」

理解はした。確かにそれなら肌身離さなくていいのか。体育は口ツカーに入れて鍵閉めりゃいいんだから。

ちなみに、無花果弥生は、167cm、体重略。

僕の身長体重は、172cm、体重、57kg。詳細は教えないぜい。

ドーン。

あ、外で音が鳴った。銃撃音か……。ふと時計を見ると、今は11時48分。

1 日目・終了(前書)

## 1日目：終了

廊下では　さんと、　の教科を担当している××先生がドンパチやっていた。

さて、　と　と××に当てはまるものを答えよ。ただし、同じ記号に同じ文字が入るとは限らない。

デケデケデケデケデケデーン！

正解発表ー。

僕が訊きたい。誰だ、アイツら。

だが、状況は本格的に整理するところということだ。うちのクラスの生徒が先生と戦っている。生徒と先生は1人ずつ。両方とも銃を所持している。

「あっちゃー。ドンパチ始まつちゃってんねえ、こりゃ」

緊張感のない声色で羽賀が言った。

「でも・・・本当にやれんのかねえ、アイツらに」

羽賀が僕を見ながら言った。コイツにはお見通しか。ともかく。

銃撃戦が始まった。

「おい、お前らも手伝えよ！」

僕達の事だろうか？いや、僕は現在の状況を見続けたいね。

「俺達がやるより、貴様がとっとと殺したほうが早いだろう。さっさとしろ」

神道が蔑むように言った。

「はあ？・・・くっそが！」

ソイツはダッシュで、近づいた。

「彼は、陸上部の短距離専門且つ動体視力を野球部に一目置かれて

いますね」

何故か敬語で橋田が言った。なるほど、ということ。と思ったときには、僕の考えたシチュエーションになった。スローモーションでお楽しみください。

彼は、先生に向かって跳び込んだ。しかし、先生も黙って攻撃を受けるはずがない。その状態から先生は彼に向かって銃を発砲した。だが、彼はその状態から身体を反らして弾丸を避けた。そして、その先生を押し倒した。ちなみに性別は男。

「やりい」

言いながら、銃を弾いた。ほぼ同時に他の皆も集まってくる。

「さくて・・・」

彼は、先生の顎に銃口を突き付けた。

「やっちまええええ！」

「いけるぞ！」

「いっっちゃえ！」

と、周りの皆は彼に向けて声援を送る。

「・・・・・・・・・・」

しかし、彼は動こうとしない。

「何やってんだよ！焦らすなよ！」

「はやくー！」

周りの皆は彼の状況など気にも留めず、囃したてる。

彼は銃の引き金に手をかけたまま止まっている。

B i

i i i i i i i i i i i i i i i i i i

【12時になりました。戦線終了です。これ以上の攻撃は、こちらへの敵対と看做します】

何の合図もなく突然のブザー音で、戦争は終了した。

## 1日目・優劣（前書き）

これって、よく考えたら、今日のこと書いても意味ないな。だってみんなが今日はみないだろう。

## 1日目：優劣

「終わり……?」

誰かが口を開いた。

【もちろん今日はです。皆さん、自らの拠点に帰ってください。この後の説明をします】

5分と経たずに全員が集まった。騒ぎを聞いてみんな集まってきたようだ。

「あともう少しだったのになあ、吉田」

吉田……さっきの男子か。

「……………」

「何でとつと引き金を引かなかったんだ? もう少しでぶっ殺せたのになあ!」

「本当にそうか?」

僕は思わず口を開いた。しまった…。

「何だよ。如月。どういうことだ?」

普通に疑問だった。良かった…助かった…。

「いや、単純にどうだったかなあってさ」「何だよ。見てなかったのか? 1発撃つただけだったんだぜ?」

「あー……そうだな」

問題はその1発なんだけど。

「皆集まったよ」

黒板を3回叩いて木戸が言った。

【そのようですね。どちらかメンバーが集まったようです。では、これからのことについて話します】

ヒラオカが返事をする。

【では、説明します。これから、あなた方には色々と用意させていただきますました。これからは、学校で生活していただくからです】

誰も何も言わない。慣れてしまったようだな、異常事態に。

【男女が同じ部屋に寝泊りする事になりますが、不埒な者には死を与えるのでご安心ください。また、各更衣室にシャワールームを完備しており、そこには制服を用意してありますので、服は着替えていただいでかまいません。基本的なことは以上です。これ以降は死活問題ですので、よく聞いてください】

一度、間をおいてから、彼（男だと判断した）は続けた。

【食糧と武器は毎日、午後6時・・・つまり、戦線開始時に配られます。しかし、これらは毎日同じ分量配られません。優劣によつてもらえる量が変わります。勝っている方に、それぞれ多く渡します。つまり、勝たなければ、勝負よりよく進めることはできないということです】

「おい！俺達は不意を突かれて、死んでいつてる奴がいるんだぞ？人数が多いのに不利じゃねえか？」

誰かが言った。ああ・・・ホント、クラスメイト覚えてないって不便だな。

【心配ありません。今回の戦線は、2組と先生方の戦いという事にしました。よつて、今はイーブン状態のため、量は変わりません。ので、これは明後日以降ということになります】

そうか・・・。安心だ。いや、別に不満があったわけでも、不安だったわけでもないけど。

【では、これで終了とします。・・・言い忘れていましたが、学校での生活は続けていただきますので、つまりは、授業というものも存在しますので】

「・・・はあ？」

誰かが言う。そりゃそうだ。だって、殺し合いしている先生の授業なんか受ける奴が、僕以外の生物にしているのだろうか？

【もちろん真面目に受ける受けないは別です。そもそも卒業した身ですからね。ですが、あなたの方が勝てば、高校に行くはずですよ。だとすれば、授業を受けるべきだと思います。先生方は自習などという方法を取らないでください。質問がなければコレで終わりますが】  
急ぎ足で喋って、ヒラオカは最後に言った。

【生徒32人：先生40人】

こうして1日目は終了した。

しかし、いつまで彼らは希望を持っていられるのだろうか。

僕はそんなことを考えながら、禁句を思い出して笑ってしまっ  
た。

コレを言つと何人が絶望するだろうと考えると笑いが止まらな  
かった。

1 日目：優劣（後書き）

本当に小説人気ねーな。落ち込むなー。嘘だけど。

どっから何処まで嘘なのか自分でも分からないよってのも嘘。

2日目：朝食（前書き）

盆と正月が一緒に来たよう

非常に忙しい様。

僕の生涯 遂に来たよ！。

非常に逝きそうな様。

惜しい！

## 2日目：朝食

「なあ如月。お前何考えてんだ？いや、俺も分かるんだけど。お前が分かるってのが俺には分からないんだよ」

「何のことを言ってるかさっぱりだな。俺に話しかける前にお前のその思ってることを言うべきじゃないのか？」

「ああ。俺が考えてるのは」

「あーあーあーあー」

「・・・何やってんだよ如月」

「聞かなければ、答えなくて良い。これが聞かざる言わざるの法則だよ、羽賀少年」

「いや、違つと思つぞ」

俺と羽賀は食堂でそんな話をしていた。

2日目。男子と女子が同じ部屋に寝るといふ状態で、寝ている状態の女子を見ると、どうしても欲情してしまい、寝るのにも時間がかかり、さらには浅い眠りだったので早めに目が覚めてしまった。そして、朝起きてても、どうも興奮してしまつので、さっさと教室をでた。

あ、この場合の興奮とか欲とかは、人を殺したいっていう欲のことだ。別に、あれじゃない。

で、まずは更衣室で着替えを済ませて、誰よりも早く起きていると思つたら、食堂で早々にご飯をかき込んでいる羽賀を見つけた。俺も朝食をとることにして、羽賀の席の前に座ってからの会話だっ

た。

「どうやら、色々と改良されているらしいな。ご飯なんかは炊きたてが用意されてるし、もらってきた食品にあったレトルトのカレーでも持ってきたら十分すぎるぜ」

「昨夜は何食ったんだ？」

「昨日はココにきて、なべだけ借りてみそ汁と、ご飯だな。お前は？」

「食パンとカロリーメイト」

「お前も少し食生活は管理したほうがいいぞ」

「説教は聞きたくねえよ」

「というか、俺は他人と話すのに慣れていないのだ。口下手だから。嘘ですよ。」

「しかし……この生活はいつまで続くんだろうな」

「まだそんなに経ってないだろう」

「でも一生続くかもしれないねえぜ？欲冷静で居られるな、如月は」

「こつ見えても割りとは焦ってんだぜ？」

「そうなのか？」

「ああ、一人暮らしだから、植木鉢に水をやる人がいないから。愛しきヒマワリが心配で心配で仕方がない」

「ヒマワリは今の時期じゃないから、間違いなく嘘だ」

「いや、ヒマワリというなの桜だ。チエリーだよ、チエリー」

「ほう。如月。お前は桜を植木鉢で育てるような趣味があるのか。崇高な趣味だな」

「お褒めに預かり光栄だな」

「……………」

「……………」

そして沈黙。

「ハハッ！」

「ハハハッ！！！」

「いや、お前思ったより面白いな、如月」

「お前もな。こんな話したのは久しぶりだし、純粋な笑いは久しぶりだよ」

「何でお前、面白いのに誰かと話したりしないんだ？」

「別に人間嫌いじゃないぜ？単純に人との付き合い方が分からないんだよ。それに」

それに・・・迷惑がかかるかもしれない。

「それに？」

「・・・・・・話すのは苦手だからな」

「嘘つくなよ。お前は詐欺師に向いてるくらいは言葉巧みだぜ？」

「ある意味的を射ているかもな」

「はあ？何言ってるんだお前」  
と。そこで、

「君ら、早起きだね」

と、声が入ってきた。

「・・・・・・木戸」

「やあ。おはよう」

「おはようございます」

「何か敬語つてのは新鮮な感じだね」

見ると、木戸の後方から真面目な男女生徒が来ている。そこには、橋田や神道もいる。

「皆起きたのか？」

「起こして、全員更衣室に行かせておいたよ」

「そうか。じゃあ、俺はこれで」

「え？あ、そうかい？じゃ、また後で」

俺は早々に話を打ち切って、無理やりとも言える形で食堂を後にした。

2日目：朝食（後書き）

Merry Christmas!

メリークリスマス！

Mary Kurushimimasu!

メアリーは苦しみます！

惜しい！

## 2日目・授業（前書き）

創造の反対って模倣なんだそうさ。

でも、模倣の反対って、独創って感じだよな。

生の反対は死だけど、

生きるの反対は殺すだとおもうんだよ。

## 2日目：授業

「待てよ！如月」

颯爽（と自分では思っている）と食堂を後にした俺の後ろから、羽賀が声をかけた。

「何で逃げんだよ」

「・・・別に逃げてはないよ」

「いいや。俺にはわかる。木戸のことを避けてただらう？」

「・・・優等生は苦手なんだよ。木戸のことが嫌いなわけじゃないけど、なんとというか・・・気まずいんだよ」

「あー。なんとなく分かるな。まあいいや。ところで物は相談なんだけど、授業サボらね？」

「・・・ああ。そういえば授業受けなきゃなんないのか。いやだな。もし僕が来世生まれるなら、霊長類で二足歩行、衣服を着て道具を使えるような生物に生まれる事にしよう。1周回ってきたね。」

「いいよ。面倒だからな。真面目に授業受けとくよ」

「そうか。俺はサボる事にしとくよ。進学はしないしな」

「しないのか？」

「ああ。里を継ぐんだ」

「里を継ぐ？農業かなんかか？お前、こんな街中に田舎から来たたのか？」

「あー、まあそんな感じだ。じゃあな」

と言って、上の階に向かって上がっていった。ちなみにうちの学校の屋上は生徒に解放されている。きつと、学校が「マンガやアニメみたいに屋上が開放されてない？上等だ！俺は解放してやんよ！」と、天邪鬼的な考え方を発信したに違いない。嘘の正直の正直なのだ。

そして、しばらくして授業開始のチャイムが鳴った。羽賀以外にも数人、姿が見受けられなかったが、サボリと言う事だろう。とはいえ、僕にも記憶があるわけではない。ほとんど居眠りに時間を費やしていたため、全く勉強をしていない自信があるのだ。これが神様から僕に与えられた試練なのだとしたら、一体僕は何を悪い事をし「起きろ、如月」

冷静な声に邪魔され、オチがいえなかった。残念賞みたいなものが僕の頭上から下に向けて血潮のように流れていく。嘘なのさ。

「如月。作戦会議だ」

「は？」

目の前にいたのは神道だった。

「もう6時間目とHRが終わった。あと30分で戦線が開始するぞうだ」

「ああ・・・了解」

「あと、追加事項だ。生徒側の授業によって、作戦会議を邪魔されるといふデメリットを解消するために、戦線が始まると同時に攻撃・・・つまり、時限爆弾を仕掛ける事は許される事になった。明日は、お前にその仕事を担ってもらう。いいな。否定しようとも、これは命令だからお前の発言なんざいちいち俺は聞かんぞ」

「がうがう」

「何を言っている？」

「冗談でやったことに本気でにらまれてしまった。余りやってると得ではなさそうなので、目をそむけるという方法で回避しよう。」

教卓を見ると、木戸が数人と会議のようなものをしている。

「アレは何してんだ？」

「今回の作戦だそうさ。武器を見たところ、救援物資が足りないように見られるから、保健室から物資を調達するようにとの事だ。残

り数名は、新しい設備が他に増えていないか、校内を探索するらしい」

「へえ……。まあまあ考えてんだな」

「……。如月。もう一度だけ質問する。お前は一体何を考えているんだ？」

「……。今日には分かるよ。神道ほどの頭脳があれば容易に理解できるだろうよ」

「……。チッ」

舌打ちだけして、神道は自分の席に戻った。

「さてどうなるもんか」

そう呟いたと同時に、エアコンのカバーが開く。

そして、食料品と武器が落下する。

ということは……。

俺の考えと同時に教室にあの音が鳴り響く。

【午後6時になりました。戦線を開始します】

2日目の戦線が始まった。

## 2日目・授業（後書き）

つまりは、動詞になるだけで受け取り方が変わる。

死をプラスと考えるか、マイナスと考えるかだよな。

僕はプラスだと思うけど。

## 2日目：負傷

さて、1日目に細かい描写をしてしまったが、2日目にその必要はなさそうだ。

今回は目立った出来事も無く、すぐさま時が過ぎさるための儀式、トランプすら遊び終わった。2日目だということにも拘らず、<sup>かかわ</sup>ドンパチやっている音もしない。午後6時からすでに、2時間が経過している。トランプの次はチエスとオセロに興じる事にした。ちなみに羽賀は「面倒だから昼寝する」と言って、机を2、3個引っ付けて簡易ベッドを作って寝始めた。

「チエックメイトだ」

「え・・・あ・・・いつの間に！」

と神道が橋田に勝利している。

「流石、神道だな」

「ええ。私たちが勝てそうな相手ではなさそうね」

俺と無花果は試合を始めている。オセロである。

「・・・貴様ら何をしているんだ？」

「オセロだけど？」

「貴様らのオセロは、白と黒の駒を縦に重ねてタワーにする遊びなのか？」

彼の言う通り、正式なやり方ではない。俺達は先にこのタワーを崩したほうが負けという、この世界はたった一人の人間のミスだけでいとも簡単に崩れてしまうという事を遠回しに表現した崇高なるゲームをしているのだった。最後のほうは嘘だみよん。

「もうそろそろ25枚だな」

「もう少しで崩れるわね」

ガッシャーン！

崩れてしまった。この世界はいとも簡単に以下略が証明された。

原因は、急に入ってきた数人の仲間（？）たちだった。負傷した面子が10人ほどやってきた。

「ど、どうしたの？」

橋田が心配そうに駆け寄る。

「……どうやら、こちらの動きを先読みされていたようだ……。保健室に10人ほどの手勢がいた……」

「それくらい何とかなるだろう？」

寝ていた羽賀が起き上がりこちらを向いていた。

「いや、こちらは防衛班と救護班だったため攻撃態勢が取れていなかった上に、向こうはそのご、さらに数人の先生でこちらに攻撃を仕掛けてきた」

「……チツ」

神道が動き出した。保健室は1階にあるので、階段を駆け下りるつもりなのだろう。

「おい、神道。木戸に知らせたほうがいいんじゃないの？」

羽賀が珍しく正論を言う。すると、負傷していたメンバーが

「木戸は今、俺達を逃がすために保健室前で戦ってくれている……。……できれば早急に助けにいったってやってくれ」

と伝えた。

俺達はダッシュで階段を駆け下りる。こういつとぎのための待機部隊だったはずなので、とりあえずは努力という方針をとることにし「チェストオオオ！」俺の思考をかき乱すように、銃器を構えた先生を羽賀が蹴り飛ばした。

「助っ人参上！」

「貴様……うるさいぞ」

羽賀の態度に本当に怒ったような顔で、神道が睨んだ。

「木戸……大丈夫か？」

俺は取り敢えず木戸に対して心配してみる。



2日目：負傷（後書き）

次回は禁句発表

2日目・禁句（前書き）

僕は生きたいと思っただことが無い。

## 2日目：禁句

「……君達……助けに」

「よし、逃げるぞ！」

そう叫んだ羽賀は、同時に、黒い玉を数個投げ飛ばした。それがゴトンという音を立てて地面にぶつかった。

瞬間。

プシュー、という奇妙な音を立てて、白い煙を巻き上げた。

「急げ！」

羽賀はそこにいた数人の負傷者を担いで、階段を駆け上がる。

「くっ……しまった！」

という先生方の声と、闇雲に打ち続ける銃弾の音が聞こえた。俺は気にせずに木戸に肩をかして、階段をあがった。他の待機グループも肩をかして、階段をあがっていく。

結果、死者を出さずに、逃げ切る事が出来た。

「話したい事はあるんだけど、取り敢えずありがとう」

「礼には及ばん。気にするな」

「おめえが言うのかよ」

木戸の言葉に、神道が反応し、羽賀が突っ込む。

「羽賀くん……。あれは一体……」

木戸が羽賀に質問する。

「あれ……。ああ、煙球のことか……」

「うん。あんなの武器には無かっただろっ?」

「俺、忍者の出家なんだ」

でーん。

ででーん。

でででーん。

でで（自重）。

凄い発言である。だが、さっき言っていた、「里を継ぐ」ってのも意味が分かる。里・・・忍者の里か。

「嘘だろ？」

「本当だよ。信じてくれよ、木戸委員長」

と、快活に笑いながら言った。

「で、木戸。話したい事とは何だ」

神道が思い出したように言った。

「・・・実は大変な事になっててね」

とあからさまに困った表情で言った。

「救護道具が圧倒的に足りないんだよ」

「だから保健室に言ったわけだ。しかし・・・」

俺が言った言葉に、

「結果、それで負傷者が増えてしまい、またも減ってしまった・・・

というわけか」

と神道が繋いだ。

「本末転倒という感じだね・・・」

橋田が続いて言う。

「よし。もう一度行こう。今度こそ、救護道具を集めてみせる！」

さっきの負傷者が言う。俺はそいつに語りかけてみる。

「・・・出来るのか？」

「ああ、今度は人数を増やしてな」

・・・。。。。。

「向こうの人数と武器の量が多かったただけだ」  
もう1人の負傷者も言う。

「油断していたと言うものあるよね」  
女も続けた。

コイツら……………。

「大人数で攻め込めば絶対に勝てる」

「無理だろうな」

俺は1人言った。

「……………なんだと？」

「無理だ。何度やって、今のお前らじゃ無駄だ」

俺が発言が終わると同時に。

生徒Aは俺の首に掴みかかった。

「何だ」

「何もしてないでめえに、何も言う資格なんて無いだろうが！」

「じゃあ、何かしてやるよ。お前らに絶望をくれてやる」

「何言ってるんだ？」

我慢なら無い。こいつら、自分達なら何とかできる思ってるやがる。

「行くぞ。救護道具を取りに行く」

俺はナイフを手に取り、拳銃をポケットに入れた。

2日目・禁句（後書き）

ソレと同じくらい、死にたいと思ったことも無い。

ならば必死こいて生きてみようと思う。

全力で生きたいと思いたいと思う。

## 2日目：勇気

あれからすぐに1階に下りた。残り時間が30分程度になっていたため、そこには2人しか先生がいなかった。

「おい。何かするんだろ？如月」

負傷者の1人が僕に向かってあざ笑うように言う。

「一体何をしてくれるんだか……」

「いや、僕は何もしない」

面と向かって僕はそいつに言い放った。

「何言つてんだ？」

「やるのは君達だよ」

僕がそう続けると、

「あんだ、馬鹿じゃないの？」

と別の女子が言った。

「お前何考えてんだよ！」

「頭行かれてんじゃないのか？」

「アホだな。相手にするのも馬鹿らしい」

と、ざわざわと騒ぎ始める。敵が目の前に居るのによくそんなのんきに居られるなあと、責任転嫁と他人事というあわせ技を使うことで現状を見ない方向性を確立した。

「皆落ち着いて……」

木戸が皆を制すように説得をするが、勢いは留まる事を知らない。

「黙れ」

一言神道が言った。その勢いに全員の勢いが負ける。

「……おい。如月。貴様何考えている」

「そつだ！お前何を」

「俺は如月と話している。お前は黙っておけ」  
もう一度神道がそう言っただけをいなした。

「……さっきもいったる？やるのは僕じゃなくてさっき、  
数で押すとか言っただけだ君ら」

「意味が分からん。何を考えているのだ」

「だから言っただろ？神道には分からないよ。僕の思っていること  
は」

そう言っただけ、僕は先生を見る。こちらを睨んで銃器を構えている。  
「羽賀。手伝ってくれ」

「あいよ。なんとなく、俺にも分かったぜ。お前が何がしたいのか」  
羽賀は俺の隣にやってきた。

「如月くん……」

橋田がこちらをみる。うーむ……小動物を思わせる。

「……多分だけど……私も分かるけど……気を  
つけてね」

「ああ。分かったよ。ありがとう、橋田」

僕はそう言っただけ、もう一度羽賀と一緒に先生を見る。

何の合図も無く僕らは走り始めた。

「如月。乱射の危険があるから気をつけるよ」

言っただけから羽賀は煙球を投げた。

「僕は右側の人のほうへ行く」

「了解。もう1人は俺が止めておく」

羽賀は空を飛ぶように空中を舞って、視界の左側へと消えていっ  
た。

煙球によって見えなくなった視界で「チツ」と舌打ちをした先生  
の方向から銃撃音が響く。僕は一々それらをよけるのが面倒だから  
そのまま真っ直ぐ走る。

嘘だよ。よけれないし、よけるほど怖くも無いからだ。

「すみません。先生。実験台にさせていただきます」

律儀にもお願いしてから、僕は胸と右肘の間で首を絞めるようにしてから、左手でナイフをその先生に首筋に当てた。

「ガ……」

息が止まり、恐怖で動きを止める。

「羽賀、下がれ」

「了解！」

そして僕は後ずさりで下がる。煙が晴れてこちらに銃を向けてきたもう1人の先生に

「はい。撃つたら彼が死にます」

と、宣言してそのまま下がる。

「羽賀……よく無事だったな」

「まあな。俺は忍者だから」

そう言って2人でそのまま下がる。

「如月君？一体何を……」

木戸が僕にそう言って疑問をぶつける。が、俺が答える前に

「まあ、見てろって」

と、羽賀が答えた。

「さてと」

俺はそのまま地面に座り込み、ナイフを首に突きつけたまま、肘から腕に変えて首を絞める。

「羽賀。僕のポケットから拳銃とって」

「あいよ」

俺の指令をすぐさま実行に移して羽賀は銃を手にした。

「おい。お前」

俺はさっきの負傷者を呼ぶ。

「な、何だよ」

少しビクツとしながら俺の発言に答える。

「銃。持てよ」

「は……はぁ？」

「ほい」

羽賀がその負傷者に銃を持たせる。

「ほら。殺せよ」

「え……？？」

「数で押せば殺せるんだろ？さっさとやれよ」

「い……いや、俺は」

僕はナイフを首を絞めていた腕を放す（同時に羽賀が代わりに先生の動きを止める）。そしてその負傷者の腕を引っ張って、先生の額に向けさせる。銃口が先生を向く。

「き……如月君!？」

木戸が止めようとする。が、  
「待て」

と神道がその木戸を止める。

「なるほど……。貴様のやりたいことがわかったぞ」と神道が僕に言うが、知ったこっちゃ無い。

「早くやれよ」

「う……」

「殺せるんだろ！やれるんだろ！勝てるんだろ！さっさとしろよ！」

僕はそいつを責めるように言う。

「……嫌だ！」

と、そいつは銃から手を緩めた。

僕は銃をもって立ち上がる。

「おい。さっき好き勝手言った奴ら……。お前だったな」

適当に指差す。

「あ、いや……」

「さっさとやれよ。誰でもいい。早くしろ」  
誰も動かない。

「早くしろ!!!」

神道、木戸、羽賀、橋田、無花果以外が下がる。まるで逃げるように。

「……如月君。どういうことだ？」

木戸が僕に聞く。

「彼はこう考えているのよ。『お前ら……人を殺せるのか』って無花果が答える。

そして

「お前らにその覚悟はねえだろ？」

と羽賀が続けた。

「彼は……だから待機部にいるんだよ。君らが殺せない以上、ただの足手まとい……だから」

橋田も続けていう。

「ふん……。俺には分からんわけだな。お前らは同意見だったようだが」

神道は俺達にそう言った。

「お前らは偉そうに自分が戦える。あいつらは戦わないって、見切りをつけて優越感に浸って、現実に目も向けずに虚構に走る。本当は僕ら待機部隊が覚悟が出来ていたって言うのにさ」

僕は彼らにそう言った。

「言つとくが、最初に約束したとおり今更待機部隊にはいけねえぞ。最初に如月が言ってる？あ、もしかしてここまで読んでたのかな？」

と、羽賀が言う。僕は暗黙の了解で受け流す。

「お前らに勇気があるのか？僕らみたいに、アイツらと戦つて勇気が楽観視するな。僕らの戦いは殴り合いや不良の喧嘩じゃない」

僕はさっき撃たれた銃弾の跡の部分の部分を思い切り手で叩いてから、皆に見せ付ける。

肩から血が流れていく。血だまりが出来る。手に赤さが残り、悲愴感を実感させ、怒りと恐怖を煽る。

「初めから殺し合いなんだよ」

## 2日目・勇気（後書き）

書いた当時の実情により、あとがき前書きは省略させていただきます。

## 2日目：消灯

誰一人として口を開こうとはしない。

さて、禁句発信しちゃったところだし、現実は見せ付けた。だつたら後は最終試験かな。

「君らは見てなよ」

僕はそう言つて目を覚悟の出来ていないメンバーを後ろ放つておく。

そして1人で前に立った。

「これが君らの見るべき世界だ」

僕は人質だった先生を解放する。当然、すぐに動き出して、もう1人のいたところへと帰る。

「そんなに時間も無いから、2人とも速攻でいくから」

僕はそう言つて前方に向かって走りこむ。

距離は大体6メートル。

「撃て！」

1人がそう言つて2人が撃ち始める。銃弾は俺の頬をかすめたり、俺の肩を食つたり、俺の右足を行動不能にしたりして頑張る。何と、使用者よりも銃弾が頑張ると言う事態に僕は感動の余り前に向かって崩れてしまった。

「うん、僕正直者じゃないから」

右足の痛みを放置してそのまま真っ直ぐ突っ込んで、さっき捕まえた先生とは違う先生を捕まえる。

「殺されたくなかったらうごくな」

と、感情のこもらない声で言いつつ、ハイ、ナイフでスパーン。  
ブシューウウウ！

と景気のいい音を鳴らしながら、空に向かって鮮血がバーン。  
流石首元。景気がいいね。

「さて、もう一人と行こうか」

僕は言いながらジロリともう一人目を見る。

あー。今何人引いてるかな。ま、いいけど。

「う、うわああ！」

先生が逃げ始める。当然、生徒が居る方向だ。

「ちッ！」

そのまま真っ直ぐ追いかける。

「くっそ………何なんだアイツ！」

先生が言いながら階段の方向へ。つまりはそのまま生徒の誰かを  
人質にして職員室へと走りこむつもりだな。ナイス推理僕。

だから何？推理できたらアイツの行動を止めれんのかな？いや、  
できまい。反語成立。僕、古典得意なんだぜ。こっ見えても。一体  
どこから嘘なのやら。

先生の目には橋田が映った。そしてその橋田を人質に選ぶ。

「く、くるなあ！あ？あああああああ！」

先生が人質を取ってから、僕に捕まるまでのリアクションである。

僕が何をしたかというと、

先生が人質を取る瞬間に、僕は空中を舞った。これで、来るなあ、  
という要求は不可能。

振り向いた瞬間、僕はそのまま先生の体を押さえ込む。そして、  
ナイフを首へと突き立てた。

しかし、今度は同じように鮮血が飛び出たりはしない。血を皆に



僕はその電球の殻を踏み潰してみた。

絶望に打ちひしがれた顔になった。まあ、及第点かな。

そんなことを思いつつ、やっぱり常に感じるのは。

やっぱり僕って普通じゃないよね。ってことだった。

## 2日目：会議

【12時になりました。戦線終了です。これ以上の攻撃は、こちらへの敵対と看做します】

昨日と同様のアナウンスで、みんなはクラスに帰ることにしたが僕は、

「あなたは服を替えてきたほうがいいわ。それを見るのは、他の人たちとしては酷でしょうから」

という無花果の意見を参考に、先に更衣室とシャワーを使い、制服を着替えた。

そして、それから教室に入ると、

「如月君。ちよつと……」

と、木戸に呼ばれた。

全員椅子に座って、黙っている。ふむ、一体何があったのかわからないな。嘘っぴー。

「何？」

「話してほしいんだよ。君の考えを」

「さっきいったる？ 皆には覚悟が足りない。昨日、その陸上少年が殺せなかった理由もそんなところだろう」

「ああ、それはそうだろう。だからそつちじゃない」

木戸は僕に言った。

「そつちじゃない？」

「僕らがどうすればいいかってことなんだ」

「……そうか。そんなのは、神道に聞いてくれよ」

「彼は何も言わなかったよ。俺以外の人間に俺と同じになるのは無

理だ……だとさ」  
なるほど。彼らしいな。

「木戸。君はどう思う？」

「僕は……皆が戦う……じゃないね。殺し合いに  
対して覚悟を持つしかないだろうと思う。先生方と僕らで殺しあわ  
ないといけないと言うのは……心苦しいけれど、少なくとも  
も僕は学級委員である限り、皆の命だけは守るつもりだ」  
「……なるほどね……」

思ったよりも強い覚悟だ。僕が来る前から話しはしていたようで、  
クラスメイト全員覚悟に溢れている。

「じゃ、それでいいんじゃない？」

「ダメだ。君の意見が聞きたい」

「何でだよ」

「待機部隊全員が納得していないから。そして、彼らは君に聞けと  
いった。それ以上何も言おうとしない」

……そうか。僕に丸投げ。最悪だな。と思いはしたも  
の、信頼されていると考えるのが花だる言う判断になった。

「……まだ、覚悟が足りないんだ」

「……」

「死ぬ覚悟と死を受け入れる覚悟だ」

僕の発言に皆の目が光る。

「僕の行動によって、これで先生方も油断はしない。攻撃態勢も完  
全に整ったはずだ。だとすれば、自分が殺されると言う事……  
・死んでしまうことも覚悟しなくちゃならない。同時に、他の誰が  
死んでしまったとしても、その所為で取り乱したり、落ち込んだり、  
自傷行為に走ったり、逃げたりしちゃだめだ。冷静にそれらを受け  
入れなきゃいけない」

「……………」

「それらの覚悟があるかどうか……………ってことだよ」  
僕はそう言って、席に戻る。

「皆……………やるっ」

すぐに木戸が言った。

「このままじゃダメだ。彼の言う覚悟を持って戦おう。これは戦争なんだ。殺してでも勝たなきゃダメだ。強制はしない。待機部隊はダメでも、新しい部隊を作ってその人たちは保護する」

「はッ。盲点つかれたな、如月」

羽賀が言うが、そんなことはない。僕はあえて盲点を残したつもりだ。逃げたい奴は逃げればいい。

「……………やるかね」

羽賀が立つ。

「やります!」

橋田が立ち上がる。

「俺は初めからそのつもりだがな」

神道は少しふてくされた感じで立ち上がりながら言った。

その3人の勢いに乗って、

「やるぞ!」

「おお!」

「頑張ろう!」

と、どんとどんと勢いよく立ち上がる。

いつの間にか無花果も立ち上がっていた。全く、前回とは皆勢い

も威勢も覚悟も違う。いい気なもんだね。

と、まあ僕も言えた口ではなく、いつの間にか立ち上がっていた。

### 3 日目・物語（前書き）

序章の続きだぜ。

まさかとは思つが、これより以前を読んでないとかないよな？

### 3日目：物語

これであらかた話は終わった。

振り返り期間は終了です。これからは物語が進みます。

それはつまり物語の予測が僕には付かないと言う事も意味している。

さて、序章のように爆発から始まった3日目。

俺達待機部隊はいつもどおり教室で時間を潰すことにした。かつたのだが。

「如月。俺が言えることでもないが、どうやら貴様は異常なようだな」

「……………」

皆が居なくなってから神道が俺……………だけでなく皆にも言い聞かせるような声で言った。

「2人……………殺したんだぞ」

「そうだな」

「俺とは違ってお前は普通の人間であるはずだ。普通は命の重さに耐えられず、5キロは痩せるぞ」

「そうだな」

「お前……………一体何者だ？」

「僕は如月幽鬼。冷酷な生き物だから、普通に考えたんじゃ僕を理解するのは難しいんじゃないかな？」

僕は他人事のように言っつてその話に幕を閉じた。

納得しかねているような顔をした神道も結局は諦めたように座り込んで、1人でポーカーを始めた。

昨日の僕の行動が戦線自体に何らかの影響を与えたのは間違いな

いだろう。先生方も、向こうからの攻撃の危険性を考慮しているよ  
うだ。ただ、僕の殺人を見ていたわけではないから、誰を気をつけ  
ればいいのかも分からないだろうが。

で、その影響というのは僕らにも関わっている。

例えば、何故か僕は英雄になっている。皆を救ったような目で見  
られる。しかしどちらかと言うと、目の前に絶望を置いて、「じゃ、  
後頑張れよ!」と言いながら消えていく予定だったのに、先生方を  
死体に変えるという見事な行動の所為で僕は地味な信頼を勝ち得て  
いる。

ただ、いい物ばかりでは当然無い。影響はこの待機部隊にもかか  
わってくる。待機部隊のメンバーからの視線も地味に気になる。ど  
ういうことだろう。僕が何かしただろうか。とか考えてみるが、推  
測としては、「まさか殺すとは思わなかった」とかそういうところ  
だろう。

一々気にする場合でもないので、スルーする方向性を利用して現  
実逃避という逃げ道を確保しておいた。

それにしても、1人1人が別々に暇を潰している。その空間はや  
はりとても静かな状態を保っている。いつもはうるさい羽賀は、忍  
者の修行にありそうな「せーしんとーいつ」をしている。座禅を組  
んで座っているの、僧とも取れるが。神道は1人ポーカー。楽し  
いのかどうかは不明。橋田はうちのクラスにいる亀を見て和んでい  
るようだ。無花果はといえば、オセロタワーを中止して、詰め将棋  
の本（どこにあったのだろうか）を使って、将棋の勉強中のようだ。  
で、僕は手持ち豚さん（なんじゃそりゃ）である。

「……僕、ちよつと外に出てくるよ」

「俺も行こう」

「ついて行くぞ」

「行きます!」

「行くわよ」

全員同時に動く。

「……………なんで？」

「お前がどっかに行こうとするからだ」

意味の分からん理由だな。

で。

「結局、全員で行くのはダメだろ」

っていう僕の提案を受け入れて、ジャンケン大会が始まった。

勝ったのは

「では行きましょう！」

橋田だった。

「何で橋田はついてくるんだ？」

「……………多分皆も一緒だと……………思っただけ……………」

「……………」

若干、弱そうな喋り方で僕を見る。小動物っぽい。

「……………質問があるんだ」

「質問？」

3 日目・物語（後書き）

これ、めっちゃ長くなると思いますよ。

3 日目・謎々（前書き）

どうして電車は砂利の上を通るのでしょうか!?

### 3日目：謎々

「質問？」

その言葉に僕は異常に反応してしまった。

それはつまり、僕に対して何らかの疑問がある。それはやはり2人の人間の殺人を行っておいて、冷静でいる僕に対する疑問……

「あの……」

どうする。僕はどう答えるべきなんだ？

「如月って……」

というか、皆同じ疑問を持っているのか？

だとすれば僕は困る。その意見全てに答えなければならない。

「実は……」

とすれば、ここは僕は嘘をついても受け流さなければならない！

「無花果のこと好きだよな？」

……

「は？」

「え？」

「それが質問？」

「うん」

「あ……」

何か拍子抜けだ。答える意味があるのか？いや、ここで口ごもると逆に怪しさを増す……。って、何の話をしているんだ僕は。本当にこれ、答える必要ないんじゃないか？

「やっぱりそうなんだね！」

「違つよ」

「じゃあ何で黙ったの？」

「拍子抜けだったもので」

「ふーん。ま、いつか」

「それが皆が思っている疑問？」

「え？うん。多分」

「……………マジかコイツ。」

絶対無いだろう。

「今からどうするの？」

「図書室から本でもとってこようかと」

「今からいかなくてもいいんじゃない？」

「ま、暇つぶしだよ……………ってか」

図書室に向かって歩いていているが、まだ橋田がついてきている。

「えっと……………？」

「はい？」

「質問は終わつたる？帰らないのか？」

「はい」

「……………」

何か端的な情報しかくれなさそうなので黙ってついていくことにした。

今は4階を越えたところ。5階に図書館はある。

そして5階に到着。図書館に向かうために廊下へ。

「！」

突然の行動に声が出ない。そのまま屋上に向かって上り、屋上と5階の間の階段の踊り場から廊下を見下ろす。というか、橋田がそうするよう体を引く張った。

「何だよ……………」

「誰か来ます。身長体格からして先生です」

「はあ？」

どうやって見たって言うんだよ。あの角度じゃ廊下は見えないだろうに。

と思つたが。

廊下の左側から先生が現れ、そのまま階段を降りていった。

「・・・・・・・・・・なんで分かつたんだ？」

「向こう側に放送室の扉があるよ」

「・・・・・・・・・・だから？」

「その窓ガラスに映つてた」

そんなもん普通見えないし、見えても気付かないよ。

「・・・・・・・・・・凄い目だな」

「まあ、私にも色々と事情があるんだよ」

珍しく自分から情報を口に出した。そして図書室に入った。

いくつか本をとって、俺達は教室へと帰つたが、その時も何回か

橋田に助けられた。

コイツは一体何なのだろう。

ただの生徒にしては異常だと、俺は客観的にそう思った。

3 日目・謎々（後書き）

そこに砂利があるから。

### 3日目：戦闘

教室に帰ってきた僕と橋田は中に入った。橋田が入り、僕が入る。「なあ、如月。ちよつと来てくんねえか？」

羽賀が提案には無理やり俺の手を引っ張る。俺は持っていた図書館の本を近くの机の上においてそのまま流れる。

屋上に連れて行かれた。

「何かようか？」

「ちよつと組み手しね？」

「組み手？」

「そ」

そして羽賀はブレザーを脱いで、入り口の上に置いた（マンガの屋上を想像してみよう。多分扉の上に小さいスペースがあるはずだ。そのこと）。

「この学校の不良とかは戦ってみたんだよ。全員に勝てたな。次いでに俺が居る間は勝手なことしないようにしておいた」

ああ、だからこの学校は治安がいいのか。

「でも、お前がそういうタイプだとは知らなかった。どうやら隠しキャラって事らしい」

「いや、僕は戦う型の人間じゃ」

「俺は里では毎日戦ってたんだ。こう見えても将来を囑望されてたよ。その所為で戦えなかったら体がなまるんだよな……っ  
てわけだ」

「だから僕じゃ相手になんないって」

「御託抜きで、問答無用だ」

羽賀は真っ直ぐ僕に突っ込んできた。

「どわ！」

僕はそのまま上に跳んで、羽賀がブレザーを置いたスペース（以

降、2階と呼ぶ)に上る。

「くそ……………」

僕もブレザーを脱いでそこにおいてから、もう一度降りた。

「やるってんなら全力だ！」

「いい感じだな！」

羽賀が右手を固めて、僕の顔面を狙う。僕は顔を最低限の動き、すなわち、首を曲げると言う動きで避けて、僕も右手を固め、腹部に向かって思い切り突く。

「……………は」

羽賀は笑う。そしてニヤリと笑ったまま、僕を睨みつける。

「やっぱり、単に強いだけじゃなさそうだ。生死をさまよったような人間の戦いかただよ」

「うっせ。余裕たっぷりかよ……………！」

僕は後ろに下がって距離をとる。

「って！」

羽賀がそのまま真っ直ぐ追いかけてきた。そして僕の頭を上から殴りつける。

「……………痛エ……………！」

「距離をとろうとすると負けるぜ？」

羽賀がそのまま足を振り上げた。僕の顎にヒットする。そしてその流れで踵落としされる。

「……………かはッ……………！」

体がコンクリートの床に落ちた。

風の強さが弱まる洋に感じた。つまりは抵抗がなくなっただって事か。

「……………思ったよりは強いけど満足は出来ないか……………」

「

羽賀が僕を見下ろす。

「……………痛みが混沌としてるよ……………」

「

僕は右手をついて、体を上に向かって起こす。

「・・・お。立ち上がるのか」

「丈夫な事が取り得なんで・・・・・・・・・・な」

「父親と母親に感謝しとけ」

そして羽賀が、右足を僕に向けて突き出した。

腹に痛みが走る。うむ、これで頭、顎、肩、腹の4タイトル制覇完了ですねこのやろう。

「くっそが・・・・・・・・・・」

それでも僕は立ち上がる。

「初めてだぜ・・・・・・・・・・こんなに立ち上がる奴は！」

「負けるのは癪しやくに障さわるからね」

僕に向かって、そのまま真っ直ぐ突き進んでくる。距離にして2メートルか。

体がきしむ。けど、ここで負けるわけにはいかない。

「食らえ!!」

羽賀が僕の腹を狙う。拳が腹に当る。

ドゴ、という鈍い音が鳴る。

「・・・・・・・・痛いんだよ、畜生!!!」

僕は羽賀の拳を受けたまま、直立していた状態から、拳を固めた。そして腰を入れる。

「マジかよ・・・・・・・・俺の攻撃受けて立ってんのか・・・」

「こっちからも行くぞ!!」

僕は思い切り羽賀の顔面を右拳で狙った。

「く!!」

羽賀は避けようと努力する。が、僕の拳が空を切ることはなく、頭の位置から胸の位置へと標準を変えて直撃した。

「くっそ!!」

「まだまだだ!!」

そのまま左足を勢いで突き出す。

それから5分間くらい戦い続けた結果、どちらもボロボロに・・・  
なるわけないだろ。僕だけメチャクチャだ。

「・・・俺と・・・5分以上戦えたのはお前が初めてだ」

それでも息切れはしている羽賀はそう言って、倒れている僕に右手を差し伸べた。

「・・・丈夫さだけが・・・取り得だったんだけど・・・」

僕はその手を取った。

「じゃあ、俺は帰るぜ。久しぶりに楽しかったぜ。また今度もやる」

「ああ。あ、そっいえば1つだけ」

「何？」

「父親と母親に感謝しろって言ったじゃん？」

「ああ」

「僕、両方いねえわ」

### 3 日目・迂闊（前書き）

迂闊も後悔も先には立たないよねー。

でもいいじゃん。それらが出るだけ。出来ない奴は愚かだよ。

### 3日目・迂闊

その後、軽く羽賀と軽く会話はした。まあ話すようなことでもないので割愛。

教室前の廊下に神道が居た。

「で、どうして貴様はボロボロなんだ？」

「僕が聞きたいくらいだよ」

「……まあ、いい。行くぞ、待機部隊としての仕事もしっかりしなければ」

神道が教室を出た。休む間もなく僕と羽賀もついていく。教室から無花果と橋田もついて来た。

「神道、どこ向かってんだ？」

羽賀が歩き始めてすぐに聞いた。

「作戦室だ」

「作戦室？」

「ああ。あの教室に盗聴器が仕掛けられたり、爆弾が仕掛けられたりする可能性を考慮して、これから本部を別の場所に置くそうだし、どこに、どうやって攻撃してくるか分からない。特に、教師の連中は爆弾はともかく、盗聴器ならどこにでもしかけられそうだからな」

「でも、空にしたら危ないか？」

「それも考慮してある。俺達と入れ違いで別の奴が入っている」

そういえば教室の中は見てなかったからな。

「で、結局どこなんだよ」

「校長室」

「……………校長室？」

「ああ。狭い上に入り口は1つ。隣接する部屋も無いから、そこから侵入される心配も無し。あの校長は心配性だから、職員室に入り浸っている。故にあの部屋には盗聴器と思われるものは無かった」  
「どうやら立地条件、中身の状態等調べてあるようだ。」

「だけど皆が皆そこに居ちゃダメだろう？ 数人は別の場所に」

「全て俺が考えて、既に準備は整っている。木戸には頼んでいる。周辺には常に授業も何もかもサボらせて、見張りを置いておく。そしてこの部屋には基本的には待機部隊のみだ。木戸が指導者だから、常に教室に置いておくことにした」

「……」  
「僕が考えている以上の方向性から全てを始めている。作戦には少なくとも思い当たる穴はなさそうだ。となれば、この作戦を受け入れない理由は無い。」

「や。来たね」

木戸がそう言って手を上げた。

「僕がココに来る事はもうないよ。僕は絶対に怪しまれないようにしなくちゃいけないからね」

「ちよつと提案なんだが」

羽賀が手を上げる。

「俺と橋田を見張りに置いてくれねえか？」

「え……」

羽賀の提案に誰よりも早く反応したのは、名前が拳がった橋田だった。

「そうだね。橋田さんは推薦で高校いけるし、勉強の必要は無いほどの成績だから……」

で、木戸は止まる。そして羽賀を見る。

「あの、何か泣きそうな顔してるんだけど、これって君の独断なの？」

「そうだが？」

「……………えっと、橋田さん、どうする？」

「……………分かった。やる」

そう言っって少しづらそうに橋田は答えた。

「そ、そう。じゃあ、僕はこれで。あ、保健室は思ったより楽に占拠できたよ。これでしばらくは大丈夫だと思う。教室同様、毎日追加されてるみたいだし」

それだけ言っつと、木戸はさっさと校長室を出て行っつた。

「ねえ」

無花果が突然口を開いた。

「校長の席は誰が座るの？」

どうでもいい内容だ。まあ、恐らく

「俺が座る」

ほらみる、やっぱり神道だ。

残る席は約4つ。ダブルソファ12つが、応接間のような形で置かれてるので、余裕を持って座ればやはり計4人というところか。校長の席……………つまり左右のソファの奥側に僕と無花果が座り、正面になる。

僕の隣に羽賀が座り、橋田はその正面。これで大方席は決まったことなるう。

「ところで如月君。聞きたいことがあるんだけど」

「何？」

僕が迂闊だつたと言わざるを得ない。この状況に慣れようとして

いたのか、或いは作戦がいい方向に向かっていたので安心していたのかはわからない。けれどこれは僕の責任だった。

「貴方、殺人鬼よね？」

無花果はまるで、「ここって日本であってるわよね？」という答えあわせのように聞いてきた。

### 3日目・殺し屋（前書き）

友達の携帯電話をならしてもならしても返事が無い。

皆さんもこまめに携帯見ようぜい。

### 3日目：殺し屋

「……………何言っただ？」

これが僕の最大限の反応だった。戸惑わなかった事とかまなかった事と2秒しか間が開かなかった事を自分の評価として最大にした。言い訳させてもらうと、僕としてはまさかそんな質問が来るとは思っていなかったのに、こうする事が出来たのは自分でも凄いのではないかと褒めたくなるほどである。できればこれから誰も反応しないでこうやって自分を自画自賛しつつ、戦線終了を待ちたい。というかこの現状から逃げ出したい。でも逃げたら大変な気がする。

だが、無花果の反応はあっさりしたものだった。

「そう。では私の間違いね」

彼女はそう淡白に言っただけのけると、校長室の部屋をあさり始めた。しかし彼女が納得しても、その他の人がそうはいかない。

「どういうことだ、無花果。どうしてそう思う」

神道は明らかに動揺……とまではいれないが、言葉数とスピードの速さから、焦燥に近いものを感じる。

「別に。主に勘よ」

「……………おい、如月。隠し立てはするな」

「だから違っただけ」

今回は見事に否定する事に成功した。

「でも、もしも如月が2人殺したのにそんなに気が参っていない理由も分かるよ……………」

橋田がそう言っただけを見る。別に軽蔑でも畏怖でもないし、怒りでもない。単純に納得している。もしかして彼女はアホなのだろうか。それとも天然……………？どちらにせよ、僕に対しては特に何の感情も持っていないさそうだ。

「大丈夫だつて、如月。俺だつて10人くらいは里同士の衝突で殺してるから」

軽く言うな。里同士の衝突つて何だよ。後、僕は君と違って、自分のために人殺ししてんだぜ？お前とは違うんだよ、羽賀君。というわけで

「僕は殺人鬼なんかじゃない」

と言いつつ切った。

「フン……。まあいずれ分かる事だろう」

神道はそこで会話をやめた。

現在、色々有りはしたものの、既に21時を回っている。

「あ、娯楽用品忘れた」

と僕が言つと、

「じゃあ取つてこい」

と神道が命令した。

「……分かつたよ」

と、僕が立ち上がると、

「私も行くわ」

無花果も立ち上がった。

「よし、ちよつと待ってる」

羽賀も立ち上がつて、扉に耳を当てる。

「……今なら誰も居なさそうだ。俺達が見張り担当するから任しとけ」

と、無理やり橋田も立たせる。

そして僕らは校長室を出た。橋田と羽賀はソファに座った。

ちなみに校長室は1階にあり、職員室と僕らの教室は2階にある。屋上は5階の上、図書室は5階である。また、1階はお客様対応のために、ロビーのようになっており、ソファが3つほど置かれている。

階段は各階に2つずつあるが、屋上への階段は1つのみである。

「何か用？」

僕は率直に無花果に言い放った。

「貴方・・・殺人鬼でしょう？」

「だから違ってる」

「ナイフの扱い方が普通の人ではないわ」

「単純に使い方知ってるだけだ。後、僕は人の命を軽んじてるんだよ」

「嘘ね」

「大体、僕が殺人鬼ならどうだっていうんだ」

「殺すわ」

「・・・・・・・・・・は？」

「・・・・・・・・・・何？」

「殺す。無花果の名にかけて」

無花果は反復した。

「お前・・・・・・・・・・一体何なんだ？」

「言ったでしょう？私の家系は正義の軍隊だったって」

「だった・・・・・・・・・・だろう？」

「そう。今、私達無花果家は私を除いて、滅んだ。そして滅ぶ前に私達は別の方法をとることにしたのよ」

そこで無花果は俺を睨む。

「私達、無花果家は殺し屋を名乗っている」

「こ・・・・殺し屋」

「そう。軍隊のように守るためではなく、犯罪者を殺す攻撃者として」



3日目・殺し屋（後書き）

42・195キロ「歩いた」ことある？

僕あるんだな。これが。しんどいぜ。

### 3日目・危険（前書き）

危険とは目の前にあるのだよ。

これと呼んでいるあなた方は危険かもしれません。

### 3日目：危険

「殺………し屋」

僕は反復した。

簡単に信じられる物ではないが、彼女の存在

正義の軍隊

とかは除いて、僕らと一緒に居られる事や僕と同意見を持っていたこと。そして今、僕を全力の殺意を込めて睨みつけている事。

「………どうなの？貴方は例の殺人鬼なの」

「だから………違うって」

「………まあ、いいわ。私は最後まで貴方を敵視し続ける。

そしてここから出た時にまだ貴方が生きていたら殺すわ。本当は疑いがある時点で私は殺すんだけど、多分今殺したら『裏切り』になつて私が殺されてしまう」

「自己防衛か………」

「私は死ぬわけには行かないのよ。じゃ、行きましようか」

と、啞然としている僕を放置して抜き去り、先に教室の中に入った。

「………あれ？君ら、来たのか？」

中には木戸と数人が居た。

「ええ。ちよつと用事があつて」

そう言つて無花果はランプやチェスのボードを段ボール箱の中に詰め込んで、

「はい」

と僕に渡すのは何故だ。

「貴方、男子でしょう」

例え殺人鬼とは言え。

そう言っていたような気がした。まあ絶対言っては居ないが。そして先に無花果は外に出た。

「何か、忙しそうだな」

中に居た木戸以外の生徒・・・ああ、陸上部の奴だ。名前が分からないけど。

「ま、それなりに頑張るよ。お前らはこれからどうするんだ？」

「職員室を占拠しようと思ったんだけど手間取ってな。今は取り敢えずは作戦会議中だ」

「なるほど。だったら武器の整理して置けよ。新しい武器の中に面白そうな物見つけたから」

「ん？ああ、分かった」

その声を聞いてから僕も教室を出た。

「あれ？」

無花果が廊下で教室の扉にもたれて待っていた。

「先に帰らなかったのか？」

「貴方から目をそらすわけにはいかないからね」

「なるほど。今度は待機部隊からの信用がゼロになりそうだ」

と、会話しながら、階段に向かう。

そして移動の最中（といっても、2階から1階に降りるだけだが）に

「私は初めから貴方を信用していないわ」

と無花果が言った。

「何で？」

まあ別に興味があつたわけじゃないが、コイツに怪しいそぶりを見せるのは危険そうだ。

「貴方からは私と同じ雰囲気を感じるの。人を殺したことがある感じ」

「・・・そうか」

「でも、それはつまり、貴方は100%自分のためじゃない事も分かるわ」

「……………」

「だからと言って許すわけではないけど」  
で、無花果は黙った。

そして階段を降りきって、廊下に出る。

「……………よし、大丈夫だぜ」

と羽賀が言い、

「気配は無いよ。今のうちに」

と橋田が言った。

2人も一緒に校長室に入った。

3日目・危険（後書き）

大変な事になりますよー（棒読み）。

**3 日目・希望（前書き）**

希望の反対は絶望です。

希望の類語は志望です。

希望の定義は願望です。

### 3日目：希望

【12時になりました。戦線終了です。これ以上の攻撃は、こちらへの敵対と看做します】

さて、結局その日（戦線にとって）大きな事態は特に無く、1日を終えた。

遅めの夕食（最近はこれが普通なわけだが）を済ませて皆は就寝準備を済ませた。

そしていつもならばこのまま寝るつもりなのだが、どうも寝れる気分ではなく、教室をでて僕は1階に降りた。そしてソファーに座った。

が、そこには先着が居た。

「……………よう」

「や」

神道と木戸だった。

「何やってんだ？」

「貴様も同じだろう」

僕の発言に神道はそう答えた。

「どうも気に食わん。俺と木戸だけで今行動している事項がある」「何？」

「ヒラオカが存在だ。アイツの正体が全く分からん」

なるほど……………確かに主催者側の行動が分からない。

「まあ、僕と神道君でしばらくは行動してみるよ。力が必要になったら皆も誘うからさ」

「そうか」

「本当は教師連中と連携して警察を探すことも出来るが……裏切りの危険性がある」

まあそうだよな。簡単に協力なんかできないはずだ。

「では、俺は寝る」

そう言っつて神道は僕がソファに座る前に先に教室へと戻った。僕は木戸の横……さっきまで神道が座っていたところに座る。

「本当は僕も殺すのは怖いんだ」

木戸が突然そう言った。

「でも君のおかげで皆、立ち上がることが出来たよ」

「……いや」

僕はお礼を言われるのに慣れていない。だからこれが最大の反応だった。

ちなみに言うのも慣れていない。

「じゃ、僕もそろそろ寝るよ。如月君も落ち着いてから寝なよ」

と木戸は立ちあがってその場を去ろうとした。

「……不思議じゃないのか？」

僕は思わずそう呟いた。

「……何が？」

木戸は僕の言葉に反応する。

「僕は人を2人も殺した。なのに冷静なのはおかしい。待機部隊の奴らにそういわれた」

「……」

「その所為で殺人鬼じゃないかとも言われた」

これは本当だけど。

「お前はおかしいとは思わないのか？」

「……」

しばらく黙っていたが、木戸は

「ふむ」

と一言言つと、もう一度ソファーに座った。

「確かに冷静なのはおかしい。殺人鬼だつて疑う気持ちも残念だけど僕も分かる」

「……そうか」

僕は肩を落とした。

「でも、いいんじゃないか？」

木戸はそう言った。僕はその木戸に目を向ける。多分訝しんでいる顔をしていると思う。

「君がどんな状態であつても、君が殺人鬼でも、君は僕らを救つてくれた。立ち上がらせてくれた。前を見せてくれた。だから君は100%ヒーローなんだよ。殺人鬼とかそういうのだとしても関係なくね」

そう言つて笑つた。

「……」

「それに殺人鬼だとしてもそれは今は僕らの力だ。一々考える必要は無い」

「……なるほどな」

「あ、別に、殺人鬼だと思つてるわけではないけど」

と、手を振つて弁明する。いや、そんなに必死にならなくても。

「……落ち着いた？」

「ああ」

「じゃ、僕は寝るよ。君も上がるかい？」

「僕はもう少しここで外を見てるよ。出れない以上、見るくらいはしたいから」

「そうか。じゃ、おやすみ」

そして、また階段に向かった。

「あ、木戸」

僕はもう一度引き止める。今回は対象に向けて。しかも思わず立ち上がってしまったている。

「何？」

「えっと……」

どういえばいいのか分からない。得意じゃないし慣れてない。から、取り敢えずストレートに言う事にした。

「ありがとう」

「……どういたしまして」

そう言って木戸は笑うと、階段を上がっていった。

それにしても、まさか退屈だと思っていた現状から逸脱して、戦線が始まって、皆を絶望にたたきつけたつもりが、どうして僕が希望を持たされているのだろう。

と、僕は思わず笑った。

3日目：希望（後書き）

願望 果たされしときより 希望となり、

希望 打ち拉がれしときより 絶望と化す。

絶望 打ち破りし者のみ 世界の望むべき者となり得る。

4日目：悠々自適（前書き）

はい、4日目突入。

これから先は本当の戦争っぽくしたいな。

#### 4日目：悠々自適

……うん。だから何だって言うんだって思つかもしれないが。

僕は今授業をさぼっている。屋上でゴロリと寝転んで、現状について考えている。

「だからといって僕と同じ行動をする必要は無いんじゃないか？」

「私は貴方から一時も目を離すつもりはないわ」

隣には無花果が居る。まあスルーしようかと思ったのだが、絶対に離れようと思わないだろう事が容易に想像できたので、もういいやという感じで、今は一緒に行動している。

というか、なによりも授業中に僕を睨んでいる視線が嫌だったのだが。

「それにしても平和だな」

「……」

「戦線中じゃなかったら本当に暇だな」

「……」

「僕らもゆっくり休むって事が必要なのかな」

「……」

「返事しろよ！」

「私は別に貴方の話し相手になるつもりはないわよ  
そう言っつて無花果は僕を睨む。」

コイツは本当によく分からない。

僕は上半身だけを起こして、体育座りでそこに居る無花果を見る。スカートが短いのできわどい。目を反らさざるを得ない。

「・・・・・・・・何？」

「別に」

僕はそのまますぐ一度寝なおした。

・・・・・・・・自由だ。何か自由って感じがする。

ただ、自由が幸せとも限らないようだ。特に僕の場合。

そもそも僕はその「暇」や「自由」を求めて「殺人」を始めていたはずなのに。

自分のために。

だと・・・・・・・・思う。

「人を殺すのってどんな気分？」

僕は突然そう訊いた。

「貴方も知っているでしょう？」

「だから違うって」

「そうね。貴方とは違うけど」

僕の発言に相変わらず淡々と答える。

「嬉しかったわ」

「嬉しかった？」

「ええ。ようやく他人の役に立ったと思った」

「他人の役にね・・・・・・・・」

「貴方も他の犯罪者同様、自分のためでしょう？だから貴方とは違うと言ったのよ」

「僕は犯罪者じゃないって」

僕はそう言って、上半身を持ち上げた。

「いつまでそういうつもりなのかしらね。まあいいけど」

そう言って今度は無花果の方がその態勢から横になる。

「……別に庇うわけではないけどさ」  
「何？それは犯罪者と認めるってこと？」  
「だから庇うわけじゃないって」  
僕はもう一度否定してから、言った。

「殺される人も『他人』だ。そいつも人だ」  
「……」

「そして死んだその人の関係者には悲しみくれる。そしてストレスを溜める。さらにそれは殺意に代わる。その連鎖が始まる。もしかしたらそれは帰ってくるかもしれない。でも終わることはないんだ」  
「何が言いたいの？」

「他人を守る事は他人を殺す事なのさ」  
そう言っ僕はもう一度寝た。

「そのままね」  
「その通りだ。でもそれ以上の意味がある」  
僕はそう言っ空を見上げる。

「それにしても自由って感じだな」  
「……戦争したい」  
「でもお前一度も戦ってないよな」  
「……」  
「実は弱かったりして」  
「……」  
「だから無視す」

……寝ていた。叫び声を止めた。  
そんな優しさを与える必要性はないが、見たときにはただの少女  
だと思えなかった。

「……なんだかなあ……」

静かな空間に少し小さな寝息。  
悠々としている。

殺す側と殺される側が二人とも横になり、さも恋人同士になっている状態を見た神はどう思うことだろうか。

いや、だとすれば何ぼさっとしてんだ。さっさと助けると言いたい。

僕もそう思いながら眠りについた。

#### 4日目・悠々自適（後書き）

本当の戦争は修羅場くらいしか見たことないけど。

4日目：前途多難（前書き）

前途多難で空前絶後、奇奇怪怪だから前途洋洋！

#### 4日目：前途多難

【6時になりました。開戦です】

いつも通りの放送によって戦線が開始したがその後すぐに、

【前回の戦いにより優劣がつかまりました。現在、優勢なのは3-2です。よって救護用品、武器、食料品の優劣をつけます】

それだけ言って音声が復活する事はなかった。

そしてその代わりのように、エアコンのふたが開いて物資が届き始めた。

「じゃ、行きましようか」

無花果は僕を見ていった。

「僕と一緒に行かなくてもいいだろ？」

「私は貴方から一時も」

「あー。分かった分かった」

これだけ見ると恋人関係だな、本当に。昔は好きだった女子に狙われる男子。意味分からん。

だがこれから先しんどそうな人生。前途には難しいことが多いです。

渡る世間は鬼ばかり。

見張りを担当した羽賀と橋田の2人は授業だろうがなんだろうがいつも1階のロビーのソファで校長室の見張りを担当し、誰かが入るのを見れば探索部隊に連絡する。武器の中には盗聴器や隠しカメラ、時限爆弾等に対する探査機もある。教師側は盗聴器等をあらかじめ仕掛ける事は禁止されているので何ら問題はないが、念のため

めである。

「ん。来たか」

羽賀がこちらを見ずに言った。

「よく僕らってわかったな」

「お前らの足音の立て方は特殊だから」

「特殊？」

「忍者と一般人の間。音を立てないように努力しようとしている感じだな」

「……なるほど」

「それもそうね」

と2人して彼の言い分に納得してから校長室に入った。

「や」

「よっ」

中には橋田と神道が居た。

2人して裏向きにしてトランプを広げている。

「何やってんだ？」

「神経衰弱」

橋田がそう言っって右手の30枚くらいのトランプを見せた。

「俺が実験しているんだよ」

と神道が言う。

「何の実験だ？」

「1度だけトランプを全て表向きにして置き、裏返す。それだけで神経衰弱だ。今は1度も失敗してない」

「実験結果は？」

「どつやらコイツの目の力は脳にも影響を与えているようで、瞬間記憶能力も持っているようだ。コイツの目の力は計り知れないな」

一連の話を聞いて僕が感じたのは、

「あっそ」

と淡泊だった。

「これから貴様らの能力も随時研究するからな。覚えておけ」

「「忘れた」」

期せずして僕と無花果の反応が一緒になった。これが巷で噂の男女関係を深くするための合言葉「運命」なのだろうか。まあ、間違いない勘違い類だが。

「僕らは絶対ここにいないといけないのか？」

「1番ココが安全だろう？」

「それはそうだけど、僕は窮屈なのは苦手なんだよ」

「ならば、屋上に行けばいい。それくらいは大丈夫だろう。お前ならな」

「そうさせてもらうよ」

入ってきたばかりだがそのまますぐに身を翻して校長室を出た。

「貴方には窮屈な方がぴったりよ。牢屋みたいで」

屋上へと向かう僕に相変わらず、無花果がコバンザメのようについてくる。

「だから別についてこなくてもいいって」

「私は」

「一時も目を離さないんだろ？分かったよ」

僕はそのまま階段を上る。何の会話もなく。

次に会話したのは5階だった。屋上へ上る直前。

「……………無花果。僕はさ、群れるっていう行動は苦手なんだよな」

「そ。私はまあまあ好きよ」

「なぜかというと、団体行動が苦手なんだよ」

「貴方らしい解答だけど、要領を得ないわね。何がしたいの？」

「だから僕は」

僕は両手で4階と5階の間の踊り場と5階廊下を指す。

「集団相手には向いていないんだ」

そこには戦争態勢を十分に整えた教師連合が居た。何か「動くな」とか「悪いけど殺すね……」とか先生方（問わず）が言っている。

本当に邪魔ばかり入る世の中ですね。

「そう。で？」

「無花果のやり方を見てみたいなって」

「ダウト」

ばれた。単純に戦いたくないだけです。

「まあいいわ。私も死にたくないし」

そう言っつて、無花果は自分の十字架とハートとスペードのネックレスを右手で握った。

「任務遂行。あなた方を殺します」

無花果はそう言っつて強い目で全てを睨んだ。

4日目・前途多難（後書き）

唯我独尊が座右之銘なら孤影悄然で絶体絶命！

#### 4日目・生殺与奪(前書き)

生かすも殺すも僕のこの手に掛かっている。

奪うも与えるも僕の意志に掛かっている。

#### 4 日目：生殺与奪

「さっさと始めましょうか」

そう言つて、無花果は廊下の先生に向かつて動き始めた。

「ちょ、待った!」

僕が叫んだがもう遅い。

無花果が動くということは、自然、教師連中は攻撃されると身構えたりこちらに攻撃したりする。そしてそれらの対象は僕でも有るのだ。

人数は計5人。廊下側に2人。機関銃が1、刀が1である。そして踊り場には銃が3人。

そして、動き始めた無花果には機関銃。残りは全て僕に向く。

「くっそが!」

僕は3人の銃撃を避けるために廊下へと逃げる。

「落ち着いて!その銃はスミス&アンソウウェンS & a m p ; W M 3 9 よ!」

「んなもん言われて分かるわけないだろう!!」

一般人がんなもんしるか!いや、一般人ではないけどそういうことではなく。

後ろから数発撃たれる。当たらないように体を低くして僕は廊下を走る。そして教室に入り込む。

「装填数は8 + 1!」

その教室の外から声が聞こえる。

「表記の意味が分からん!」

更に撃たれる。教卓を盾にして銃弾から身を守りそして教室を出る。刀を持った男の先生(剣道部の顧問かな?)もやってきた。

「とにかく9発だから!」

僕の正面で、高く飛び上がって機関銃を避けている無花果がこちらを心配して言う。

「数えてねえし!」

正直に無花果に言うつと、

「もう!」

という珍しく女っぽい反応をして、降りてきた。

「銃、貸すから。頑張つて」

言いながら僕に先生方と同じ銃を渡すと、機関銃の弾を避けるために高く飛び上がった。

「つて!」

僕も避けなきゃいけないってことじゃん!

僕は彼女ほど身軽ではないので、そのまま教室の方へと転がり込む。

目の前には先生方4人が集合。

「あ。初めからこうすればよかった」

僕はナイフを取り出して、

刀を持った先生の首筋に切りかかった。

「なッ!」

先生は予想外の行動に驚き、一步下がって避ける。

が、体格差（残念ながら僕はどちらかと言えば小柄なのである）に気付いたのか右手で僕の首を掴んだ。

「よっし!捕らえ」

僕はその脳天に銃を発砲した。返り血が服と肌につく。

教師の大きな体躯は教室の床に倒れた。

「.....!」

その場で初めて「死」を見た女教師2人と男教師1人は、動きを止める。

まあ、期せずしてついた血を利用してみようか。

「……………ハハッ!!」

多分、今僕は凄く怖い笑みを浮かべている。先生方の青ざめた顔がその証拠だ。

「行くぞ」

僕はそう言っただけナイフを構えた。

「う、うわああああ!!」

「いや……………!!」

「きゃあああああ!!」

という3人の叫び声が上がって教室を出て行った。

「無花果!そっち……………行っ……………た……………」

廊下の無花果を見て、僕は驚愕した。先生方もさらに止まっっている。

「準備完了」

機関銃を持っていた先生の体を踏みつけて、機関銃をかまえている。

「私の戦い方は相手の武器を使うこと」

そう言っただけ機関銃を見せびらかすように言った。

「MP40 少し古い型の短機関銃……………装填数は32だったかしら」

と(描写は割愛の)機関銃を構えた。

「使い慣れていないから、如月君気をつけて」

「うおわ!!」

「気を」のタイミングで撃ちはじめた。こいつは本当に何考えているんだ!

僕は精一杯の努力で教室へと転がり込んだ。

そのまましばらくして、銃撃音が聞こえなくなった。

「……………凄まじいな」

廊下や壁には数えられるほどしか弾痕はなく、ロッカーに刺さっているのも少ない。窓ガラスやコンクリートが壊れているのは目に入るが、それよりも酷いのは教室の前で血溜まりを作り上げている教師の姿。体中に穴が開いている。

凄惨な光景である。本当にコイツは何て事をしたのだろうか。

それを見てから無花果を見る。

無花果は頬をコンクリートか窓ガラスか何かの破片で切っている。

そして、笑顔で機関銃を持ったまま言った。

「……………快……………感……………!」

「セーラー服じゃないけどな」

僕はそう突っ込んで、溜め息をついた。

#### 4日目・生殺与奪（後書き）

最後の部分は

「セーラー服と機関銃」です。昔のドラマです。

最近の中学生は知らないんじゃないかな。

僕が知ってるのが奇跡だろう。

4日目・時期尚早(前書き)

・・・うん。

何か早いんじゃない？

#### 4日目：時期尚早

屋上。

あれからすぐに屋上の2階へと上がった。

そして相変わらず横になる。

「お前、本当に殺し屋だったんだ……」

「信用してなかったの？」

「まあ……」

「じゃ、これで証明できたわけね」

先ほどまでの事件はそれで終わらせ、

「それにしても明るいな……」

と、僕は呟いた。

「今はまだ7時よ。3月も下旬なんだからそれは当然なんじゃないかしら」

「『まだ』と『もう』のように人が感じる物の違いは良くある。』

ちよつと『や』少し』とかもそれに値し」

「うるさい」

「はい」

何かよく分からない関係性が出来てしまった。

まあ冬至も過ぎた事だし、それなりに明るいのは当然だろう。

「なあ。お前なら教師達を全員殺してこの戦線を終わらせられるんじゃないのか？」

「それは貴方もそうでしょう？殺人鬼という点を除いても貴方にはその才能があるわ」

「才能ね……」

全く嬉しくない。ていうかむしろ嫌だ。

「で？どうしてそうしないんだ？」

「私は『犯罪者』しか殺さない。だから私達に死傷者が出た場合、

障害又は殺人事件として処理して、私の殺人対称にする。まあ所謂、正当防衛に近い形で殺すわ」

「なるほどな」

「貴方は？」

「僕、人殺し嫌いなんだ」

「嘘」

「バレた」

簡単なやり取りで僕は会話を終了させる。

「で？正直に言うつもりは？」

「僕は元々隠れ里に住む忍者で」

「羽賀君のことは今はいいわ」

「僕は目立つのは好きじゃないって言うか……。1対3までが限界なのさ。殺したことはアレが初めてだしね」

「そ。やっぱり簡単には口を滑らせてはくれないわね」

「鎌かけたのかよ……」

「当然」

何かドヤ顔になった。ムカつく。

「その気になればコレ、すぐ終わりそうなものだけど」

「どうして終わらないのか……。それが疑問ってところかしら」

「まあ三割」

「七割は？」

「青春してーなつてのが二割。いつまで僕は殺人鬼の汚名を着続けるのかなつてのが四割。後、この幸せな気分はどれくらい続くのかつてのが一割」

「幸せな気分？」

「僕には関係ないからいいんだけどね」

「気になる発言ね」

「そんな事より」

僕はそう言っただけでそれに関しての言及を避ける（ちなみに幸せな気

分とは、女子と2人きりである事ということにしておく。

「まだ、終わらせるには時期が早いような気がする」

そう言っ僕は寝返りを打って、無花果が座っている方向とは逆側に向く。

それにしても涼しさと暖かさの真ん中で気分が良い。

僕はこのまま眠りに「ついている場合じゃないぞ、如月」

何者かから心を読まれてしまったようで、その人物の声がある。

下か。

「神道」

「負傷者だ。俺達の出番だぞ」

「.....」

どうも幸せな気分ってのは長く続かないらしい。

#### 4日目・形勢逆転(前書き)

それは生徒なのか、それとも、先生なのか

#### 4日目：形勢逆転

「負傷者つてことは死んでないんだよな？」

僕と無花果は2階から飛び降りる。

「まあな。ただ、人数が人数だからな」

「何人なの？」

「14人」

「はあ！？」

思わず叫ぶ。

それつてつまり……。

「待機部隊が5人。全員で32人。負傷者が14人つてことは……

……」

「戦線に今居るのは半分以下つてことね」

僕の言葉にそう付け足して、無花果は、

「どこ？」

と訊いた。

「3階だ。どうやらそこで襲撃用意をしていたようだな」

「分かったわ」

それだけ訊くと、無花果は

「……え？」

消えた。

間違いなく消えた。無音の境地である。

「な、何者だアイツ！」

何か敗者の捨て台詞のように神道が言う。

うーむ。言わないほうがいいような気がする。

俺達はそのまま5階に向かって走る。

5階について、神道が言う。

「おい。上ってきた時も気になったが、この惨状はお前の仕業か如月」

「もう1人の方。先生の機関銃奪って、全員又ツ殺した」

「……本当にアイツは何なんだ」

そう言って神道は走って階段を降り始めた。

「……」

僕は少し黙って考える。

そして教師達のところへ。

「銃を借りまーす」

3人の銃を奪って、1つの銃に入るだけ弾を装填してみる。

「……よし」

僕はそう呟いて、せかされる前に階段を再降下し始めた。

そして、3階に着いた。

「……」

「確かに、こりゃ14人も死ぬわけだ」

僕は前を見る。教室1つ挟んだ距離だ。

銃を構えた先生が30人。

確か、初期時に40人だったから、僕が2人、無花果が5人殺したので、残りは33人。となれば、今ここにいる30人を除いて、別に3人いるはず。

って、無花果はどこだ。というか他の奴らは？

「他の奴らは全員、教室で待機させてある」

「ってことは僕達だけじゃん」

「そうだ。だから？」

「だからって」

「俺がいるし、お前もいる。無花果もきつと居る。どこに問題がある？」

「……根拠のない自信だ。しかも余裕顔。」

「言っておくが躊躇はないぞ。すぐにでも殺す」

「あ……。拒否」権はないだろうけれど、一応言ってみる。

「如月」

小声で神道が言う。

「何？」

小声なので、僕もそれに応じた対応を取る。

「先ほどの負傷者達は、その教室の全てから爆弾やナイフが飛んできた事によって、火傷や傷を負った。恐らく、向こうの残り3人は、その教室にいるんだろう」

「……てことは俺達の後ろの教室にも？」

「あそこだけは確かめさせた。アレだけは大丈夫だ」

「了解」

僕はそう言って、

咄嗟にその教室に向かって走った。

示し合わせたかのように、同時に神道も走る。つまり2人とともに敵に背を向けた状態だ。

「あ、待て！」

いやいや貴方のほうこそ待ってくださいよ鬼ごっこで待っていわれて待つ奴居ないでしょうって言うタイミングで銃弾メチャ来たよ向こうは機関銃備え付けですかこの野郎！！！！

一気に言い切るような形で僕は心の中で叫んだ。

これどうすんだよ。どうやって戦えって言うんだよ！！！！

4日目・形勢逆転（後書き）

如月たちの危機に現れるのは『ヒラオカ』

……うっそです。

4日目：一殺多生（前書き）

意味は物語内で紹介。

#### 4日目：一殺多生

「コレどうすんだよ！」

「俺に任せろ」

神道はそういうと、教卓の中から、何か取り出してきた。

「それって……」

「手榴弾。グレネードでも何でも呼べ」

「グレネードは？」

「グレねーど！」

と、神道は僕の駄洒落に付き合いながら、それを前方に向かって投げた。

うわ            ボカーン

という形で、煙が舞う。

「何でこの部屋に、そんな物置いておいたんだ？」

「俺の頭に掛ければここらで何か仕掛ける事は分かっていた。恐らく、職員室の上の教室で待ち構えるだろうと考えたから、この教室にだけは、何も置かない。そう考えて昨日のうちに武器を仕込んでおいた。助かった13人はココに合った武器を使って逃げたんだ。さっきな」

「僕が来るまではいたのかよ」

「じゃ、さっさと逆転といくか」

僕に武器を投げて立ち上がった。

形勢逆転の逆転か。しいて言うなら、現状復活かな？

「それでも勝てるほどじゃないだろう？」

「いや、見てみる」

僕にそう言っつて、神道は外に出た。

「……………!?!」

そこには、死体はない。けれど、先生の姿は5人しかなかった。

「……………どういうことだ?」

「ダミーだよ、ダミー」

「ダミー?」

「俺達に勢力で勝とうとしたんだろ? それこそ、本当に『勢い』  
だけでな」

「なるほど……………」

そう言っ僕は取り敢えず納得する。

「でも、教室の中からの攻撃ってのは?」

「スイッチ式の罠だ。武器の中にあつた」

「そうなのか?」

「ダミーに関しても、プロジェクターが有つた。どうやら科学とい  
う点においては、世間以上のものだな」

「は……………」

何に驚くつて、コイツそついうのをいつ見ているんだよ。俺達と  
違つて常に校長室にいるのに。

「クツ……………。退散だ!」

先生方のうちの1人が叫んだ。それに応じるように階段の方向に  
逃げる。

「逃げられる」

「大丈夫だ」

神道は焦るわけでもなく、そのままそこに立っていた。  
するとどうだ。階段に逃げた人たちが帰ってきた。

「……………」

「さて、どう殺したのか」

そこに居たのは無花果だつた。

「時間が掛かったわ。ばれないように武器を盗むのって大変ね」  
彼女は銃を持っていた。……あ。

僕は腰を確かめる。

……ない。

「僕から取ったのかよ……」

「そうよ」

無花果はこちらを向いて笑った。

「さて、殺すか」

神道も銃を構える。というかコイツメチャクチャ銃が似合う。何か警察官みたいな感じだ。

僕も神道から受け取ったほうの銃を向けた。

「もしかして、この間の2人や調査に行った5人を殺したのも、お前らか」

教師の1人が聞く。

「いや。それは全部、」

神道が答えようとしたので、

「神道くんがやりました」

と、何故か息びつたりで僕と無花果が答えた。

「……まあいい」

そして。

神道は銃を撃った。

何の躊躇もなく。

次いで、無花果が撃つ。

これで2人死んだ。

この間2秒。

「きや」

「うるさい」

僕は叫び声は嫌いだったので、叫ぼうとした女教師を撃ち殺した。何かこんなことばかりだと、僕らは標準的な人間じゃない事を痛感する。

「く、くっそ！」

男の教師が、動いて、無花果を人質に取り、

「来るな！来ると撃つぞ！」

と脅してきた。もう1人の先生もそちらに近づく。

「く……」

神道が躊躇する。先は何の躊躇もなかったのに。  
で？

「だからなんだ？」

「は？」

僕はそのまま近づいていく。

「それが何の意味があるのかって言ってるんだ」

「う、撃つぞ！？」

「撃てばいい。殺せばいい。それが正解だ。そもそも人質とつてま  
で生きようとするその姿が醜い。僕らはそんな事に一々悩まないぜ  
？」

「お、おま、お前……正気か？」

「ああ。正気だ。1人でも多く殺すんなら、1人くらいいいさ。無  
花果もそれでいいはずだ」

一殺多生。

1つの犠牲で多くの命を救う。

「殺すぞ」

僕は銃を構えた。

「や、やめろ！」

人質を取った教師は僕に銃を向けた。

パン！

瞬間、その教師の頭から、銃弾が抜けた。

無花果が顎から銃を撃つたのだ。

「……酷いこと言うのね」

「死んで欲しい奴ランキング第1位だからな」

その会話を済ませると、その教師はズルリとすべるように廊下に落下した。

「お前らは鬼か」

と、神道の言葉を受けて、僕らはその場から一步下がりに、

「ひ……」

と怯えている、残った教師を睨んだ。

「さてと」

「どうした」

「ものかしら」

4日目：一殺多生（後書き）

こういつ文章書いていると、

自分は本当に素人だな・・・って痛感させられます。

#### 4日目・一生他生(前書き)

これは造語。

一殺多生の文字をもじってみた。「多」を「他」にしているものも  
わねっ。

#### 4日目：一生他生

「さつさと殺していい？」

無花果が物騒に投げかける。

「やるなら僕だ」

と僕がナイフを構える。

「私の獲物よ」

「僕がやる」

「貴方はなんでもないでしょう？」

「お前は僕の事を殺人鬼って言うてたじゃないか」

「何？もしかして認めるの？」

「認める以前の問題だ。つーか、認めたらここで譲るのか？」

「……まあいやね」

「ほら見る」

「埒が明かないわね」

「明かないな」

つてなわけで。

「神道。どうするんだ？」

「そうだな」

そう言っつて神道が考えて、

「コイツは生かそう」

「「えー」」

「うるさい。それ以上口を開いたら殺す」

「「やるもんなら」」

という会話で終了した。

「以上だ。とつとと帰れ。5秒以内に失せろ」

「は、はい!!」

そして階段に向かってそれこそ落ちるように階段を降りていった。  
ってか落ちた。

「……で、何で逃がしたんだ？」

「特に理由はない。単純に向こうに恐怖心を煽りたかっただけだ」

「それなら関わった奴ら全員殺したほうが良かったんじゃないか？  
だって俺達が危険人物だってばれたわけだし」

「そうだな。でもそうじゃない。それは逆に、他のメンバーに対する意識を逸らせるんだ。予想外からの奇襲を仕掛けられる」

「計算高いわね」

「褒め言葉と受け取っておく」

そう言っつて神道も階段を降り始める。

まだ20時にもなっていないが、戦線にとっての危険はこれから先は何一つなく、4日目はこれからにそこまで死傷を与える事はなかった。

と、思っていた。

5日目：人間万事塞翁が馬（前書き）

人生、思いがけないことが幸福を招いたり、不幸につながったりして、だれにも予測はつかないということ。  
だからやたらに喜んだり、悲しんだりしても始まらないと言う事。

## 5日目：人間万事塞翁が馬

次の日は、僕は相変わらず屋上で過ごしていて、無花果もついできた。そして、神道もついできた。

そうになった理由について少し話しておこう。

「僕、屋上行くよ」

「私もついていくわ」

「勝手にしてる」

と神道はいうのだが、

「おいおい、最近お前ら2人で何してんだよ」

と羽賀が突然言い出した。

「僕が行こうとするところについて来るんだよ」

「そんな言い訳が通用するわけ無いだろ。……まさか！」

羽賀がそう叫んだ。

「……お前ら……そういふことが」

「いや、違ふと思うわ」

「やっぱりそうなんだね!!」

橋田までテンションを高くして叫ぶ。しかもワントンポ遅い反応だ。

「違つて!!」

「じゃあ証明してもらおうか……」

「羽賀……。アホか」

「証明」

「……びびらせて」

「簡単だ。今日一日、行動の全てに神道がつく」

羽賀がそういふと、

「は？」

と神道は珍しく間抜けな声を出した。

「俺と橋田はここで監視しなくちゃいけないからな。だから神道がついて、疑いを晴らさなければならぬからな」

「どうしてこの俺が……」

「だーかーら！ な！ 俺と橋田はここで監視を」

「俺が協力する理由は無い」

「よし！ わかった。これは俺と橋田の貸しにする」

「え！？ 私も！？」

「だから今回は。な！」

「……いいだろう」

以上である。勝手な妄想で話が進んだ上に、僕らは余り話しに介入していない。全く……。迷惑な話である。取り敢えず戦線が始まるまではこうやって寝転がっておく事にしよう。

「……なあ。俺、帰っていいか？」

突然神道が言い出した。

「どうぞ」

「ただ、羽賀君や橋田さんに怒られても私は知らないわよ」

「……アibaイ証明してくれはしないか？」

「いいわよ。但し」

と無花果は僕の横に座ったまま、僕は寝転んだまま

「貸しで」

と同時に言った。

「……仕方あるまい」

と神道は言ってから、屋上を出て行った。

「暇だ」

「暇ね」

「何か無いのか？」

「そうね。私達が昨日、逃がした女教師の対応について話をしても

いいかしら。昨日から気になっているのよ」

「いいよ。どうせ暇だからね」

「で。彼女は恐らく私達のことを話すわよね。そうすると私達が狙われる」

「そう………だな」

「とすれば戦つのはどうやら私達ということになる」

「ああ。だから？」

「私達は校長室には出入りできないわね」

「あ………なるほどな」

「それに今も監視されているかもしれない」

「………マジか。」

「気配は感じないから監視されていることはないかもしれないけれど、ね」

「そう言つて無花果は立ち上がった。僕も次いで立ち上がる。」

「何処かへ行くのか？」

「もう6時になるわ。そろそろ戦線へ行きましょう」

「そうだな」

僕はそう言つて屋上を降り始めた。

そして戦線5日目の今日、僕は絶望的な状況になってしまつ。

4日目のことが僕らに返ってきたのだ。

それは帰ってきたのか、還ってきたのか。僕にはもう分からない。

人間万事、塞翁が馬。

何が僕らにどう関わってくるかは、分からない。

それがいいことか、悪いことかさえ。

5日目：人間万事塞翁が馬（後書き）

そして、まだ始まってすらいなというところ。

**5日目：策士策に溺れる（前書き）**

考え方はその裏だ。

全てのパターンを把握しなくちゃ僕らにこれから生きる道はねえ。

## 5日目：策士策に溺れる

戦線開始の合図がいつもどおりあり、今回もこちらが優勢としていただいた。

「今日はどういう作戦なんだ？」

僕と無花果と神道は校長室以外の場所で話をしていた。僕らは間違いない監視されている。どこからか視線を感じるからだ。

「前回の向こうの敵地を襲撃する作戦はほぼ成功したようだ。ただ、負傷者を出すことは出来なかった。以上だ」

「てことは今回は別の方向から殺しに掛かるのか」

「そういうことだ」

「俺達はどうする」

「向こうから着たら殺す」

「了解」

俺達はとりあえず5階に向かって上がる。屋上をめざすためだ。

「さつさとこの戦い終わらせないのか？」

「それではあの不愉快な男の招待が分からない」

「それはそうだけど……」

「俺は絶対ソイツを突き止めるぞ」

神道は怒りに満ちた顔で言う。

「だが、今回は俺達は狙われる立場にある。だから……だ。つまり今回は調べ物をする予定は無いということか。

作戦遂行メンバーは俺達が狙われている間に戦うという作戦で同意した。

僕達はその作戦を遂行すべく、狙われやすいような状態にいることを遵守する……のだが。

6時になり、戦線は開始されたはずだ。だから狙われやすいようにさつきから色々なところをうるちよろしているのだが、全く攻撃される気配は無い。

屋上に着いたとき、時間は既に8時になっていた。

「おかしい………」

「いくらなんでも攻撃が来なさ過ぎるわね」

「ああ。俺達の隙をうかがっているのか？視線を感じるのはいまだあるのか？」

「ああ。どこからか見られている気がするよ」

「どこかから………」

少し不満げな顔をして神道が言う。

「無花果。貴様は何か感じるか？」

「………人の気配は無いけれど、彼の言うとおり誰かに見られている気はするわ」

「………人の気配は無いのか………」

神道は屋上を動き回り始めた。

「神道は何してんだ？」

「何か不満要素でもあったのかしらね」

「ま、僕には関係ないかな」

そう言っつて、晴れ渡った星空を見る。月が満月と上弦の月の真ん中辺りの形で輝いている。

「………くっそ！」

神道が叫ぶ。僕は、

「何か有ったのか？」

と他人事のように呟いた。

すると神道は、

「あいつ等から負傷者が出た」

「な！」

どういうことだ。教師連中は僕らを狙ってくるはずでは……

「どういうことだ!」

「俺が訊きたい!」

そう言っつて神道はドアノブに手をかけた。  
かけた。

開けない。

「どうかしたのか?」

「……盗聴器とカメラだ」

「え……」

ドアノブから手を離して指を差した先　扉の真下に二つとも隠  
されてあった。

「そうか……くっそ!」

神道はそれらを踏み潰した。

「どういうことだ!?!」

「俺達を監視しているように感じさせ、俺達の動きを封じたんだよ。  
お前や無花果のような相手の視線の感受性の高い人間の裏を取った  
んだ」

「……私達を利用したというの……」

無花果は拳を固めた。

「そうか……。俺達の行く目的地を監視していた人間が、  
先回りさせた教師に監視カメラや盗聴器を仕掛ける事によって、俺  
達に常に『視線』を与えてたんだ」

「マジかよ……」

「くっそ!」

神道は今度こそ扉から出て、階段を降り始めた。  
僕らもそのまま追いかけて、教室へと向かった。

5日目・籙を帷幄に運らし千里の外に決す（前書き）

意味：計略・計画が巧みな事のとえ。

## 5日目：籙を帷幄に運らし千里の外に決す

僕らが教室に帰ってきたとき、彼らは全員そこにいた。

「大丈夫か!？」

誰よりも早く神道がそう叫んだ。

「ああ……取り敢えずは……」

「死者は出てないのか？」

「ああ。まあ……」

「良かった……」

本気で安堵したように神道は呟くと、そこにへたり込んだ。彼は何だかんだ言っても、仲間意識が高いようだ。

「でも一体何があったんだ？君らは恐らく付きまとわれていたんだろっ?」

男子生徒の1人が質問した。

「どうやらそうでもなかったようよ。視線は有ったけれど、どうやら向こうの策に嵌ってしまったっていうね」

「なるほど……こちら側の作戦を逆利用されたわけか……」

木戸が呟いた。さらに木戸は続ける。

「となると、向こう側の作戦担当の存在が分かってきたね」

「作戦担当?」

「恐らく、数学の教師の『時雨 明人』だね。彼はよくこう言われているよ。『神道の教師バージョン』ってね。そして逆もまた然りだ」

逆……つまり神道が「時雨の生徒バージョン」ということか。それはそれは……人と人とを比べるなんてどうかし

ているよね。人なんて全員平等だろうに。だって、どんなに金を集めても、長生きしても、明日を見ても死は平等に訪れるんだ。少なくとも不老不死の薬が出来ない限り。

### 閑話休題。

そして、神道の眼はその言葉を受けて全てを睨むような鋭い眼光へと変化した。

「俺の教師バージョン。それは良い。俺はその立場にあっているのだからな。しかし、俺が誰かであるはずがない。神道は『神の行く道を進んでいく者』としての考え方だ」

今にも大地を揺らして、スーパーサイヤ人にでもなりそうだな。そんな怒りが見受けられる。

「俺は絶対に負けん。俺に頭脳で勝負を持ち込んできた事を後悔させてやるぞ……時雨……時雨……」

そう言っただけで神道は思考を開始した。

その間に僕も思考をまとめる。

今回の作戦担当 前回のダミーでの騙しもこいつの作戦かもしれないが は「時雨 明人」だ。こいつは恐らく前回のダミー戦での経験をその女から聞いて、僕達を危険人物だと判断した。だから、監視の目を置いてきた。ここまででは僕らの予想通りだったのだが、向こうは僕らがその穴を利用して来る事まで先読みしていたのだらう。だから僕や無花果の相手の視線に対して敏感であることを利用した。学校の先生で、天才なのだから、もしかしたらそのくらいは覚えていて知っていたかもしれない（その先生の授業を受けたかどうかは定かでない）。或いは他の誰かから聞いた可能性もある

が。ともかく、向こうは僕らが騙されている間に、僕らの仲間を殺そうとたくらんだわけだ……。そしてその目論見は見事に成功して、こうして負傷者が多数出たと……。うむ。こうしてまとめてみると、僕らは今回劣勢を喫しているわけだ……。

「よし。作戦は完璧だ。今から言う事を全員覚えて叩き込め」

神道はそういうと、作戦を話し始めた。

僕はその作戦を聞いて完璧だと感じた。

自分がどうなるかも分からずに……。

それこそ、塞翁が馬というところだったろう。

5日目：簾を帷幄に運らし千里の外に決す（後書き）

最近色々有りまして、情緒不安定で心のバランスが取れなくなってきました。

一体何をすればいいのか、自分でも模索中です。

あー・・・・・・・・青春してーな。

**5 日目・敵は本能寺にあり（前書き）**

一応、ことわざのようです。

なので使わせていただきます。

## 5日目：敵は本能寺にあり

「……きやがった」

僕らを見て職員室の前に居た先生はそう言った。

彼らの目に映ったのは、僕と神道と無花果だった。心情や状況を説明するのが面倒くさいので客観的に言ってみた。

「本当に時雨先生の言うとおりになったな」

そう言っつて職員室前の先生は中の人を呼んだ。

現れた人数は20人くらいだった。

「3人だけかよ」

「だが、貴方の言ったとおりでしたね」

と、最後に出てきた男女2人が会話していた。つまり、あの片割れが時雨……男のほうだな。

「アンタが時雨先生か」

僕はそう言っつて、一番奥の先生を睨んだ。

「ああ。お前は教師に興味が無い人間だったからな。というか人自体に興味が無い。だから俺に観察されている事に気付けなかったんだらう？」

「……」

「そして無花果もお前も、他人の視線に対して敏感だから、俺の作戦に見事引っ掛かったわけだ。お前らが俺達を引っ掛けようとしていた事くらい容易に想像できたからなあ……」

と嫌味のように言いながら時雨は神道を見ていった。

「殺す！」

神道は銃を即座に出し、腰の位置からの早撃ちで銃弾を発射した。

1番前方に居た先生の頭が吹き飛んだ。そんなに大きい口径の銃ではなかったと思うが、本当に吹き飛んでいった。

「短気だな。だから俺の作戦に引っ掛かるんだ」

「次は貴様を狙う」

「RPGやったことあるか？1ターン目が終わったら相手側のターンなんだよ」

といって、すぐに20人一斉に銃弾が放たれた。

「神道！」

僕は神道を引っ張る。そして無花果の手を神道がとる。そして、3人は半強制的に教室に転がり込む。

「追え！」

時雨の号令でまたも一斉にこちらへ足音が迫ってくる。が。

「作戦通り……」

神道の呟き通り、足音が止まり、急にバタバタと倒れる音に変わった。

「！何だ！？」

時雨以外の教師の誰かが言った。

「あいよ。作戦がちだな」

「計3人倒す事に成功しました」

羽賀と橋田が、先生方の後ろ側に立っていた。つまり職員室の前だ。

羽賀はクナイを構えて、橋田は無花果に渡された銃（グロックだったかな？描写は省略）を持っている。

「どうやって後ろに回った！？」

「あんた等の足音に合わせて天井を歩いてから降り立ったただけだ」

「私は羽賀さんに引っ付いていただけですけど」

「ああ。お前は忍者なんだったな」

時雨はそう言っつて銃を羽賀に向けた。そして迷わず発砲。

「ふん」

羽賀は鼻で笑つて、銃弾をクナイで切つた。

「やはり計り知れん。俺達では勝てる相手で無いかもしれないな」

「そうだ。だから諦め」

その羽賀に、橋田の逆側……つまり、教室から銃が突きつけられた。

「……あっちゃー……」

「作戦失敗だな。俺達がそう簡単に反撃を許すと思つたか」

「そういえば、そうだ。20人出てきたということは、まだ10人以上居るといふ事……」

恐らく全員と思われる人数がその教室から出てきた。

羽賀と橋田は銃に挟まれる。

「どうすんだよ……負傷者連中は動ける状態じゃねーんだぜ……」

羽賀はそう呟いた。

「だろうな。俺はお前から5人だけを動かすために、アイツらを殺さない程度に傷付けたんだぜ？死んだらお前らは異常に冷静になるだろう？それじゃ困る。お前らには『仇討ち』のために俺達を殺しに来てもらわなくちゃならねえからな……」

口調を少し汚して時雨は言う。

「……神道……」

僕は神道に言う。

「ああ。分かつてる」

神道は少し苦しそうに言った。大丈夫なのか……これは・

「俺達も行くぞ」

神道は外に出た。僕は次いで教室を出る。

「よう。出てきたのか」

時雨はそう言って笑う。

「まあな」

そして神道は。

「俺の勝ちだ」

笑った。

同時に爆発音がして、先生方はそちらを見ようと、羽賀達から目を反らした。

瞬間、羽賀は橋田の手を引いて、煙球を地面に向かって投げた。

「しまった！」

時雨がそう叫んだがもう遅い。

煙球が晴れたとき、

「全員集合だぜ？」

僕らは全員集まっていた。

5日目・敵は本能寺にあり(後書き)

感想・評価宜しく願います。

5日目・失敗は成功のもと（前書き）

失敗してこそ意味ある結果が生まれることもあるのだ。

それすなわち、失敗をも成功の一部に加えられたらば、それが最善なのだ。

## 5日目：失敗は成功のもと

計32人全員揃った俺達を見て、

「お前ら……何をした！」

時雨が当然の疑問をぶつける。答える義務は僕には無いから、残りは神道に任せることにした。

「簡単なことだ。俺達は、行動を基本的に制限されて5人で戦うのが限界である振りをしたのさ。羽賀と橋田には作戦を伝えずにな」

「ああ……。そうだったのか」

道理で、羽賀が異常に芸達者だと感じさせられたわけだ。知らなかったからあんな迫真の演技が出来たわけだ。

いや、しかし作戦は全員に伝えたんじゃなかったのか……？

「敵を欺くにはまず味方から……か。羽賀と橋田の声と表情が真剣だったわけだ……」

時雨はそう言って笑った。

「コレは一杯食わされた。まさかこちらの作戦をもひっくりくるめ、自らのダメージをも武器に変えるとは……俺の負けだな」

時雨はそう言って、1人で拍手した。虚しい弾く音が、廊下に響き渡る。

「で。どうするつもりだ？」

時雨は表情と口調を戻して、僕らに諭すようにそう言った。

「言うておくが、俺は負けたが俺達の負けではない。お前らにはダメージが蓄積されている事は言うまでも無い。そこには立っているのがやっとの人間が大半のはずだ」

「……」

「俺達はほぼ万全を喫している。これ以上に俺達に優位な状況は無

い

「……………そうだな。ダメージはこちらの方が大きい。そして貴様らは武器も体力も整っている。一斉攻撃には適した状況ではないのは明白だな。こちらの方が圧倒的不利だ」

「……………そこまで分かっている、何故俺達に攻撃してきた」  
「貴様に頭で勝つためだ」

言いながら神道は自分の頭を指差した。

「だとすれば、お前の負けだな。しっかりと状況が整ってから戦いを望むべきだった」

そう言って、教師連中は銃を構えた。

「言い残す言葉を、2・5文字で答える」

「くっ……………」

「見事だ」

時雨は銃の引き金に指を掛けた。

しかし。

「……………な……………!」

教師達は自分の武器を見て声を上げた。

彼らの武器が崩れ落ちたのだ。

「な、何だ!？」

「……………く……………く……………」

悪者のように神道は笑う。

「貴様が何かしたのか!？」

「おいおい……………何のために羽賀が煙球をぶちまけたと思っているんだ?」

「……………!？」

「お前らの視界を悪くして、全員が一斉に登場して、次回に通じれ

「は格好良いとでも思ったのか？」

神道はそう言って、更に悪い笑顔を浮かべる。

「……しかし！俺はすっかり確認した。羽賀も神道も動くことはできていなかった。視界を悪くしたとて全く意味は無いだろう！」

「馬鹿か。俺が羽賀に作戦を伝えていないわけが無いだろう」

さつきとは真逆のことを言って、更に

「それはつまり、俺と作戦を共有していたメンバーはここに居る全員だ。羽賀に演技指導するには骨が折れたがな」

と神道は笑った。やっぱり教えていたのか。

「だから何だっけ言うんだ！！」

怒り心頭といわんばかりの顔で時雨が神道に今にも突っかかりそうな勢いで叫ぶ。

「だから……」

面倒くさそうに神道はいう。

「ここにいる全員に作戦を教えている。しかし、ここには1人居ないだろう？」

「……？」

時雨は僕らをひとしきり眺めてから「まさか……！！？」と驚いた表情をした。

「そう。無花果だ」

神道は言った。と、同時に無花果が現れた。

「私は貴方達が羽賀君たちに気を取られている間に、如月君のナイフを奪ってから彼らと同じように天井に身を潜めた。そして煙幕と同時に貴方達の武器を壊したの」

無花果がそう言って、身形を整えて僕の横に立ち、腰のホルダーにナイフをしまった。ちなみに彼女の証言どおりナイフは『奪われた』のである。勝手に抜き取られた。悲しきかな、嘘かな。

「……………ここで一斉に殺そうという算段か。見事だな」

今度こそ心からの賞賛のようにそう言ってから、

「冥土の土産だ」

と時雨は言った。

「お前らはどうやってココに来たんだ？」

お前ら……………すなわち、待機部隊以外か。

「下の校長室を占拠していたことは貴様らも知っているだろう？ その上が丁度、この職員室だったんだよ。この1回のために校長室を拠点として占拠したんだ。そしてその天井を爆破して、下から現れたというわけだ。無花果の行動がばれないように、爆発自体と崩れる音で、カモフラージュまで加えてな……………」

時雨は言ってから、だるそうに、ポケットに手をつ込んだ。

「負けたな……………頭ではお前の方が上だった」

「そうだな。分かったらさっさと死ぬか、殺される」

「ああ。分かったよ」

時雨はそう言って。

ポケットからハンドガンを取り出した。後ろの教師達も同じように構える。

「……………隠し持っていたのか」

「こんなこともあるのかと……………な  
ばん。

1発の銃弾が発砲された。

5日目・失敗は成功のもと（後書き）

クライマックスに突入するのか？な？

わかんねーや。

## 5 日目：鬼の霍乱（前書き）

鬼の霍乱とは

いつもは極めて壮健な人が病気になることのためである。

それは一体誰なのか。

## 5日目：鬼の霍乱

飛んでいった銃弾は時雨の肩にヒットした。

「当り」

発砲したのは僕からすれば誰でもない、クラスメイトだった。彼も戦いで成長するタイプか。今、誰を真っ先に撃つべきか分かっていたようだ。しかし、頭を狙えていないのが痛いところである。

ともかく、その発砲を筆頭に、敵味方共々、銃を発砲し始めた。

「こんな力オスな予定だったのか!?!」

僕は神道に向かって、叫びながら訊く。

「口を動かす前に手を動かせ!」

「お前の責任だろう!」

「他人に責任を押し付けている時こそ、無様な人間は居ないぞ」

「それはそうかもしれないけれど、少なくともお前よりはマシだな!」

ふざけているわけでもなく、そう言い合いながら銃を連射する。

「狙うのは神道、無花果、如月、木戸だ!羽賀の身体能力と橋田の目には対応できないから、そいつらは諦める!」

時雨の叫び声は、教師連中に届いたのか届いていないのか、結局全員を狙うように弾は教師と生徒の間を飛び交う。

「何をしている!」

そう言っつて、時雨は自分のポケットから、手榴弾を取り出してこちらに向かって投げた。

「伏せる!」

統率の取れている僕らは、木戸のその声を合図に伏せる。そして羽賀はそれに目掛けて、クナイを投擲した。結果、本来到達すべき

地点より少し後方で手榴弾は炸裂し、僕らと教師たちの間に煙とその匂いが充満した。

「くっそ！」

僕は言いながら、銃を構える。

狙いは定まらないが、向こう側には教師連中しか居ない。

「逃げられる前に仕留めろ！」

僕はそう叫んで銃を発砲し続ける。少し遅めの反応で、他の面子も銃を撃ち始めた。

お互い、防弾チョッキは常備しているようだ。こちら側には、警察が使うような盾もあり、死者は出ていない。向こう側からは多少、悲鳴も聞こえる。

これなら何とかなる。今日一日でどうにかできる。

そう思っていた。

1発の銃弾が、木戸の左胸近くに当たった。

「……………!!！」

木戸は倒れる。

「木戸!!！」

委員長の木戸が倒れ、統率が乱れたのか、全員が木戸に駆け寄る。

「大丈夫……………だ。防弾チョッキがあるから……………」

確かに出血はしていないようだ。しかし、その乱れを向こうが見逃すはずも無かった。

木戸に駆け寄った数人に銃弾が貫通する。

叫び声が上がリ、さらに、乱れが生まれる。

「貴様ら！落ち着け！」

神道が叫ぶがその声虚しく、届くことなく乱れが生じた。



銃弾を撃ちつつ、馬鹿ども突っ込む。銃弾が右足、右肩、頬をかすめる。かすめるだけって、お前らほぼぜ口距離で何やってんだばーか。とか思いながらナイフはさっさと数人の皮膚をかすめて、血液の赤に濡らす。おいおい、僕も馬鹿なのか。もしかして僕もぜ口距離で殺せないのか。

殺す。ココに居る人間を。全て。見境。ある。なし。しるか。ばか。

奪う人間は奪われる覚悟を持たなきゃならないんだよ奪うことはそれは神の物を全て手に入れようとしている愚かな人間と同じまあ僕は愚かだけどねーあー面倒だからさっさと殺せば良かったんだほらその気になれば1人でも全員殺せそうじゃないかだからさっさとやっちまえばよかったのに殺すコロスころすKOROSU頃州比巢殺す。

「如月いいい!!」

僕の名前が呼ばれた。

「落ち着け！君1人で全て背負うな！」

ああ。木戸だ。いつも僕を助けてくれる。この学校で見たとき、こいつだけは人間として見られた。ああ、後、数少ない友人と無花果だ。

意識が少し復帰できた。木戸ありがとう。と、口が動かない。

せめて向こう側に思いを伝えるために僕は安堵の表情をし、顔をほころばせて、木戸を見る。

あ、向こうの誰かが何か叫んだ。でも聞こえない。見えない。わからない。

僕は今度は確かな痛みを間違いなく左胸に感じて、意識をプツツ  
りと切る事になった。

ああ。じくじくってどんなきぶんなんだろう。

6日目…31…20(前書き)

6日目。

新展開です

どうぞご期待です。

さて。

彼がああなつてしまった以上、物語は私が紡ぐのが正しいのだと思う。それが私としての使命なのだと思う。まあ他人のことを考えているわけではないのだけれど。

私は何とか応急処置で助かる事が出来ただけけれど、彼はそうはならなかった。

そんなわけで次の日。

校長室が役目を果たし終え、2度と役立つチャンスをなくしてしまった以上は、元の教室を作戦室に使うしかない。

次の日の放課後。それはつまり、戦線が始まっていることと同義だった。

しかし生徒も教師もお互いに攻撃をしかけようとはしない。それにはお互い理由があった。

教師側は作戦担当の時雨を彼が肉塊へと変貌させてしまったために、作戦に関して悩んでいるという事じゃないかしら。

対して私達は状況が状況だけに会議をすることになった。

「作戦会議を始める」

教卓に神道君と木戸君が並んで立った。ちなみに教室の外には橋田さんと羽賀君が相変わらず見張りを担当してくれている。

「まずは、しっかりと確認すべき事項がある」

木戸君はそう言って話を始めた。

「前回……つまり昨日の一斉攻撃だが、ほぼ成功を収め、教師側の人数を20人にまで減らす事が出来た。最初の半分の人数だ。いい功績だったと思う。僕らの戦いは優位に進む」

木戸君はまずそう言ってから「しかし」と続けた。

そう、それだけなら私達が作戦会議をする必要はない。昨日、「よくやった」で済む話。

つまりそれだけではなかった。

「今ココに残っている人間や、見張りと看病を含めた25人以外・つまり7人は傷を負った。中には気絶して、今も危うい状態にある者も居る。救護班が昨日から交代で夜通しの看病を続けてくれている。ほとんど回復しているが。そして……」

木戸君はそう言って少し間を空ける。迷っているようね。

しかし決心したのか、再度口を開いた。

「1名。死者が出た」

沈黙。

別にいままでうるさかったわけでもないけれど、沈黙が一層際立った。

まあ私としてはどうでもいいのだけれど、一応聞いておいてあげないと、かわいそうよね。こう見えても完全に仲間意識が無いわけではないのよ。というか本当のことを言うともうどうでもよくないし、一応でもないくらい、悲しみはあったわ。

「これは、僕らの当初の目的……全員生きて学校を出て行く目標が失われた事になる。しかしそれでも彼は覚悟していたはずだ。『殺される』という覚悟を」

「これで分かったろう」

神道君が木戸君の言葉に続けるように黒板にもたれるような態度で言った。

「誰でも死ぬ事は明らかだ。油断すれば死ぬし、諦めても死んでしまふ。誰が死んでももうおかしくないのだ」

神道君は教卓の前を離れた。

「ならば、やはり立ち向かうしかない。俺達にはその道しかない。これを期にもう一度考える」

神道君は言いながら教室の出口に手を掛けた。

「あらゆる覚悟をな」

そう続けてから教室を出て何処かへ行つた。

「……神道君の言うとおり、僕らは彼の死を受け入れ、死に立ち向かわなければならぬ。それが僕らの彼に対する償いだ」  
木戸君はそう言つて俯いた。

彼の死体は、掃除用具箱をきれいに掃除して彫る程度の出来るだけの装飾を施し、クラスに置かれていた花を添えた箱に入れて、棺おけとして隣のクラス（だった教室）に置かれてある。

1人の人間の死を越えるという所業はとても難しい。

簡単に出来る事ではないし、簡単に割り切るべきことではない。

私ができる。それだけ仲間の死とも向かい合ってきたから。

そして全員しなければならぬ。これからも消えていく可能性のある仲間を失うことを考えながら。

6日 目・20000 (前書き)

さて、新展開の流れはどんな風に進むのかな。

それからのこと。

全員、センチメンタルになっていたのか、教室から出る人間は居なかった上に、静かな空間を保っていた。眠るということをするような人間も居ない。私は眠かったけれど、如月君が居ないと、私はすることがないから暇なのよ。こう見えても人間観察以外に楽しみが無いような人間ですから！。

そんな私達が動き始めたのは20：00だった。教室の扉が開いて、入ってきたのは神道だった。

「行くぞ」

突然そう言った。

「何かするのか？」

男子生徒の1人が聞く。私も彼と同様、他人の顔と名前は一致していないが、あの男子生徒がどんな人間かは分かる。この間の陸上部の反射神経最高の人ね。橋田さんが言っていた情報が正しければ、

閑話休題。

その問に対して神道君は

「じつとしていても仕方が無い。向こう側が作戦を考えられていない間に一気につぶそう。こちらの方が人数は多いんだからな」

と答えてから、武器置き場（墓場とは違う、隣の教室）に向かって廊下を歩いていった。

「……………行くぞ」

木戸君がそう言って席を立って、教室から出て行った。私達もそれに応じる。

「……………あ……………無花果さん」

出たら橋田さんが声を掛けてきた。

「何？」

「……………なんでもありません」

彼女は何か言いたげだったがそう言ってから何処かに行くように視線を反らした。

その視線の先には、棺や他の同級生の死体がある隣の教室。……………まあそういうことでしょうね。

「貴方が気にする事じゃないわ。全員が全員乗り越えるべき内容よ。私達も負傷者として気絶している人たちもそれを看病している人たちも……………ね」

私はそれだけ言うつと橋田さんから目を反らして、武器庫の教室に向かつて足を進めた。

とは言え、私は武器は必要としない主義なのだけれど。

と、そこで橋田さんの代わりに

「いいのかよ」

と羽賀君が聞いてきた。

「何が」

「アイツはあのまま放っておくのか？」

「いいのよ」

淡白に答えて、私は脚を止めずに過ぎ去ることにした。

「仲間じゃないのか？」

「……………違うわ。今はそうでも、明日には敵かもしれないわ」

「じゃあお前は……！」

羽賀君はそこで1度言葉を区切る。皆こちらを振り向く。

「お前はどつして泣いたんだ」

「……………さあ」

私のことすら私には分からないのよ。

それが全ての答えなの。

私はそれだけ答えて、武器庫の教室へと入っていった。

「……………武器……………か」

私はなんとなく。

本当になんとなく。しかし意味深に。

ナイフを取って、上着の内ポケットに入れた。

6日目・・・20・・・00（後書き）

新たな展開。

でもこんな感じの話って良くあるよね・・・。。。

6 日目…1…5 (前書き)

さて、今回は珍しく、物語の進行状況ではないですよ。

無花果の話！。

いつだったろう。

私が初めて武器を取ったのは、確か、私の母が死んだ時だった。戦死でもなんでもない、ただの病気である。が、若いうちになくなったのは間違いない。私はまだ幼稚園に通っていた。

しかし、残念ながら私の父は不明である。生きているだろうけれど、母とは一夜を共にしただけの言わば『遊び』だったのだろう。それはお互いに、である。だから私は両親を恨んでもいないし、憎んでもいない。ともかく、たった1日だけで母は子どもを身ごもった。それが私。母は若かった。今生きていたとしても、恐らく35くらいだろう。私が今15だから、20で産んだことになる。

閑話休題。

母親は私と同じ、殺し屋という職業をしていた。ただ、私が母のお腹に住み着いた時に、やめることを決意したのだ。もちろん、事件があった。

それが私。

母の命が尽きた時、後継者として私を育て上げる……すなわち、死んだ時の親権を、その正義の軍隊の組織の聖母に誓った。その時、私を救いに来たという、シスターに私は手近の果物ナイフを突き立てたのだ。

そのシスターは、身軽な動きで私を拘束した。明らかに手加減していなかった。

その人は私の良き相談相手となり、私にその頃の話をするときは、「貴方を一人前に育て上げる以上、初歩から全力で叩き込もうとしたのが1つ。また、貴方のお母様から、『全力であの子を守りぬけ』

と命令されていたので、私の強さを教えておく事が大事だと思つたのが1つ。そしてもう1つは貴方の突き立てようとしたナイフは、明らかに素人とは思えないほど、人間の急所を的確に、しかも初対面の相手を危険と判断して狙ったこと」

といていた。つまるところ私には才能があつたのだろう。

ああ、また脱線したわ。

それ以来、私は武器を取っていない。そのシスターの教えでは、犯罪者を殺す殺し屋という組織にした以上（したのは母親だが）、私達は犯罪者であるそのものに、そのものの犯した過ちを良く知っている武器で殺すのが、礼儀である……と。

つまり凶器で殺せということだった。

相手をそいつ自身の『他人を痛めつけた武器』で相手を殺すこと。それはつまり、私達は人殺しを考えている人は殺さないのだ。また、殺人以外の犯罪者は殺さない。そして、正当防衛的殺人は許容する。それが私達のやり方。

さつきも出てきたがこの手法をとつたのは『母親』だった。私の母親が、この軍隊をそういうものに変えたのだった。

それには理由があつた。らしい。私は直接聞いていないので、それを信じている。

母の父母と兄妹は殺された。殺人者に。名前を『如月 零』<sup>れい</sup>と言う。私の調べでは、あの如月君の家系の人間。彼の家系の人間は、ほとんどが殺人鬼や殺し屋などであるが、そのうちでも、こうして名前が割れているのは一部である。彼らの家系は、教授されたわけでもないのに、ほとんどがそうになっているらしい。そして、そのうちのほとんどが、名前が世間に知られる事は無い。この『如月 零』が珍しいタイプである。

どうしてこんな話をしたかというと、私が初めて殺した相手がその人たちだったから。母の意志を引き継いだ気になっていた。その当時、私は9歳だった。

私が如月君に『殺人鬼』と言ったのには、当然理由はある。

1つはさっきのように『如月』という苗字が気になっていたら、もしかしたら、如月の人間ならば犯罪を犯しているかもしれない。そしてもう1つはこの辺りで起きている殺人は同一犯だった。

この2点から、私は彼を観察し続けた。そう、明確な根拠なんて無かった。だから彼に何度も鎌を掛けたり、脅したり、プレッシャーを掛けてみた。

しかし彼には何の反応も無かった。だから彼は違うのだと思っていた。私と同じ『禁句』を考えられていたのも、彼は冷静な『正義』なのだと思っていた。殺すテクニクの手際よさには少し疑問があった

けれど、それは別次元として処理した。

違った。彼は如月の人間として忠実だったのだ。

殺しの才能とそれに準じた冷静さ。自らを完全に客観的に見ることの出来る人間性。そのパーソナリティーが存在していたのだ。

だから私はそれに騙されていた。むしろ、しばらく行動を共にするうちに、少なからず好意を持っていたのは明らかだった。

それに気付いたのは、昨日。

私が心臓部に銃弾を撃たれて倒れた時。私はあいまいな記憶の断片で見た。

明らかかな怒りと悲しみ。涙を流したその目から聞こえてきたような気がした。そしてそんな中での、冷静な殺人。間違いないと思った。

彼は間違いない『殺人』のプロだと。

以上、回想終。

「……………」

そんな私は今、1階……………保健室に向かう途中の道で5人の先生方に囲まれていた。

1対5。

面倒だ……………」

今まで言ばしかった殺人を、初めてそう思った。

6 目 目 . . . 1 . . . 5 ( 後 書 本 )

「私に何か？」

「お前を殺すんだよ」

男教師が言った。物騒ね。ええ、本当に。

「時雨の最後の指示は、如月、神道、無花果、木戸を殺すということだった。私達はそれを遂行するだけよ」

……全……

取り敢えずは向こう側から攻撃させるが吉ね。相手には油断しているように見せればいい。

「そう。無力ね。死者の言葉に頼らなければならない貴方達の馬鹿さ加減に同情するわ」

私はそう言つて挑発した。

そして残念な頭の先生方の1人が突きつけていた銃を発砲した。

私は1度しゃがんでそれを避けてから跳ねた。

さて。まずは現状理解。

相手は男3人、女2人ね。武器は全員が銃。彼を習つて細かい描写は避けておく事にするわ。少なくとも、機関銃やライフルの類ではない、とだけ言つておくわ。

私の突然の跳躍に驚きを隠せない顔をしている。そりゃあそうね。あの人たちは私の『仕事』をまだ見てはいないのだから。この間だつて、煙の中で私は仕事をしていたのだから。

「く……撃て!!」

男の1人が叫んだ。その声ではっとした顔になり、全員一斉に空中から降り立った私に銃を向けた。

しかしその速度では私には追いつけない。

なぜなら私は通常の人間の2倍の速度を有するから。

偏見や常識で私に勝てるはずが無いのよ。

そういうわけで手近な男の教師の突き出していた銃を蹴り上げて、滞空中に勢いをつけて顔面を横回し蹴りで倒す。瞬間的過ぎて他の教師はまだ追いついていない。そして蹴り上げた銃に追いつこうと、もう一度跳躍した。ようやく、倒れた教師に他の教師が気付く。遅いわね。

銃をキャッチしてそのまま空中で一発。女教師の腹部を打ち抜く。「くっそー!!」

ようやく私に追いついたようだ。常識を捨てればそう難しいことではないでしょうけれど、まあ捨てきれない常識という物があるのよ。だからそう簡単なことではないわ。てなわけで今、3人目の男の人の脚を払って、攻撃に成功したわ。と同時に4人目が発砲。その銃弾は私の推測どおり、私が先ほど倒したばかりの男の人の胸にヒットして、動かなくなった。その間に腹部を打ち抜かれてのたち回っている女教師を撃ってから息の根を止めた。

流れについていけない男女2人の銃を蹴り飛ばして、怯んだところを銃で撃つ。的確に頭を。

「……よし。終わり……じゃなかったわね」

そう言うってから最初に気絶させた男教師の方を見た。

ぱん。  
と。

私の左胸が撃たれた。

「あ」

起き上がって、先ほど私が弾き飛ばした、別の銃を掴んでいた。

「お前の強さは良く分かった」

教師の姿が下に向かって消える。私の視界が天井へ向かう。

ああ。

ああ、昨日助けられた命は今日尽きるのだろうか。  
そう思った。

でも私には死ぬ理由が無い。死ななければならない理由が無い。  
だとすれば私は誰かに生かされている。でもそれは神様ではない。  
それは私達の信条のほず。

そう、私は私に関わる人間に支えられているのよ。全ての人間は  
そうであるはずだ。

「……………な……………!!」

私が立ち上がったのを見て驚く。

「な、何をした!？」

「支えてもらいました。私に関わった親愛なる人へ」

そう言うってから私は速攻で近づき、銃を突きつけ、引き金を引い  
た。

……………ふう。

面倒だった。保健室に行くだけでどれだけ時間を掛けさせるのか  
しら。

そう思ったときに

【12時になりました。戦線終了です。これ以上の攻撃は、こちら  
への敵対と看做します】

との放送が流れた。

「仕方ないわね」

心配を掛けるわけにはいかないから、取り敢えず1度教室に戻り  
ましようか。

6 日目…1…1 (前書き)

新展開その二!!!

教室に入ると、皆座っている。私は目を合わせずに近づいていく。

「保健室は大丈夫だったかい？無花果さん」

木戸君が質問した。

「ええ。何ら問題は無かったわ。保健室を無視して私を攻撃してくるくらいなもの」

「そうか……。。え」

安堵した表情が瞬時に強張る。

「襲撃されたのか!？」

「ええ。だから先生方の人数を5人も減らせた事になるわね」

「1人でそんなに相手にしたのか!？」

今度は驚愕の表情を浮かべる。表情の変化が面白いわね。今度はどんな表情を浮かべるか見物ね。

「ええ。まあ危機的状况には陥ったけれど、何とかなったわね」

「そう……。なのか……。まあ、人数を15人まで減らせたとなるとこちらも有利かもしれないね」

と木戸は先ほどまでとは一変して、冷静な表情になった。あら、おもしろくないわね。

「ともかく、だ」

神道君はそう言って立ち上がった。

「その口ぶりからして、まだ保健室は確認していないんだな？」

「ええ」

「そうか。よし。寝る」

そう言って神道君は就寝準備を始めた。

クラスの皆様もそれに順ずるように行動を開始する。

この戦線では考えさせられる事が多い。

命の儂さや、逆に尊さを感じる。私が誰かに生かされているという事すら感じられてしまう。

そう。思ったよりも命というものは左右されやすいのだ。だからこそ人間は生きる事に執着し、生きる事を望む。そして、その命を左右するものを忌み嫌う。無視し抗おうとする。それでも左右する『何か』は自分のもとに向かって走るように間を突き詰めてくる。

自分が亡くなることが怖い。自分が無くなることが恐い。自分を壊したくない。

だから私達は今、こうして先生方に対して抗っている。

本当に苦しみを味わいたくないのなら、死ねばいいのだ。武器には毒だつてある。

それでも死のうとしないのは、人間の本能がそう言っているから。本能的に知っているから。

『死』は恐いという事を。

眠っている彼らはそのことを本能で感じているに違いない。

己の命を奪わんとするものを拒み、己の命を延ばすことを優先する。その結果、相手の命を奪うことになったとしても。

動物的な考え方。

生きながらえるサイバルの新年。

己が信念、本能に基づいて戦っていること。

それがこの戦線の正体なのだ。

さて。

「と、私は思うんだけど、貴方はどう？」  
「選手交代の合図が突然過ぎないか？」

僕は保健室で無花果の言葉を聞いてから、彼女の質問への感想を述べた。ちなみに答える気なんて毛頭ない。

「やっぱり起きていたのね。唯一の重傷負傷者さん」

「ああ。昨日には起きていたよ。ていうか、語り部の機会を速攻で棒に振るとはお前も物語に杜撰すぎるぞ」

「物語？貴方の妄想劇のことかしら？」

「さっきまでお前が語っていた代物だ。ていうか、僕のことを死んだように扱うな」

正しい情報と混同して、逆にややこしい事になっていた。

「えーえー。私が悪かったわ。そうね。どうせ私が悪いんですよー」

「小学校からやり直すゲームか？よし、降りた」

「そうね。よしておいたほうがいいわね。貴方は幼稚園からやり直さなきゃ追いつけないもの」

「失礼な事を言うな。僕はその昔神童と呼ばれたような男の子だぞ」

「あらあら、それはそれは。その事実によって世界中の皆さんを褒め称えなければならなくなっただわ」

「『神』的に『童』話を読む男の子だ」

「絶望的に散りなさい」

彼女はそれだけ言うのと立ち上がった。

「帰るのか？」

「ええ。貴方が起きていたと分かった以上、私がここにいる理由は無いもの」

「あっそ。じゃあな」

僕はそれだけ言うと睡眠態勢に入った。

「あ。そうだ」

無花果は扉を開けてから、僕に何か投げた。

ナイフだ。

「ありがとう」

そう言うてから、保健室を出て行った。

何だろう。

もしかして僕の形見として左胸のポケットに入れておいたナイフが、偶然、自分の左胸に銃を撃たれた時に、盾になったのだろうか。

そんなわけないけどね。

と、ナイフの柄を見る。

「・・・・・・・・」

間違いなく弾痕。

・・・・・・・・まさか・・・・・・・・ねえ・・・・・・・・。

そう思ってから、僕も立ち上がった。もう無花果も教室に着いただろう。

「い・・・・・・・・って」

かなり痛みを感じる。大丈夫だろうか。

そう思いつつも歩を止めずに階段を昇って。

僕らの教室では無い方の教室に入った。

6日目：1：1（後書き）

というか展開が戻ったような気がするけど。

6日目…1…0（前書き）

1人と0人の対話。

教室の扉を開けると、そこは腐臭漂う、暗い空間だった。爆発後の被害は何の措置もせずに放置されていた。

「……明日掃除するか」

それが弔いでもあるに違いない。待機舞台なら死体にも慣れてい  
るだろう。3クラス分有るから、しんどいかもしれないが、弔いは  
疲れるものだろう。それで意味があるのだから。

腐敗臭もするから、火葬という方法で、処置したい。その際は誰  
がどの遺骨か分かるようにしないと……。でも火葬って簡単には出  
来ないよな……。

さて、今回俺がここにきたのは、所謂墓参りである。

僕がこっそり無花果に頼んでおいた通りならば、このクラスの掃  
除道具用ロッカーが棺桶になっている。

他の皆とは違って、少し丁寧に扱っているように見えるが、僕に  
は目印が無いと、誰が誰か分からないのだ。

そんな奴に墓参りの資格はないかもしれないけれど、それはそれ  
としよう。僕はそれでも、墓参りの必要があるのだ。

というところで、倒れている掃除用具ロッカーを見つけた。僕は  
そのロッカーを開けた。

1人の男子生徒。弔いの証として、最低限キレイに掃除したロッ  
カーに花を添えて入れられている。

僕はその前に座り込んだ。

「……死んだ先はどっちだ？」

喋るはずのないそれに僕は語りかける。

「天国か？地獄か？それとも青春を謳歌できなかったか何かで、別  
の世界で天使に抗ってるのか？」

アニメの話を変えて、冗談を言いながら訊いた。  
当然、答えるはずは無い。

「お前は、よくやったと思う。状況に即して、誰よりも早く危険を察知していた。そんな才能が有ったのに、お前は死んでしまった」  
上から目線のような発言になってしまっているが、気にせず言う。

この少年は、時雨の肩を打ち抜いた男子生徒だ。向こう側が一斉にハンドガンを出したのを見て、誰よりも早く攻撃を始めた。その判断力は評価すべき点だった。

しかし、その戦いで唯一、命を落としてしまった少年だった。

「……僕の話をするよ」

僕はそのロッカーに背中を預けた。

「僕は、殺人鬼だ。巷で噂のね。中学生だけれど、僕はこうして殺人鬼として世を渡り、この世界を生きている。もちろん学生として「僕が最初に殺した人は誰だと思う？」

「実は、僕にも分からないんだ。その時の僕は昨日……正確には一昨日だけれど、その戦線の時のように思考が暴走したのさ。戦いなんて関係ないし、人間なんて知ったこっちゃ無い。そんな感じで、僕が気が付いたときには病院にいたのさ」

「どうして暴走したのか。それは後から知った。父と母と兄と妹を殺されたからだ。その何かに。僕はその時、父からナイフの扱い方だけは教わっていた。僕らの家系は殺人に秀でていたんだよ」

「ごめんよ、オチは残念ながら無いんだ。でも、それでも僕は誰かに 特に君には話すべきだと思ったんだ。理由は全く分からないんだけどね」

僕はそこまで言って、立ち上がり、ロッカーの扉を閉めた。

「ありがとう。僕は君にそういいたかった。理由は分からない。で

も、僕の中で何かが変わった。ここで宣言する」

僕はそこで、忠誠を誓うようにひざまずく跪く。

「僕らはココを出て行く。どんな犠牲を出してしまっても。そして、僕らは負けない。戦争だけではない。僕はあの男にも負けない」

そう言っ僕はもう一度立ち上がった。

「アイツも……『ヒラオカ』も殺す」

そこでまたも、僕の意識はぶつつりと途絶えた。

7日目：D e t e r m i n a t i o n (前書き)

決意。

人間が一步前に踏み出すための最小限の努力。  
最大限の努力は『行動』である。

## 7日目：Determination

「如月君」

一言だけで、僕は起き上がった。

「おはよう。如月君」

「おはようございます」

「あら、敬語を使うとは、私に敬服の証でも？」

「軽蔑の意識なら」

「殺すわよ」

「殺んのか、こら」

勢いの無い挨拶で起床した。

どうやら、あのまま寝てしまっていたようだ。態勢は、体育座り。背骨がかなり痛い。体に無理をさせていたようだ。でもまあ、起きたときの爽快感は悪くは無い。ぐっすり眠っていたようだ。

「皆が、貴方が消えた事にあわてているわよ。『ヒラオカ』に質問する神道君や職員室の15人の先生に突っかかっている羽賀君をもれなく見ることの出来る特典付きで」

「あつそ。じゃ、いい加減奇術のように現れますか」

僕はそう言うってから、教室の扉に手を掛けた。そのとき、痛みがほとんど引いていた事に気付いた。

「あ。そうだ、無花果」

教室を出る前に声を掛ける。取り敢えず決意表明くらいはしないとね。

「何？」

「僕、殺人鬼だ」

無花果が驚く。まさか、僕の口から言ってくるとは思わなかったのだろう。

「お前の言うとおり、殺人鬼だ」

「………そう」

「殺すか？」

「いいえ」

そう言って、無花果は笑った。

「貴方の力はこの戦線に絶対必要だから。せめて、外に出てから殺すわ。犯罪者殺しの殺人鬼さん」

「………知ってたのかよ」

「当たり前よ。全員私がマークしていた犯罪者達だもの」

そう。

僕は無花果の言うとおり、犯罪者を殺す殺人気だ。理由は知らない。単純に僕には殺しの才能があるから、僕はそれを存分に生かすべきだと判断したのだろう。

理由にははこじつけくさいので、あまり口外はしないのだが。

殺しているのが犯罪者だと、一般人が知らないのは、警察がそれを公表していないから。

理由の1つは恐らく、世間一般には知られていない犯罪者だから。そしてもう1つは、殺人鬼への賞賛。

犯罪者のみを殺す殺人鬼を世間が認めることは、警察の権威の降下を意味する。人によっては指名手配犯であるため、顔写真も名前も出していなかったりする。その証拠に、世間一般が知っている、僕の殺した人数と、僕が殺した正確な人数では3人の差が出ている。

「貴方のやり方を認めるつもりは無いけれど、褒められたものではないわね」

「それはお前も一緒だろう?」

「私のやり方は褒めてもらおうとは思っていないわ。私は私達の意

識、使命、仕事のために殺している。その辺りの違いはハッキリして欲しいものね」

「あっそ」

僕らからすればどちらもたいした違いは無いけれど。

「じゃ、さっさと行くっぜ」

僕は扉を勢いよく開いた。

7 目 目 : N o o n e k n o w s w h a t m a y h a p p e n t o m

一寸先は闇

教室を出た途端、

「如月！」

と僕を呼ぶ声が廊下に響き渡った。ちなみに、僕を呼んでくれた君の名前も僕は分からない。

「どこ行ってたんだよ!？」

「ちよつと墓参り」

「ああ………そうか」

勢いをなくして、少し俯いた。

「大丈夫だ。アイツの死も、俺達の糧になっている」

僕はそう言っつて、彼を激励した。

「そう………だよな。ああ、頑張ろう！皆を呼んでくるよ」と、彼はそう言っつて走っつていった。

「何か変わったわね？」

「まあな」

それ以上何か訊かれる筋合いは無いので、切り上げるようにそう言っつてから、僕らの教室に入る。

それからしばらくして全員帰っつてきた。

どこに行っつていたのかとか怪我は大丈夫なのかとか訊かれたけれど、何とか対処しておいた。

現在8時15分。後もう少しで先生の居ないHRが始まり、その後、先生と生徒の惰性の授業が始まる。なので。

僕は相変わらず屋上に向かった。

「で？何で相変わらず着いて来るんだ？」

「もう日常の習慣なのよ」

「僕は殺人鬼だって言っただろう？それが分かっていたら、僕に付きまとう必要は無いだろう？」

「私は貴方に惹かれたの。だから貴方についていく。悪い？」

「……………やつほい。両想いだ。やったね。」

「悪い。僕は1人で行動したいんだ」

「屋上着いたわよ」

「聞け」

無花果は僕の発言を完全無視という方法で対処して、屋上の扉を開いた。

「風が強いわね」

無花果は言いながら、はしごを使って2階に上がった。

「全く……………」

僕はそう呟いてから2階に上がった。はしごを使わずに、腕の力で上る。なんとなくそうしたかっただけで、特に意味は無い。

「お前……………何がしたいんだよ」

「別に」

「もういいけどさ」

僕はそう言ってからいつもどおり寝転んだ。

というところで、HRが始まったようだ。チャイムは鳴らない。

「……………そういえばチャイムが鳴らないな」

「そうね。戦争が始まってから鳴ったためしがないわ」

「……………もしかしてこれも『ヒラオカ』と関係があるのかな・

……………」

「……………私は昨夜考えていた事があるの」

「僕もだ」

僕は寝たまま、無花果は上を向いて言った。

「ヒラオカを殺す」

同時だった。

「出来るだろうか」

「しましろう。私はこんな犯罪を許しはしないわ」

「だな」

僕はそう言ってから眠りについた。

日差しは良好。僕らの未来は良いか悪いかは分からない。

一寸先は闇。

僕らはこれから闇の中を突っ走ることになりそうだ。

じゃあ、僕らは「暗中飛躍」と行こう。

ひそかに、誰にも気付かれないように策動してやろう。

7目：No one knows what may happen tomorrow.

見えないからといって諦める理由にはならない。

勝てないことが戦わない理由にはならないように。

## 7日目：Cinderella Battalion

6時。

いつもどおり、ヒラオカの放送で戦線が始まった。

「木戸ー」

僕は戦線が始まって作戦会議が始まる前に、木戸を呼んだ。

「何？」

いつも通り、木戸は優しい反応をしてくれる。こういう対応は、僕としても話しやすくありがたい。

「ちよっと皆に話が見たいんだ」

「いいよ。どうぞ」

そう言うってから、教壇に向かって歩いていった。

「作戦会議を始める前に、如月君から皆に話があるらしいんだ。聞いてくれ」

木戸はそう言うってから僕の場所を譲った。

僕はその位置に立つ。弁論大会にでも出た気分だ。皆の視線が一気に集まる。

「……今、僕らはこの戦線において、明らかに優位に立っている。とてもいいことだと、僕は思う」

数人が頷く。

「でも、僕はこの戦線に勝つだけで、終わらせたくない」

「……え？」

「確かに教師を倒せば、勝利できるかもしれない。でもそれでいいのか」

僕は言う。視線が様々な色に変わる。

「僕らが戦っているこの戦線は、アイツの手の上で転がされている

ゲームだ。そんなこと、僕は認めない。アイツの手のひらから飛び出してみせる」

「如月……………」

神道はこちらを向いて驚いている。

「僕はアイツを……………ヒラオカを殺す」

「……………」

沈黙が教室を包む。支配する。

「そ……………そんなことして大丈夫なのか？」

男子生徒が聞いた。

「向こうの攻撃力に……………俺達はハッキリ言って勝てないだろ？そんな奴を相手にしたら……………間違いなく……………」

「いや、向こうは、俺達がルールを無視しなければ攻撃してこない。だから俺達は、この戦線の最中に、アイツを探し出せばいいって訳だ」

「でも、向こう側が間違いなく守るとは……………」  
その声を遮ったのは、

【限ります】

という放送だった。

「ヒラオカ……………!?!」

【面白いことを考えますね。僕を殺すか……………。それも僕には一興だ。一驚でもあるね。そうだ。そうしてよう】

口調を変えながら続ける。

【僕を捕まえて殺してみせる。先生方のみに戦えば勝てると思って  
いるようではダメだ。僕を殺して見せるよ】

「殺す。間違いなく」

無花果が言う。そして睨む。

【そう、それでいい。この戦争は先生と生徒の戦いじゃない。僕にとつての宴で演舞で演劇で戯言で三文芝居だ。そう、そうではなくちや。僕も戦争に参加しないとね。ああ、心配しなくてもいい。僕から攻撃していく事はない。君らが目の前に現れても僕は攻撃は出来ないだろう。だから、僕を見つけて殺せば勝ちってわけ】

「それで貴様いいのか？」

神道が眼を瞑って言った。

【いいよ。但し、それだけじゃ僕も不利だから、教師側には少し多めに武器を与える。高性能な武器にもする。ああ、君らにも少ないかもしれないけどあげるから、気にしなくていいよ。で、君らは先生達の戦争から避けながら、これからを戦うんだ】

つまりは、ほぼ状況は五分五分か・・・。

「これからゲームだな」

僕はそう言っ、スピーカーを睨む。

【いや、これからが戦争さ。6時から12時までの生きるか死ぬかの大決戦。それがこれからの物語だ。君らが大人になれるかなれないかが関わってくる決戦だ。そう、これは】

そこで1度間を空けた。

それを僕らの心に響かせるためか、あるいは牽制のための布石か・・・。

分からないけれど、それに続けた。

【戦線名：シンデレラバトローション】



7日目・Cinderella Battalion (後書き)

ようやく出せました。【シンデレラバトローション】

これで、1区切り。そろそろ物語がテンポ良く進むだろうな。

7日目：struggle struggler (前書き)

戦いしはぐれ者

struggle 抗って戦う。

straggler それる、はぐれる

放送はそれだけで切れた。

言いたい事だけ言って、終わらせたという印象を受ける。

「……恐らく、厳しい戦いになる。取り敢えず、教師達の攻撃に対応しよう」

「そうだな。逆に言えば、教師達を全員殺してしまつて、戦争が終了したとしたらダメだつて事だ」

神道君はそう言つてから、教壇に立つ

「アイツへの調査は俺達待機部隊が行う。お前らは教師達の相手をしておけ。如月、無花果、来い。あと、羽賀と橋田も連れていくから、監視役を新しく置いておくんだな」

そういつてから神道は教室を出ていった。

「私達も行きましょうか」

無花果はそう言つてから僕の横に立った。

僕は黙つて立ち上がったから席を離れて廊下へと向かう。

「で、これからどうするつてんだ？」

羽賀が神道に訊いた。

「情報を集められる部屋へと向かう。本来ならば職員室も調べたいところだが難しそうだ。だから、まずは図書室に3人、校長室に2人でいいだろう。出来るだけ1人では行動するな。以上だ」

橋田が手を挙げて、

「誰がどこに行けばいい？」

と神道に尋ねた。

「俺は校長室へ行く。橋田がついて来い」

「ど、どして私が……」

少し不安げに言った。どうやら神道と2人は恐いらしい。

「お前が1番、弱そうだからだ。守るべき人間が居る。そして、校長室に来て一番役に立ちそうだ」

と、神道は優しいセリフで答える。彼にしては優しい言葉ではないだろうか。

「は……はあ」

「俺では不服か？」

「い、いえ……」

と、ライオンとシマウマみたいな接し方で2人は対応していた。どちらがどちらの動物かは略。

「私達は図書館で何を調べればいいの？」

無花果が言った。

「最近、電波ジャックのような事件があったかどうかや、この周辺で電波に関わるところが壊されたりしていないか。或いは、この辺の地図で、元々電波に関するものだった会社を捜せ。新聞やインターネット、過去の地図などを参考にしろ」

「分かったわ」

それだけの対応で無花果は先に図書館へと向かう。神道も動き始めた。

「じゃ、俺達も行くか。気をつけるよー、橋田ー」

「はい。そちらも」

と、羽賀と橋田が軽い会話をしてその場を離れていった。

僕はその羽賀を追いかけた。

少しして

「羽賀」

「何だ？」

「お前、橋田が好きなのか？」

「そういってもかんでも恋愛感情で片付けるような人間になん

「よ

「違うのか？」

「そりゃそうだ。俺は全員を大事にしたい」

羽賀は真面目にそう答えてから、僕との距離をとるように、少し前を歩き始めた。

「……………おもしろくないの。」

と、不謹慎にもそう思った。

7 目 目 ・ S e a r c h E n g i n e ( 前 書 き )

検索エンジン。

インターネットの話です。

図書室。

無花果に遅れて俺達が入ると、既に新聞を読み漁っていた。まだ1分と経っていないのに、既に2部は読み終わっている。

「ああ……羽賀君、この辺の地域、動き回るでしょう？地図のほう宜しく。如月君はインターネットで『さいばー』や『ねつと』関係を検索してみて」

「了解」

と羽賀はすぐに答えて地図のある本棚から何冊から取り始めた。僕は黙って、唯一のパソコンに座ってから

「お前がパソコンやればいいのに」

と無花果に言った。

「私、機械だけは苦手なのよ。特に武器以外はね」

……あ。

そう言えば『情報』の授業で、パソコンに触っていた時、

「マウス？ねずみの事かしら？」

「くりっくってなに？」

「左ってどっちだったかしら？」

とか言っていた。うん、最後のは間違いなく、彼女なりの冗談だろつ。

閑話休題。

「……ネットのサーバーには繋がったぞ」

「そう、よく分からないけれど」

うん、一々アイツに言うのはやめよう。

検索エンジンに『ハッキング事件』と入れた後、今年の年代を入れる。

「・・・・・・・・」

めぼしい情報は見つからない。最近そういった事件は無いようだ。次に『コンピューター 廃工場』と入れて、この地域の名前を入れる。

「・・・・・・・・」

廃工場自体はいくつかあるようだが、それも小さな部分（チップや精密機械）しか作っていなかったようなので、これも収穫なし・・・・・・・・か。

ふと。

僕は暇つぶしを始めた。

『南瓜生中学 羽賀 祝人』

と僕は打つ。

「あ」

出た。

羽賀祝人：忍の里の後継者

・・・・・・・・終わり？

っていうか、何でこんなことが出るんだ？誰も知らない情報じゃないのか・・・・・・・・！？

あ。でも、訊いたら教えてくれるくらいだから、案外セキュリティは薄いのかも。

・・・・・・・・。

僕は気になって、さらに名前を打つ。

『南瓜生中学 橋田明日香』

出た。

橋田明日香：特別な目を持っている。昔からバードウォッチング

をしていたことと、家柄によって人の顔色を伺って過ごしてきたのが、その原点と考えられる。

「……僕らが知らない情報まで……」  
「アイツ……そんな過去があったのか。」

「こうなれば僕の指は止まらない。」

『南瓜生中学 神道結弦』

検索結果

神道結弦：天才。神道家の人間は全て法曹界に流通している。また、警察にも居る。

「どうも簡略化している。僕の調べただけでももっと凄かったのに、でも良く考えると前の2人も短かった。」

「……でないかもしれないけれど。」

『南瓜生中学 無花果弥生』

「……へえ……」

無花果弥生：父親不明。母親は彼女が子どもの頃に死亡した。そして母親の所属していた教会で少女時代を過ごす。教会は不明。

「本当に面白い情報があるもんだな。」

「それにしても彼女はどうも重い人生を歩んできたようだな。もしかしたら、僕が寝ていた間に全員知っているのかもしれないけれど。」

「……僕には特別な事情は無いから、出ないかもしれないけれど。」

「思いながら僕は」

『南瓜生中学校 如月幽鬼』

「と名前を入力した。」

「これは……!？」

「どうかしたの？」

「無花果が反応する。」

如月幽鬼：殺人に秀でた家系、  
『如月』に生を受けた。父親の姓  
である。南瓜生の殺人鬼。

7 田中・Searcy (後書)

記念すべき50話。

いなかからいそいそ。

7日目…Deat(前書き)

いや、

もつ分かるよね？

## 7日目：Death

はっきり言って動揺していた。

「どうして……」

「どうして僕の情報が世間に漏れているんだ!？」

「というか、だとしたらどうして僕は捕まらない!？」

「絶対最近の記事じゃない。最近のものだったら、外から警察が来て僕は捕まっている。」

「……いや。」

「逆だ。最近のだ。そしてこの学校に来ようとした人間は全て殺されている……」

「!？」

「だとすれば……」

「僕の父さんや母さんも……」

「絶望していた。そして気付いた。」

「僕は人を殺すのに大切な人が死ぬのは嫌なんだ……」

「から無花果がああなった時……」

「無花果がこちらに来ようとしているので電源を切った。彼女にそんな動作は出来ない。」

「何で消したの?」

「いや、ウイルスが入ってきて」

「ウイルスはそんな簡単には入らないわ」

「どうして知っている。インターネットを知らない奴が。」

「さっき新聞で覚えた。それにウイルスは情報の授業で習ったわ」

「あっそ」

「で?何があったの?」

「サーバーのアクセスが禁じられていて、インターネットの回線にトラブルがあったらしいから、別方向からのアクセスを考えないと」

いけない」

「?????」

よし。ごまかせた。

というところで図書室の扉が開いた。

「おい！居るか？」

うちのクラスの人間だった。

「どうかしたのか？」

「」

「え？」

「仲間が2人……」

んだ」

「……!？」

僕は驚いて、すぐに走り出した。

無花果と羽賀も後から続いた、はずなのに、僕より前に居る。

「木戸！」

僕が入るとそこに仲間だった2人と思われる死体があった。

「……本当に……!？」

木戸は黙って頷いた。

僕はその死体に触れる。

……冷たい。そして脈を打つ音もない。

死体。

今まで殺してきた人。その終わり。終末。結末。未来。幻想。

「……死んでる」

僕は踏みしめるように言った。

沈黙がその空間を包み込む。

「……………会議といこう」

木戸はそう言って教卓に歩く。

「どうしてこうなったんだ？」

疑問だった。

相手は15人。待機部隊が居なくても、人数的に勝てる。それなのに。

「アイツの言ったとおりだ。向こうの武器が馬鹿にならないくらい強い」

「どういうことだ……………!？」

「アイツが言っていただろう？」

神道が口を開く。

「先生側の武器を強くすると」

「アイツ……………ヒラオカのことか。」

「具体的には？」

「あの2人の死体を見ると、背中に火炎放射機の後があった」

火炎放射機……………。そんなものまで。

「お前らのせいだ……………」

男子生徒の1人が呟く。

「え……………」

7日目・Death(後書き)

そう。

これは、彼らの責任の物語だ。

7日目・Five(前書き)

今回は短め

7日目・Five

は。

「どういうことだ？」

神道が言った。

「お前らがアイツを殺すなんていうから！こんな風に死んでいつてしまっんだ！お前らが言わなかったら、先生殺してそれで終わったんだ！」

「で……でも」

木戸がそう言って止めようとする。

「そっだよ！」

女子の1人が乗じる。

「私達がこれ以上危険になるのは嫌だ！私達は平和がいいんだよ！」

「そっだぜ！俺達は死にたくねーんだよ！」

「そっだそっだ！」

声が響く。

流れる。

消える。

うせる。

見えるけど、見えない。

幻覚。

そう、幻想。

見えても意味の無い。

世界。

そう、これが。

これが僕らの立ち位置なんだ。

「やるなら勝手にやれよ！」

「いただき」

僕は誰かのセリフにそう言った。

「よっしゃ。いいぜ。俺やるよ」

羽賀がそう言った。

「私もそうします」

橋田が言った。

「木戸、後は好きにしる」

神道が続けて、木戸の肩を叩く。

「私も好きにさせてもらいましょうか」

無花果はそう言うから立ち上がった。

僕も立って、黒板を叩く。

「ってわけだ。いいか？」

【どーぞ、お好きに。先生方への武器の改良をやめればいいんだよね？】

「気が利くねー」

と、会話を終了させた。

「ま、まさか……」

木戸が言う。

「まさか、待機部隊全員が戦争放棄か!？」

「待機部隊？僕らはもうそれじゃないよ。君らとは違つんだから」

僕は振り向きながら、教室を出た。

「僕らのはぐれ者だ」

7日目：Five（後書き）

多分、次回も短め

7日目：Kill time（前書き）

暇つぶし。

今回は番外編という理解でかまいません。

## 7日目：Kill time

「貴様が余計な事を言うから……」

校長室に入ってから、神道が言う。

「じゃあ、あつちに居ればよかつただろ？」

「そつだぜ。如月の所為にしてんじゃねーよ！」

「貴様らを放っておけば何をしてかすかわからん。それに、俺達は待機部隊改め、はぐれ者だ。元は待機部隊なのだから、俺がここにいるのは当然だ」

神道の理論はよくわからん。

「これからどうするよ。後、10分くらいで戦線終了だぜ」

羽賀の発言に

「黄色」

と、橋田が呟いた。

「……は？」

「黄色」

橋田はもう一度言う。

「……バナナ」

僕。

「猿」

無花果が答えた。

「……羽賀」

「神道!？」

羽賀が神道に詰め寄る。

「何？神道は俺のことを猿だと思つてんの？」

「連想ゲームだろう!？猿を思い浮かべたら、羽賀が出てきただけだ！」

「よーし、じゃあ、神道からスタートだ。神道！」

「神道ねえ……………」

「……………王」

「僕。」

「チエス」

「無花果。」

「心理戦」

「橋田。」

「ポーカー」

「羽賀。」

「ロイヤルストレートフラッシュ」

「神道い！！」

「羽賀が叫んだ。」

「な、何だ？今のはいいだろう？」

「それ、どうつなげるんだよ！」

「知るか、貴様らの脳で考える！！」

「連想ゲーム 失敗。」

「赤いものと言えば。せーの！」

「血」

「血」

「火」

「火」

「ポスト」

「……………」

「無花果！如月！平和な考え方が出来ないのか！？」

「貴方と橋田さんだって『火』って」

「というか、神道が『ポスト』で1番普通だったな」

「次！朝することといえば！せーの！！」

「洗顔」

「朝食」

「修行」

「二度寝」

「メンテナンス」

。。。。。

「無花果、如月！いきなり普通になるな！」

「貴方が平和な考え方って言ったんじゃない」

「てか、羽賀と橋田。『修行』とか『メンテナンス』って何だよ」

「いや、やるだろ」

「しますよね！」

古今東西一斉バージョン 失敗

【12時になりました。戦線終了です。これ以上の攻撃は、こちらへの敵対と看做します】

「あ、終わった」

僕は呟いた。

「そういえばこの校長室で面白い情報を手に入れたから、明日、戦線時にココで会おう」

神道がそう言った。

「神道君？何をいつているの？」

「は？」

「私達ははぐれ者。今日からここが私達のすごす部屋よ」

「あ」

そうだった。

これからはココで寝るのだ。

不謹慎ながら、修学旅行気分になった。

ちなみに、ソファーに女子2人、校長のリクライニングの椅子に神道君。

僕は床に寝たのだが、羽賀は天井に吊り下がるように眠った。

7日目…Kill time (後書き)

7日目…End

です。

8日目からが問題ですな。

8 日目・取り敢えず、寝る（前書き）

8 日目。

## 8日目：取り敢えず、寝る

次の日。

朝起きると、校長室に吊り下がる謎の男を発見した。

「エンカウントオオオオ！」

僕は思わず叫んだ。

無花果が起きる。

「何！？スライム！？」

朝は案外、普通の人……………！？

ちなみによくやく羽賀だと気付いた。

「はぐれメタルは経験値が高くなる……………」

橋田は寝ながら呟く。

「ダンジョン前はセーブ……………」

神道は言いながら、椅子から落下。

「……………ゴレム来たああ！」

「羽賀が叫んだあああああ！！！」

朝からハイテンションでした。

「おはよう」

僕。

「おはようございます……………」

橋田。

「おっす……………」

羽賀（落下済み）

「……………つむ」

神道（落略）

「おっはよう」

「……何!?!?!?!?!?」

いや、無花果（髪ほさばさ、眠気さつぱりのように見えて、寝ほけているバージョン）!?!?

朝、テンション高えええ!?!?

「……おはよう」

「あ、戻った」

元じく（元の無花果の略）に進化した。寝ほけが3下がった。

「あのさ、僕はこれ、コメディイにしたいくないんだけれど?」

「意見としては同じ」

「吊り下がってた奴が言うな」

何の修行だったの。

「は? 決まってるんだろ? 忍者の修行だよ」

「……そうだった」

いかん、そうだ。

これは殺人ドタバタコメディー何だ! 違う。

「……このままじゃ語り部崩壊の第三者目線物語になる。」

さて。ようやく、皆が落ち着いてきて、一人一人別々の行動を始めた。

無花果。

「……」

「朝の反省か?」

「……私がこつこつと積み上げてきたキャラが崩壊してきた……」

コイツキャラとか作ってたのか……。

「てことはアレが素……」

「うつさい、黙れ、消えるか死ぬ、或いは殺す」  
放置。

羽賀。

そこに合った椅子を積み上げて、タワー状にして  
「うおりゃー！」

蹴る。

右にずれて倒れそうになる。

「どりゃー!!」

右側を蹴る。

左にずれる。

繰り返し、繰り返し、繰り返し。

「暇なのか？」

「けりの速さを上げる修行だ」

「お前、日ごろからしてんのか？」

「まあな」

「何のために？」

「スタイル持続」

「OLか！」

突っ込み後、放置プレイ。

橋田&神道。

「・・・・・・・・ポスト」

「手紙」

「メール」

「ええー!?!?どうして、手紙≠メールなの？」

「・・・・・・・・近代的メールのことだろう」

「違うよ!手書きと機械では!」

「メールだって手で打つだろう?」

「はあ・・・・・・・・神道君は分かってないね」

「メールの次だ、さっさとやれ」  
「携帯」

「au」

「えー携帯は」

放置。

何か全員放置すべき状態になってしまった。

「寝よ」

8日目・取り敢えず、寝る(後書き)

何かもうグダグダ・・・W  
W

8日目・仕方なく、抗う(前書き)

暇。

あー、暇。

おもしろい本を募集中。

## 8日目：仕方なく、抗う

6時。

いつものアナウンスで戦線が開始された。

その日は授業は全無視。

見張りは交代制で、皆、一人一人好き好きに暇を潰した。

「で？面白いものって何？」

まずは僕が神道に質問する。

「待つてろ」

神道が立ち上がり、校長のデスクの引き出しを空けて何かを取り出す。

「それは………？」

「学校全体の名簿だ………が」

机の上に置く。

「11冊しかない」

「え？」

この学校は1学年に4クラス。だから、本来名簿は「12冊」なければならぬ。

「俺達のクラスの名簿のみ存在していない」

「どういうことなんだ？」

羽賀が天井にぶら下がりながら言う。

「さあな。俺にはその意味は分からない。しかし、さらに面白い事を言えば………」

さらに何かを出してくる。

3枚。

「………おい！これ！？」

「そっだ」

そこに写っていたのは……あの3人だった。そう。

既に死体になった、僕達のクラスの3人だった。

「俺に分かるの一点。この名簿は死んだ人間のみだ」

「死んだ人間……」

それを確かめるためには……。

「先生側の名簿……ね」

無花果が言った。

「先生側も死んだ人間の名簿があるかもしれないってことか？」

「それを確かめるために行くんだよ」

僕の確認にそう答えてから神道ははしごを上る。

忘れているかもしれないけれど、この間の戦いで天井は職員室とつながり、職員室自体は利用不可能になっている。先生方は恐らく情報室だ。あそこは生活しやすいから。

「……どうだ？名簿は？」

橋田と羽賀を置いて、職員室に上った。恐らく今は大丈夫だろうけれど、橋田は1番弱いので、危険性が高いとの判断だった。

「無いな」

神道はそう答えた。

「生徒の分だけ取られているのかもしれないな」

「そう……か」

と。

僕はなんとなく先生方の机を見た。

……。

「なあ、パソコン使えそうかどうか見てくれないか？」

「……なんで俺に言う」

神道は言った。

「俺できない、無花果論外」

「……………羽賀あ！」

神道は下に降りていった。

何だ。アイツも出来ないのか。

しばらくして羽賀が上がってきて、パソコンをいじり始めた。

「あ……………これは無理だ。こっちは……………」

と先生方のノートパソコンをいくつか触る。

「……………お、これはちょっと直せば使えそうだ」

「じゃあ持って降りよう」

持って降りて、それを眺める。

「……………どうだ？」

「ん、繋がったぜ」

パソコンのインターネット環境を戻し、ネットの検索画面を開く。

「で？何調べるんだ？」

「……………南瓜生中学校 羽賀 祝人」

「は？」

羽賀は突然、自分の名前を言われて固まる。

「いいからいれろって」

「……………分かったよ」

しびしびながら入力すると

「……………なんだよ……………これ」

検索結果の1番上をクリックして、羽賀は驚愕した。

「俺……………なんでばれてんだ……………え？」

パニックが起きている。

そりゃそうだ。僕だって、自分のを見た瞬間、同じ感情に見舞われた。

そう、これは何者かが作り上げた僕らの『真実』なのだ。

## 8 日目・珍しく、慌てる

「……………一体どうやって調べたと言うのだ」

「私のことまで調べてあるわね」

「こんなの……………調べるとかじゃないよ……………私が  
口走らない限りわからないことだよ……………」

3人もショックを受けているようだ。1名、微妙だけれど。

ちなみに今は、橋田の代わりに羽賀が見張りを担当している。

「……………皆のが本当にある以上は、まあ、否定できないだろ  
うけど、僕はそこに書いてある通り、殺人鬼だぜ」

と自己申告してみた。

「あ……………道理で強いわけだ」

羽賀は冷静に言う。

「俺の推理どおり、学生だったな」

神道はさらに冷静に言う。

「殺人に対して冷静な顔だと思ったんだ。やっぱり、あの目は殺  
人経験者の目だよな」

橋田もあんまり驚いていない。

「私は知っていたわ」

無花果は普通に対処した。

盛り上がり欠ける。

何か必死に隠しておしてきて、最後の方に言って、わああ！みた  
いな盛り上がりかと思ったら、普通なタイミングで言って、普通な  
感じであしらわれたって感じになった。コレは小説としてはどうな  
んだろう……………。

さいきんこればっか  
閑話休題。

「……もしかしたら、逆から追えるかも」  
橋田がそう呟いた。

「え？」

「この情報源を探る。もしかしたら面白い情報にたどり着けるかも」

「そんなことできるのか？」

「やってみるよ」

橋田がパソコンを操作し始める。

無花果は画面をしばらく見た後、頭を抱えた。情報量が多すぎて分からないのだろう。

俺もそこまで得意ではないので一旦スルー。

神道は興味深そうに見ている。

「……ダメだ。もっとハードが大きくないと無理かも」

「情報室へ行こう」

神道はそう言っただけで校長室を出た。

「彼は行動が早いわね」

無花果も次いで出て行く。

「……行こうぜ、橋田」

「あ、はい」

橋田と一緒に俺達も校長室を出た。

「神道、てめえ、いい加減にしるよ……」

「何を言っている。貴様にキレられるようなことをした覚えは無い」

「俺は今まで我慢できていたことを誇りに思う……」

「羽賀はそう言っただけで、神道を投げ飛ばす。」

「何を」

静かに言いながら神道は地面で受身を取る。

「おい！どうしたんだ！？」

「神道君が彼を『服部くん』って呼んだのよ」  
「ああ……………。屈辱的だわな……………」。

「おい、2人ともー。さっさと行こうぜー」  
「止めるな！如月！俺はああー！！」

ああもう……………。  
面倒な事になってきた……………。

8 日目・珍しく、慌てる（後書き）

閑話休題の読み仮名はわざとです。

## 8日目：無意味にも、思う

半強制的に事態に收拾をつけ（本当に面倒な事なので実際は省きたいのだが、少しだけ説明しておく）、羽賀を無花果が蹴り飛ばして神道を僕が押さえ込んだところ、2人とも暴れ始めて、僕と無花果も乱戦参加になった。それで危険な状況になったところを、橋田が機関銃を撃ち続けてくる事によって事態は大事にならなくて済んだわけだが、彼らのいざこざはいまだ、治る気配は無い）…………

ああ、そうそう、事態を抑えた後、

「校長室のファイルを全て運ぶ」

と神道君が言い出した。

「どうして？」

「校長室は利用しない。あそこは睡眠に適していない。だからあそこにある書物を全て移動する。必要の無いものは置いていけ」

「じゃあ拠点は…………？」

「情報室だ。あそこなら教師達が拠点にしているはずだから奪った後の道具をそのまま利用できる」

とそこまで言ってから、自らも本を取り出して運び始めた。

「どうして俺がお前の言う事きかなきゃなんねーんだよ」

「役に立たない奴は上の命令を聞いてればいいんだ。黙ってやれ」

「はあ！？誰がそこまで言われて手伝わっつーんだ？考えりゃわかんだろうが」

「……………ああ、出来ないのか」

「……………出来るし！俺1人でこんくらい運べるってのー！！」  
という2人の喧嘩があったことを一応知らせておく。

ちなみに良い様に利用されているとは知らずに、マジで全部を（割と余裕そうに）羽賀は運び始めた。

「お前、パソコン得意なのか？」  
道中、橋田になんとなく聞いてみる。

「うん…………昔から、そういうのばかりだったから」

「へ…………それで眼がいいんだからすげーよな」

「……………如月は」

橋田は僕に向かって言う。

「如月はどうして殺人鬼なんかになったの？」

……………

沈黙。

後方で喧嘩していた羽賀と神道も黙る。

無邪気な質問ほど恐いものはない……………って聞いたことがあるな。

「……………なんでだと思っ？」

逆に聞いてみる。

「……………そういうのが好きだから？」

「うーん…………。別に好きじゃないかな」

「何で？」

「さあ。僕にも分からないんだ。ただ、最初の殺人は、僕の私利私欲のためだったのは覚えている」

……………

橋田が黙る。

「僕は、家族を守りたかったんだよな……………」

「家族を？」

「確か、誰かが家に来て……………家族を殺していた……………僕はそれが嫌だった……………。だから僕は如月の血縁とか関係なく『それ』を殺そうとした」

……………

「結局守れなかったけれど」

「そう……なんだ」

「如月家は代々、殺人をしてしまうように神様に創られているんだよ。はい、終わり」

僕はそう言っただけで無理やり話を終えた。

でも、どうなんだろう。

僕は本当に家族を守るために殺人を犯したのだろうか。

……もしかして殺人を犯す理由を、家族を守るためにしたのかもしれない。

あの時の記憶が鮮明に覚えているような気がしていたけれど、要所所抜けている。

……僕はどっちなんだと思う？

誰に問うでもなく、そう思った。

## 8日目…ずる賢く、勝つ

「とっつぬー！」

妙な言葉でそう叫びながら、羽賀が情報室の扉を蹴り飛ばした。

「！」

中に居たのは数人の先生方。残りは他の場所で何かしているのだろうと思う。

「動くな！」

神道が言いながら片手で短機関銃を構える。僕と橋田も銃を構える。

律儀にも教師達は動きを止める。

「教師の残り人数は15人……。ここに居るのは4人……か」

神道が言いながら、もう一方の手でハンドガンを取り出し、1人の肩を打ち抜く。

「結局やるのかよ……」

教師の1人が呟いてしゃがみながら、武器を用意する。

「待て！」

神道が叫ぶ。

「取引だ。荷物を全てここに置いておいてくれれば、貴様らに手を出さない」

「………応じる理由が無い」

1人が言う。

「だったら死ぬか？別に俺達は貴様らを殺して、無理やり退去願ってもいいのだ」

「………」

教師達は黙る。そして

「分かった」  
と呟いた。

そう言つて教師達は武器を置いて、そのまま情報室を退去しようとする。

「後で絶対殺す」

教師達は呟いて出て行つた。

あーあ。

「よし、さつさと行動を起こすぞ」

「先生側のパソコンを起動してください」

橋田と神道は行動を起こす。

「食糧は割りとあるな。武器もまあまあか」

羽賀は言いながらお菓子に手を伸ばす。

「後、5秒よ」

「よし、橋田のパソコンは守らないとな」

僕と無花果は念のため、パソコンを守るように立つ。

轟音。

激しい爆発音と共に、入り口の扉がこちらに飛んでくる。

「任せろ！」

俺はそれを右足で蹴り止める。

「う………つと」

止まりにくい。が、何とか防御に成功した。

「ずるいわよね。取引とか言つて教師方を外に出して道具を奪つた拳句、時限爆弾でどうせ殺すという………」

無花果が蔑んだ目で神道を見る。

「ずるくても勝てればいいんだよ。これで向こうは11人だ。それにしても手ごたえの無い敵だな………」

神道は眠そうな顔で言う。本当に退屈そうだ。

「ゲームとしては成り立ちにくいかもね」

僕はそれだけ言っつて橋田を見る。

「どうだ？」

「パスワードですね。でも心配ありません」

そう言っつてから、キーボードを凝視する。

「……見えました」

橋田はキーボードを叩く。

そしてEnterキーを押した。

「どうやったんだ？」

「キーボードの地味な傷や、最近良く触られていて、地味にへこんでいるところ……後、指紋のつき具合とか色々確かめました。後はそれで順番になりそうな語句から搜してみたのです」

「は……」

凄い事するもんだ。

そう思いつつ、僕は全く別のことを考える。

もし、教師達を早く殺せば、平和に終わるのだろうか……

壁や窓の破片を見てそう思った。

8 日目・必ず見る賢く、勝つ（後書き）

どんな形でも、勝ちに勝ちだ！

8日目・突然に、訪れる（前書き）

ちよい短めです。

あ、いつもどおりかも。

## 8日目：突然に、訪れる

「暇である」

はがのはつげん。

「きさらぎはむししている」

「いちじくはようすをみている」

「はしだはまほう『パーソナルコンピュータ』をつかった。すべてのあいてのこうどうをむしできる」

「しんどうはまほう『ウワグツノシュウライ』をつかった」

「口で言うようなゆったり感は無く、上靴は時速160キロくらいの速さで飛んでいく。」

「はがに0のダメージイ！」

羽賀は必死で避けていく。

「殺す気か!？」

「お前が暇だと言うから、俺なりに対処してやったつもりだが？」

「てか、何だよ!あの冷たい反応は!！」

「ドラクエ仕様だ。喜んでおけ」

さて、橋田がパソコンを操作している間、僕らは暇なわけでありまして。

これは本当に何をしていればいいのか分からない。ので。

「ちょっと爆破跡を見てくるよ」

とだけ言ってから入り口の扉を開けてから出て行った。

「暇だから、俺もついてくよ」

と羽賀が言ったのを聞いた。

「……………うん？」

僕の視線の先には血液が階段を染めていて、3つの死体が落ちて  
いる。

「どうした、如月？」

「……………死体が足りない……………」

「え」

あそこに居たのは4人。死んだのは3人。

「1人助かったわけか……………」

「まあ……………大丈夫だろう」

僕は呟いてから階段を降りていく。

「如月！避ける！」

「え」

パン。

銃弾が僕の頭をかすめた。

「な」

「チィ！」

そのまま銃を連射する。

「如月！」

羽賀がその距離から飛び降りて、ソイツを蹴り飛ばす。

「ぐ……………」

ソイツは階段の壁にぶつかって、怯む。

「おい！コイツは！」

「死に損ないだよ」

逃げ出した教師の中の1人だ。

ダメージを全く食らってない。遅かったか、早かったか……………

「死ね」

教師はすぐに立ち直り、銃を構える。

「避ける！」

僕は叫んでから、転がる。羽賀は飛び上がって階段を上がる。

「舐めるなよ」

今度はマシンガンを構えて、僕を狙う。

僕はそのま階段を転がり落ちるとい方法で逃げる。

そのまま一番下まで降りて、立ち上がるうとするが、その教師は銃口を僕の額にしていた。

「……………あれれーおかしいぞー。先生って陸上部の顧問でしたっけ？」

「国語担当だ。しかし高校では陸上部の走り幅跳びの選手だった」  
階段を一気に飛び降りてきたって訳か。

「時間を掛けると羽賀が来そうなので、じゃあな」  
と銃の引き金に指をかけ、

そのまま教師は頭を打ちぬかれて倒れた。

「……………!？」

角度からして羽賀じゃない……………。  
振り向く。

「やあ」

「……………木戸……………?」

8日目：その意味を、知る

「何のようだ？」

神道は現れた木戸にそう尋ねた。

無花果と羽賀は邪魔にならないように離れ、橋田はまだパソコンの画面と格闘している。

僕はその空間に立ち会うことにした。

「単刀直入に言おう」

木戸はそう言って、机の上に両手を置いた。

「僕らの元に戻ってきてきて欲しい」

と言いながら頭を下げた。

「……どういうことだ」

神道が説明を促す。

「僕らはあの後、皆と相談した。それがこの結果だ」

「……」

「このまま踊らされて、ゲームにだけ勝ったって、それは向こうの手の上での出来事だ。僕らはその上から飛び出る」

「如月が言った事と、そう変わっていないな」

「そう……。だから僕らは、如月君の意見を完全に受け入れたのさ」

木戸はそう言うが、

「ありえない」

と、僕は呟いた。

「……」

「その中のだれかはそれでも、『まだ死にたくない』と思っているはずだから」

「……いや、僕らはちゃんと」

「無理なんだよ」

僕はそれでも言う。

「絶対、嫌がつている奴が居る。死にたくないのは人間の本能だ」

「……………」

「ソイツは、今ココで自分だけ違う意見を言うのを恐がつている。それも本能だから」

「それは」

「戦えるはずが無いよ」

僕はそう繋げてから、立ち上がった。

「……………だったら」

木戸はそう言った。

「え？」

「だったら、試せばいい」

そう言うって立ち上がり、情報室の扉を開けた。

「！」

そこにはボロボロになったクラスメイトが居た。

「僕らが勝手に【彼】に宣言した。その結果、向こう側の武器が強くなり、僕らはこの様だよ」

「貴様ら……………勝手なことを」

神道が言う。怒りではあるが、矛先の違いを感じる。勝手に戦ったことより、怪我をしたことに怒っているようだ。

「僕らは更に、1人を失ったよ。これで合計26人になってしまった」

「……………」

「それでも先生を1人、消した。さらにコレが僕らの成果だ」

そう言うって、後ろから2人が何かを持ってくる。

「……………ん？」

大きなバズーカのようなものだった。

「……………これは……………!？」

「バズーカだよ。君が思っている通り」

「・・・・・・・・」

「これが僕らの覚悟だ。僕らは意地でも勝ってみせる」

そう言っつて、木戸は僕らを睨みつけるほどの目で見つめた。

「死ぬ覚悟だつて・・・・・・・・・・できてるぞ」

8 目・その覚悟を、受ける (前書か)

## 8日目・その覚悟を、受ける

その日、僕はいつもどおり、寝る前に屋上に上がった。

「……………」

僕らは結局、彼らと共に戦うことにした。

しかし、それを僕は最後まで納得しなかった。

死人が増える。それを知っていたから。

「如月くん」

「んあ……………」

目を瞑っている間に、無花果が来たようだ。

「い！」

僕の目の前に立っている。しかし、僕は寝た状態。彼女のスカ―

トは中学生らしく短いので。

「角度を考えると、アホ」

僕はそう言つて、上半身を起こした。

何か、チャンス逃しているような気がするが、僕はそういう罪

悪感の残る事はしたくないというか……………。

閑話休題。

「何か用？」

俺は取り敢えずそう訊いてみる。

「貴方は殺人鬼なのに人が死ぬのは嫌なの？」

「出来るだけ……………。特に僕に関わつたような人が死ぬのは

ね。そんなのを見るくらいなら自分で死ぬ」

「……………貴方は一体何なのかしら」

「え」

彼女の思わぬ発言に止まる。

「え………つと?」

「貴方のような殺人鬼は始めてみるわ。だって、殺人鬼は殺人が好きで、人殺しが好きで、人が死ぬのが好きで………って、基本的にそういうおかしさを持つているはずなのよ」

「そりゃあ………そうだろうよ」

「そうじゃないと殺人なんてやっていられない。」

「では貴方は何故、そうなのかしら?」

「………もしかしたら、それは浄化かもしれない」

僕は唐突にそう思った。

「この戦争で仲間達と戦ったり、守ったり、彼らのために叫んだり、怒ったりして………僕の中の何かが狂い始めたのかもしれない。無花果の事を好きになってりして、そんな風に僕自身が変わっていったんだと思う」

「そう………え?」

「何?」

「あ、いや」

「あ、そうだ」

思い出した。

「無花果のことが好きだったんだよ。出会ったときから」

「そんな死亡フラグみたいなことをどうしてこのタイミングで言うの?」

「さあ。でも、僕は今、こうして無花果と一緒に居れたり、木戸たちと戦えたり、今下で聞き耳を立てている待機部隊の3人と笑い会える日々を出来るだけ永遠に繋げたいんだよ」

「………」

無花果が冷たい視線を下に向けた。

「………はは」

「えっと………」

「貴様らの無防備が悪い」

と3人は弁解（なんて誰一人してないけど、まあ、）した。  
こういう日々が楽しいと思える。  
それを僕は望んでいたんだ。

「寝るかな」

僕は屋上の扉の前に立ってから、

「お前ら、絶対死ぬなよ」  
と告げた。

それは死亡フラグではなく、絶対に生きていくという意思表示だった。

次の日。

僕らの半数以上は消え去る、先生側の猛攻が始まったのだった。

8日目・その覚悟を、受ける（後書き）

8日目終了。

報告：次の日にめっちゃ死ぬ。

9 日目・超SHOCK(前書式)

朝食。

## 9日目・超SHOCK

次の日の朝。

僕は朝食をとることにしていた。

「あら」

「あ」

「ん………？」

僕は偶然、廊下で遭遇した。

それぞれ自分の朝食を盆にのせたまま。

「どうした？」

「いや、ちよっと情報室まで」

「貴様らもか」

僕と無花果と神道は偶然そこで出会ったので、そのまま一緒に行動をすることにした。

「どうして情報室で？」

無花果が僕と神道に訊いてくる。

「いや、橋田が昨夜から情報室で頑張っているって聞いたから」

「俺もだ。羽賀がそう言っていた」

「当の本人は居ないわね。冷たいのね………」

そういつて更に歩き続ける。

「………しかし」

神道が突然言った。

「『奴』はどこで俺達のことを調べたんだ………？俺はともかく、如月や無花果、それに羽賀や橋田の情報は無かっただろうに」「つまりは、私達が相手にしているのはそのくらいの男だということでしょうよ」

そう言っつてそのまま階段を昇っていく。

「それにしても、先生側には一体どんな武器が渡ったんだろうな？」  
僕はなんとなく訊いてみる。

「さあな。しかしバズーカ砲を用意するくらいだ。何をしでかすか分からん。現に、火炎放射器だって奴らは用意していたのだからな」  
「それもそうか」

と、そこで情報室に到着した。

「あ」

無花果が言った。

「橋田さんと一緒に食べようと思っていたのに、橋田さんの分を取ってくるのを忘れたわ」

「あ」

「……………」

そういえばそうだった。

……………。

「ま、いいや。私の分を分けましょう」

そう言って無花果は情報室の扉を開けた。

「あ」

開けると、羽賀の上に橋田が横たわっていた。

「……………失礼しました」

「待て」

冷静に羽賀は対応して、その場を止めた。

「技？」

「ああ……………。どうも護身用技が知りたかったらしいから、1つ教えた。そしたら、失敗して、さっきの状況になったわけだ」  
羽賀は言いながら朝食をとる。

橋田の分は羽賀が持っていったらしく、橋田も食事を取っていた。

「橋田。パソコンの調子は？」

「ようやく向こう側とアクセスできそうだよ。言っても、昨日1日は向こうとの通信に手間取っていただけだから、つながることさえ出来れば何とかなるよ」

橋田はそう言うってから、朝食を終えて、またパソコンと向かい合った。

「そういえば、あのバズーカ」と羽賀が言う。

「昨夜のうちに直しておいた。使いたければ使え」

「昨夜つて……じゃあ、貴様らは昨夜から一緒にいたということか？」

「ああ……」

「夜通しで一体何を……!?」

何か無花果のテンションがおかしい。

ま、僕の預かるところではない。

「今日一日は、橋田はこのまま作業をしてほしい。羽賀はここで見張り。俺は本部のほうで行動する。如月と無花果は自由にしろ」

そう言うってから神道は朝食後には情報室を飛び出していた。

「僕は本部にしようと思うけど……」

「そう。じゃあ私はこちらを」

無花果はそう言って情報室に残った。

僕はそのまま本部……つまり教室に向かうことにした。

9日目・昨日の稀有（前書き）

題名を読もうとしてください！！

『昨日の今日』に聞こえますよね！？

## 9日目：昨日の稀有

朝が終われば昼が来る。

そして昼が来れば夜が来る。

そういう世界なのだ。

戦線開始アナウンスが流れて戦争が始まった。

「今日からは厳しい戦争になる。絶対に死人が出るだろう」

木戸はそう言って、

「ま、気楽にいこうよ」

と続けた。

無花果と羽賀と橋田は未だ「アイツ」を調べている。

パソコン以外の方向性からも調べを進めているらしい。今日には色々情報が纏まりそうだ。

ともすれば、本日の戦いは俺と神道で何とかするしかないということなのだろう。

そこまで考えた瞬間だった。

教室の入り口が爆発した。

「な、何だ!？」

ていうか、教壇に立っていた木戸と神道が吹っ飛ばされた。

「くっそが!」

「何が起きた!？」

2人とも生きていたようだ。

それにしても。

「あっちゃ……。。そうか。コイツ、弾丸入れてなかったら空砲になるのか。近未来的な武器だなあ、おい」

爆発した入り口を見る。

1人の男が立っていた。

「コイツ……は」

はつきり言つてよく分からないものを担いでいた。

バズーカ……ではないけれど、それに近い何か。水鉄砲のタンクのようなものが接続されている。ああ、そうだ。それだ。

巨大な水鉄砲を担いでいるというイメージだ。

「じゃ、もう一発やってみるか」

男はタンクの中に彼の水筒に入っていた液体を入れ始める。透明な液体だ。

水 いや、アレは違う！

「行くぜ！」

水鉄砲を担いだ。

そして引き金に指を掛ける。

「逃げる！ガソリンだ！」

「遅い！」

その水鉄砲の銃口から。

煙が出ていた。

俺の真横が全て炎に包まれる。

そして気が付けば消火されていた。

俺の真横には死体がいくつかが転がっていた。

一瞬で。

一瞬で俺達の仲間が消え去った。

「てめえ！！」

「気にするな。すぐ楽になる」

男は尚もそういい続ける。

「これが物語だったら、さっさと終わらせるために一瞬で殺して  
いると思われるぜ……」

冗談を交えて、神道が怒る。

「コイツは一筋縄ではいかないかもな……」  
俺もそう言っただけでナイフを構えた。

現在総戦力

生徒：22人 教師：9人

9 日目・昨日の稀有（後書き）

あの、別にさっさと終わらせるために一瞬で仲間を殺そうと思っ  
ているわけではありません。

当初からこの流れは考えられていました。

本当ですから。

9 日目・絶望Very(前書き)

直訳で『めっちゃ絶望』。

……ん？『絶望超』か？

ていうか、普通にVeryの位置がおかしいね。

## 9日目：絶望Very

この戦いはフィクションです。実際の死亡は全く関係有りません。

「だったらよかったのに」

僕はそのまま右手に銃を構えて、左手でナイフを構えなおす。

試しに1発、頭に向かって撃つ。

「当るかよ」

ソイツはその水鉄砲（で、もういいよね）で銃弾をガードする。

鋼鉄製か何かか………？

「お前マジ、うぜえ」

男はそう言っつて、今度は何かを入れることも無く空砲を放った。

僕に向かって放たれたその空砲は、まるで雨を集合させて横に向かつてはなつたかのような、ジクジクと攻撃してくる痛みと台風のごとき風圧を呼び起こす。

「く………」

吹っ飛ぶ………！！

僕の足が地面から離れた。そしてその勢いに任せて、後ろの壁にぶつかる。

当然、痛い。

地面に向かってうつ伏せに倒れた。

「………くっそ」

立ち上がるうと、体を両手で押し上げる。

「もう一発やっとかか」

男はそう言っつてからもう1度構えた。

弱点が分からない以上、こちらとしては逃げ続けるしかない。

俺は必死に立ち上がってから横に向かって転がった。

ほぼ同時に引き金が引かれて、先ほどまで俺がいたところが、風圧でどんどん吹き飛んでいく。

「外したか」

男はそう言ってから、水鉄砲を下げた。

「俺を殺すことは不可能だ。なぜなら」

「撃て！」

木戸が叫ぶと同時に全員が銃を撃つ。

「人の話は聞くもんだぜ？」

男はそう言う前には既に、そのままの態勢で引き金を引いていた。

銃口は上。

すると、先ほどまでとは違い、空気は銃口からではなく、ボディの部分から空気を発射した。

360度全てに向かって風を発射する。

銃弾はその風によって停止を命令され、そのまま地面へと落下する。

「!!!」

「こんな大きいものを持っているからガードはしにくいと思ったか？ダメだぜ？常識で考えちゃ」

男はそう言ってから今度は銃口をこちらに向けたまま、発射した。

ボディの部分からも空気が発射されている。当然、勢いは増す。

全員の体を後ろの壁に貼り付けるような風圧は、留まることなく吹き続ける。

「くっそが!!!」

打開策はあるのか？

最新の武器………というよりはもはやSFの域に達している。そつなあんな武器相手にどう、戦えばいいのだろうか。

風を出す武器という事は、基本的には弱点は無いという事。風を倒すには同じ力の風を加えるしかない。が、それは無理だ。

……いや、待て。

本当に弱点は無いのか？

僕は観点を間違えているに過ぎないのではないだろうか。

。。。。。

そして。

ようやく風が収まり、全員が壁から落とされて悲しい音を立てた  
その時に

「見つけたユウレカ……………」

打開策みつけた。

## 9 日目：MYハンド

倒れていた体を起き上がらせる。

先ほどまで床と引っ付いていたかのような抵抗感を感じる。

生徒のほとんどが動けずにそのまま床にひれ伏しているが、立った奴らも居る。当然神道と木戸は立ち上がったものの、打開策なんか見出して居なさそうだ。

となれば……………。

僕のやり方を貫き通すしかない。僕には僕なりの意地があるのだ。

「一応、確認します」

僕はそう言ってから男に人にナイフを向ける。

「何だ？」

男はそう言って笑う。うむ、言っても無駄なような気もしますが言ってみよう。

「引き下がってはくれませんか？」

「無理だ」

でしようね。

僕はそう感じながら、男に向かって突っ込んでいった。

右手の銃の残った残弾を使い捨てるように撃ちまくる。最初から狙いなんか定めるつもりも無いので、頭と胸と両手と両足に向かって適当に撃つ。

バシユッ！

「く……………！」

その適当さが功を奏して、運良く足にヒットした。ラッキー、僕、海馬君になれたかな（嘘）！

左手のナイフを右手に持ち変える。

「帰れ！！」

男はそう言っ僕に大砲（に格上げしました）を構えた。

僕はそれを見てからすぐに、しゃがみこんだ。  
と同時に男は引き金を引く。

空砲は僕の頭上を見事に通り抜けて、壁に後を残す。  
よかった。空砲の威力を強くするために風圧の無駄を省いていた  
ようで、むらが無かったのだろう。予想通り、風は僕の服を微塵も  
仰ぐことなく吹いていった。

その間に僕は僕の細工をする。

「てめえ……今度こそ殺してやる！」

男はそう言いながらも、砲口の向きを変えない。まだ空砲が放出  
中か。

僕はナイフを取り出して、それを刺した。

………！

………よし、これで準備は完了だ。

「死ね」

男は漸く、大砲を構え終えて、僕の方に砲口を向けた。

「如月！」

神道はそう叫ぶ。しかし今はそれに応対できるほどの余裕は無い。

男は引き金を引いた。

僕の真上に象が乗った。

そんな痛みだった。表現の方法が分からない上に、恐らく共感で  
きる人も居ないだろうけれど、そういう感想だ。

「………！！」

声にならない。しかし、それでも僕の手は動くはずだ。

僕は男の足を掴んだ。

男はそれに気付いていない。

右手で、男の足を思いつきり引っ張った。

「な」

男は蚊の鳴くような声でそう言うと、そのまま思い切り床に背中を打ちつけた。

さらにそれだけには留まらない。

自分の放出し続けている空砲によって、自分の体はそのまま床に貼り付けにされる。

「ああああああああ！！」

男は叫ぶ。

しかし、僕に対する時間が長かった所為で、そんなに空砲は長くなかった。

ので。

僕は、その大砲に手を伸ばして、引き金に指を掛ける。

「や、やめ」

「散れ」

僕は引き金を引いた。

今度は男は叫ぶことなく、地面に突き刺さる。さらに、その肉体を突き破らん勢いで、大砲は男と垂直方向に刺さっていく。

さっさと手を離せばいいのに、無意識なのか或いはそういうルールなのか知らないが、男は大砲から手を離さない。

結果。

教室の床を突き破り、下の階の部屋に落ちていった。

ひび割れた教室の床。

そのひび割れは連鎖反応で僕の下床も壊そうとする。ていうか壊れた。

「如月君！」

木戸やクラスメイトが助けようと向かってくるのが見えたが無駄だ。

僕の下は完全に崩落した。

「如月！！！」

神道が叫んだ。

木戸はそこで膝を折る。

クラスメイトも絶望の表情をみせる。

「……………あー」

僕は罰が悪かったけれど、そう声を上げた。

「ごめん、助けてくれる？」

「如月……………お前、どうやって　！？」

神道は僕を見て、驚く。うん、気持ちは分かる。

しかし、僕はここまで想定してから、行動に移したのだから。

僕がした細工。それは、僕が助かるための行動。

僕がナイフを指した場所。

それを僕は見つめる。

僕は貫通して、遠くの床に突き刺したままの自分の手の甲に刺さっているナイフを見た。

そう、僕の左手は床に接続されたままだったのだ。

## 9 日目・MYハンド（後書き）

海馬君っていうのは、僕のもう一つの作品の「丸く収まったこの世界」（略してMW）のキャラクターです。

**9日目・無理なんだい！（前書き）**

あの、気付いている方は気付いているでしょうけど、

今回の題名は基本的に駄洒落系です。

## 9日目：無理なんだい！

「お前、何してんだあ！！」

羽賀はそう言っただけにむかって上靴を投げる。

「ぐふ！」

避ける体力も根気も残っていなかった僕にはそれはもはや弾丸にも思えたので、痛みもそこそこあった。

「いてえよ………。もういいじゃん。お前は、あの妙な大砲の整備頼むよ」

「お前、怪我した分際で何言っただ？ああ？まあ、やるけど」  
そう言っただけから、羽賀は大砲を眺め始めた。

「まさか、アイツの衣服が重かったとはな………」  
さっきの男の死体から剥ぎ取った衣服の一部を持って、神道は言う。

「僕はてっきり脚だけだと思っていただけだね」

さて、種明かしをしておこう。

僕ら全員がああバズーカによって、壁に向かって貼り付けにされて倒れた時に、見つけた打開策。

それは、あの男の衣服にあった。

まずは、1つの疑問。アレだけの風圧をこちらに向かって飛ばしてくるのにもかかわらず、どうしてあの男は動かないのか。

最初は体のゴツイ男だったから、耐えられたのかとも思ったが、それだけで出来るほど簡単ではないだろう。

僕が倒れた時に見たのは、脚だった。もしかして靴とか脚に鋼鉄でも仕込んでいて、体を強制的に支えているのではないだろうか

考えたのだ。

後は簡単だった。どちらかの脚を崩せばそのまま床に向かって倒れる。そして風圧の威力は自分に来る事になる。

以上で解答になっっているのだろうか？なっっていないくても、僕には分かっていないからいいし。分かって無くても、あんな不条理で非常識で非科学的で非現実的なものを見せ付けられて、理解しろと言われるほうが無理難題というものだ。

「何でもいいけどさ」

木戸はそう言ってから、僕の体を見る。

「ホント、いつも気付いたらスタスタのボロボロだよね」

「まあな……。せめて、終了直前ならいいけど、今回はまだそんなに時間が経っていないし」

時計を見ると、まだ時計の針は20時だった。

あの男が来たのは戦線が始まった直後だった。で、僕が気絶した時間もあつた。あの後すぐに気絶したから。

「ていうか、自分の肌を普通刺すか？」

羽賀は大砲をチェックしながらそう言う。

「後、あの状況下でよく弱点なんか見つけられるよな……。何？洗練された神経かなんかなのか？」

「ああ、それは……」

僕は1度口籠る。

「……それは、僕がダメージくらい過ぎて弱っていたから、頭しか働けなつたんだよ。だから、弱点も見つけられたし、自分を躊躇なく刺せたんだと思う」

「ああ、それもそうか」

羽賀はそう言っつて、武器のチェックを続けた。

……違つたらうな。

僕が何で、あの状況下で相手の弱点を見抜けたか……。それ。それは、人を殺すことのみを考える事のできる脳をもっていたから。相手の弱点くらいすぐ見抜けるようになってしまったのだ。どうして躊躇なく自分の手をさせたのか……。それは、自分が死ぬ事なんてどうでもよかったから。最悪死んでもいいけど、1割でも生き残る可能性の残る方法を考えたかったから。

僕の中の神経では、人の死なんかそんなに考える必要の無いものとして処理されているんだぜ？

9 日目・無理なんだい！（後書き）

9 日目・綺麗な薔薇には毒がある(前書き)

正式には棘ですけどね！。

## 9日目：綺麗な薔薇には毒がある

21時になったが特に何かは発生しなかった。

恐らく先生側も予想外だったのだろう。まさか最新式の武器が負けるとは思っていなかったということだ。最高のパターンでは、あれ以上の最新式の武器は無い可能性もある。

現存する戦力数は生徒が22人、教師が8人となった。しかし、今、僕は戦えないし、無花果や橋田をのける事によって、19人対8人ということになる。

しかし、先ほどまでとは違い、戦争の状況は急に悪天候に見舞われた。混沌の渦の中にぐるぐると巻き込まれ、正しい方向性を見失っているような気がする。いや、気がしているだけで、するべきことは明確に分かっているのだが。

『アイツ』を倒す。あいつが敵なんだ。僕らの。

「如月」

斜め上から名前を呼ばれる。自然、見上げる姿勢でその顔を見る。

「………羽賀」

「お前、大丈夫かよ。顔色悪いぜ？」

「これだけ怪我すればそりゃあ、顔を悪くする事だってあるだろ？つてか当然だろう」

僕は自分の全身を纏うように張り付いている包帯を眺める。そして骨も数本折れている可能性もありそうだ。

「これ………僕、骨大丈夫なのか？」

「俺は医者じゃないから詳しいところは分からないけれど、問題が

あるってことだけは分かるぜ」

「それくらい僕にだって分かるってのー」

僕はそうふざけた後に、腕や脚を少し動かしてみる。……うーん、そこまで痛みは感じないけれど、ここで調子に乗って無理に動かすとむしろ支障をきたす事は間違いなさそうだ。或いは、死傷か。

諦めよう。

最悪死ぬ事も視野に入れて考えなければならぬだろう。だって、それが僕の運命ですから。

まあ死ぬ事なんて今、この現状においては最悪ではないのだろう。最悪な状況は、僕の死によって、この戦争のバランスが崩れ、皆が戦争に集中できなくなり、結果、負ける。というところだろうか。

「ていうか、如月。本当に大丈夫なのか？」

「だから何が」

「いや、それ多分痛いとかじゃなくて、疲労だと思っぜ？」

「疲労？」

「お前、最近寝れてないんじゃないのか？」

「……」

否定は出来ない。最近は殺されるという状況に自分の体が本能の基づいて、興奮しているのが分かる。今、こうして戦争に参加できない流れでも、僕は体が殺戮を欲しているのを肌で感じる。

いや、でも確かに、おかしい。これは……何だ？体を重くしようとしている、何かの存在を感じる。しかし、それは疲労のように蓄積されたものではない事も分かる。

……いや、これは、1度感じた事がある。確か、マッドサイエンティストを殺しに行ったときの……！

「羽賀……気をつける」

「？」

「……何が……襲撃している……」

「何が……!？」

「これは恐らく……神経毒」

「ど、毒!？」

そこに居た、木戸や神道がその声に反応してよってくる。

「どういことだ!」

「いや、如月が」

僕は口を開こうとする。

「あ……う……」

ああ、麻痺系なのか？上手く呂律ろれつが回らない……。恐らく頭まで侵食してくるだろう。

「血清あるか!？」

神道が羽賀に聞く。

「神経毒系統は……あるかもしれない」

何を持っているんだ、こいつは。ああ、そうか忍者なのか……

あ、が……。

9 回目…いや、ギャグとかありませんから。私ですから。(前書き)

題名とおり。それにしてもらい。

9日目：いや、ギャグとかありませんから。私ですから。

どうも。

急遽、申し訳ないけれど、私が担当しなくてはならなくなってしまうたわ。主人公ではないとは言え、語り部担当ならば彼にもしっかりして欲しいものね。

「無花果！」

情報室に入ってきた羽賀君が、慌てたように私の名前を呼んだ。

「何かあったの？」

「如月がヤバい。何があったのか分からない。誰がやったのか、どこに居るのか分からないんだよ！」

「……………！！！」

状況が上手く飲み込めないけれど、突然彼がやられるということとは、発された殺気がに気付けなかったということ……………。相手がやばいということは分かる。

「今は血清で落ち着いているけれど、他にも1、2人同じようになっついていて、取り敢えず同じ処置は行ったけど……………」

「……………橋田さん……………」

「私は大丈夫だと思う。だから、皆のところに行って」

「……………分かったわ」

返事もそこそこ私は駆け出した。

「俺がココに残る。ココは任せる！」

「ええ」

羽賀君の言葉の返事も適当に済ませて走った。

如月君がそんな状態になり、現状回復も出来ていない。つまり状況は最悪。

「……………」

しかも羽賀君の話によれば、敵がどこにいるのかも分からない状況

にある。

殺人鬼なら、しっかりして欲しいものね……………。  
そう思ったときには、教室に就いていた。

「無花果さん」

木戸君が私の姿を見ていった。

「どうなっているの？」

「分からない。急に顔色を悪くしたと思ったら、痙攣したりして……………今のところ落ち着いているけれど、状況がどう転んでもおかしくない」

「……………！」

殺気。

微かながらこの教室に、それがある。

……………確かに、コレは『殺人鬼』のように、人を殺す側には分かりにくいかも知れない。私とは違って彼は狙われることにはなれていなかったのだろうから。

……………この教室内に居るわ……………。しかも、気配をほとんど消している」

「……………まさか、透明になっているんじゃない……………」

「透明に……………」

そんなSFみたいな展開が、まさか木戸君の口からであるとは思っていなかった。

「どういうこと？」

「あそこにある、バズーカ見えるだろ？アレは、どうも最新式の武器みたいなんだ。明らかに、この時代では作ることが出来ないような……………」

「……………ああ、だから、如月君はあんなにポロポロなのね」  
そして、それでも恐らく彼は殺したのだろう。

相手が誰であろうと勝つのではない。相手に関係なく、何でも『殺す』。それが如月という人種だ。

それにしても、違和感がある。

「……………」

例えば。

人間の持っている、気配を「1」とした場合、殺気のように強い意志に関しては「10」くらいになる。しかし、今、この状況では、殺気として「1」の気配を感じる。

「……………もしかしたら」

如月君のほうへ向かう。

そして如月君を見る。体中を。

「……………無花果、何をしている？」

神道君が疑問の声を上げる。

「無花果さん？」

周りの男子や女子もこちらを見る。

「……………」

「これ、じゃまね」

私は包帯を外した。

「おい、何をしているんだ」

「……………無いわね」

服を捲り上げる。

「貴様本当に何をしているんだ、答えろ」

「あつたわ」

「……………何がだ？」

神道君が寄ってくる。

「……………これは……………」

如月君の腹部。鳩尾の中心辺りに、1つの丸く赤い斑点があった。

「……………分かったわ。正体が」

私は感覚を研ぎ澄ます。

周りの雑音や気配を消していく。

「……………」

私は走った。  
聞こえた。

## 9日目：力の力

実は。

目が覚めたときに、僕の目の前には無花果が居た。

何をしようとしているのか分からなかったので、取り敢えず狸寝入りに入ることにした。そしてしゃがむと、突然人の腕を掴んだり、首元を見たり、顔を覗き込んできたりした。

何だ？コイツ。本当に何してんだ？

と思つた矢先、

「これ、じゃまね」

今度は人の包帯を解き始めた。いや、別に外面的に怪我は無いからいいけれど、一応、けが人だから手荒くしないで欲しい。骨が痛いという事実は一応存在するわけだし。

「無いわね」

だから何が？

と、次の瞬間、誰にも見えていないであろう角度で、無花果は「ニヤリ」という効果音がつきそうな笑顔で笑った。

コイツ………。僕が起きたの気付いている………!?

そして、俺の服を捲り上げた。

何しやがんだ！

「あつたわ」

だから何が!!

その後、静かになったと思うと、突然走り出して、床を叩いた。

「何やってんだ？」

僕は帰ってきた無花果に向かって言う。

「敵を倒したのよ」

「敵？」

「そう言っただけで無花果が見せた手の上には、黒い点のような模様がついていた。」

「……………あ」

「いや、違う。これは……………」

「蚊？」

「そうよ。敵は『蚊』だったの」

「……………もしかして」

「僕は無花果に乱された衣服を見る。」

「腹部。鳩尾の少し上の辺り……………」

「……………蚊に刺されて……………」

「どうして、気付かなかったの？他の人はともかく、貴方なら気付けたはずよ？」

「……………あ」

「分かった。」

「この蚊は、かなり前からココに居たんだ。」

「僕と、あの妙なバズーカを持っていたあの男が戦っていた最中」

「恐らく僕が壁に貼り付けにされた後、地面に落下した時だろう。」

「この蚊が、毒を持っているということか……………」

「僕は無花果を見る。」

「そういうこと」

「他には！？他にこの蚊はいないのか！？」

「大丈夫そうよ。殺意は他には感じないわ。まあ、毒を持った蚊なんてそうそう居ないものよ。特に、人を殺そうという意識……………すなわち、殺意を持つような猛獣以外の生物なんて、居るとは思えないわ」

「なるほど……………」

僕は安心して、もう一度、背を壁に預けて目を閉じた。

そして僕と同様に倒れ伏していた2人を見る。

「あの2人は？」

「貴様同様、蚊に刺された痕を発見した。羽賀の持っていた血清を貴様に使った後、2人にも使用しておいた」

その発言を聞いて、

「そうか。2人は大丈夫なのか？」

と尋ねた。

僕は、心の奥底では「大丈夫だろう」と踏んでいたが、神道は

「大丈夫じゃない。恐らく、死ぬ」

言った。

「・・・・・・・・・・は？」

9 日目・力の力（後書き）

題名は『かのちから』です。

9 日目・二ヨツキ(前書き)

きならぎ 如月 二ヨツキ

## 9日目・二ヨツキ

30分くらい経った。僕が倒れてから合計で1時間経ったことになる。

.....。

「.....終わったぞ」

神道が脈を取ってからそう言った。

「こつちも.....」

木戸はそう言って俯いた。

.....。

「死んだな」

神道はそう言った。

結論を先に伝える事にしよう。

蚊に刺されて生き残ったのは僕だけだった。

理由は、活力の違いだったと思われる。

「血清は実のところ、貴様には余り使っていない。ほぼ同時に他のメンバーが同様の症状に陥ったからな。貴様なら何とかなると信じていた。だから、そうしたのだが.....」

つまり僕は誰よりも生きにくい状況で生き残ったのだ。

「そもそも、この毒なら普通は死ぬ。本来なら全部使わなければ助かる命なんて1つも無かったはずだ。貴様の生命力の勝ちということだ」

違う.....。

多分、僕の『血』だ。血族だ。

僕は殺すことを遺伝子レベルで組み込まれている。そこから考えてみても恐らく僕の血は.....『毒』を『殺す』ことを選んで

だ。  
生命力じゃない。この状況で勝利したのは僕ではなく、『如月』だ。

窮地に立たされて尚、僕の生命力から何でもかんでもを強くしようとしている、如月の血。人を殺すだけではなく、殺すなら何でもいいのだろうか。

ともあれ、ここで20:8 という戦力バランスになった。

「こんな武器がどんどん出てくるの……」

女子の1人が言う。

「正直キツくね？」

「うん……」

弱気な声が飛び交う。

一瞬にして大半の生徒が消し炭になった上に、得体の知れない敵に攻撃されたにしては、まだ良い方だ。

最悪、この現状に絶望するものも居てもおかしくは無かったのだから。

運良く、この後新たな刺客がくることもなかった。

9日目の劇的な戦況の変化に対応する暇もなく戦線は終了した。

9日目：終わりは始まりな訳である。

その後、

「思ったよりも痛い結果が残ったな」

神道は言いながら暗い校舎の中を歩く。その後ろを僕と無花果が追うように歩く。

「最先端兵器に異常な生物……次は恐竜でも出てくんじゃねーか？」

羽賀はそんな神道の前を歩きながら言う。

「そんな事できるはずがないだろう。バカか貴様」

「じゃあ訊くが、あんな最先端の武器や異常な生物をお前は見たことあんのかよ？」

「……」

「何が起るかも分からない状況だ。何が起きてもおかしくない状況だ。冗談半分が現実になるかもしれない」

「嘘から出た真……ってことね」

無花果がそう付け足す。

「分からないことを考えてケンカなんてせずに、今は情報室での情報に期待しましょう」

そう言って歩き続ける。

ようやく橋田が情報の収集を完了したらしい。本来はもっと前に終わっていたようだが、別のことを新たに始めていたらしく、驚きの情報が手に入ったらしい。

情報室の扉を開けると、

「あ」

橋田が眠っていた。

そうか。疲れて寝てしまったのか……。うーん、起こす

べきだろうか。

「起きろ、橋田」

躊躇無く神道が動き、橋田の頭を叩く。

「最低ね、神道君」

「アホだな。アホ」

「神道………」

3人で取り敢えず冷たい視線を送るが、アイツ自体が冷たい男なので効果はそれほど得られない。

「ああ………おはよう」

橋田はそういいながら、パソコンをつけた。画面を消していただけのように、既に何らかの画面が見えている。

「面白い情報が手に入ったよ………。3つほど」

「3つも!？」

「ちよつと興味本位で、職員室と校長室を1人で歩いてきたからね………」

橋田は言って、寝ぼけ眼をこする。

「お前、勝手に何やってんだ………!」

僕は橋田に食って掛かる。

「ちげーよ。俺もついて行ったんだよ。ただ、俺はその2つの扉の『前』にいたから、部屋を歩き回ったり調査したりしたのは全部橋田だけってことだ」

そう言って羽賀が笑う。

「で、どんな情報なのかしら？」

「じゃあ、まず1つ目」

そう言って橋田はパソコンの画面を指す。

「これはこの学校のネットワーク状況………見ても分からないと思うけど、乱れはほとんど生じていない。だから、誰かが外からハッキングしてこの学校の放送システムや、設置した武器やエアコンやカメラを操作しているわけじゃないってことになるね」

「じゃあハッキングされているわけじゃないってことか？」

「そうじゃない。むしろ、ネットワークを固めて、外からは全く出  
来ないようになっている。そんじょそこらの人ではハッキングはで  
きない」

「……………そういうことか……………」

神道はそう言っ、顔を上げる。

「どういう……………」

「外ではない……………つまり校舎内からハッキングしていると  
いうことだ」

「校舎内……………!？」

「どういうことだ……………」

状況が読めない。

「校舎内の何処かに奴は居るということだ」

「それは……………」

「案外近くにいるということだな」

「次、行くよ」

橋田は言っってから紙を数枚取り出した。

「何者かによっ、校長室の机の上に置かれていたよ  
紙を受け取る。」

「これは……………前と同じか……………」

そこには死んだ人の顔つきの名簿があつた。

「死んだ人間の名簿がそこに置かれていくつてことか……………」

「いや、それはもう起こらないと思うよ」

そう言っ、橋田はさらに数枚、紙を取り出した。

「そこには全員分の名簿がある……………はずだけど、おかしい」

橋田は言っ、

「そこには如月の名簿だけ入っていないんだ」

「……………え!？」

「そしてその代わりに……………」

橋田が見せたその名簿。

写真は乱暴に破られ、名前のところも破かれたような後があるけど、確かに書かれていた。

『平岡』  
と。

## 10日目：探索

戦線が始まって10日目。

死人も増え、現状は最悪といったところか。  
毎度のことながら、作戦会議が始まった。

「さてと……昨日のことから、全員固まっているほうが危険性が少ない。また、サポートに転じやすい事が分かった。だから、行動はできるだけ離れず、人数は最低でも3人以上を原則とする」

木戸はそう言って話を始めると、続けて言った。

「今回はこちらから仕掛けようと思う」

「仕掛ける……」

「先手を相手に取られたら、今この場合は危険だ」

「けど、相手の武器の特性も分からず突っ込むのも同じくらい危険じゃねーか？」

羽賀が言う。

その発言に木戸は頷くと、

「確かにその通りだ」

と言つて、更に「しかし」と話を続ける。

「昨日は、相手の出方が分からなくて、戸惑っている間に、一発で仲間達が焼き払われた。だとすれば、待機していても殺される可能性は大いにあるということになる。また、動かずに出方を待っていたがために、異常生物にも先手を打たれてしまった」

「……」

羽賀は黙って見つめる。

「なるほどな。つまりこういうことが」

神道が納得したように言う。

「どうせ死ぬなら、何か結果を残して死ぬほうが、仲間にとって自分の名誉のためにも得である、と」

その発言に木戸は頷く。

「言い方は悪いけど、そういうことになる」

「犠牲が絶対につきものの戦いともなれば仕方が無いわね」

無花果はそう言って、

「具体的に案はあるのかしら？」

と木戸に訊く。

「そのためには、まず相手側の拠点を捜さなければならぬ。20人ここには居る。5人ずつに分かれて、探索しよう。深追いは禁物だ」

木戸はそう言ってメンバーをわけはじめた。

「で、結局こうなるわけか」

そう言って溜め息。

こうなる、とは。すなわち、毎度のメンバー勢ぞろいである。毎度のメンバーは君のイメージーションの豊かさが感じ取ってくれると信じている。

「どこに奴らが居るのか……。橋田が確認したところでは職員室には居なかったのだろうか？」

「うん。だから、別のところになる」

「また、橋田さんが情報室でパソコンを操作していたから、情報室も違うことも明らかね」

「てことは残ってる大きな部屋は……」

「多目的と体育館……。図書館と後は会議室くらいか？」

「応接室もあるよ」

「ではまずは近いところから潰そう」

「図書館にするか」

誰が何を言っているかは、なんとなくで感じてください。

君のイメージネーションの豊かさが（略）。

入ってすぐ、羽賀が言った。

「……どないやねん」

「何故関西弁？」

羽賀と小さな漫才をした後、図書館を見渡す。

「何も無いな」

神道は言って、どこからか持ってきた本を抱えて、席に座る。

「くつろぐうとしていないかしら？」

「気にするな。時間は遠くはなれようとも、結果は留まり続ける」

「格好いいこと言っているように聞こえるけど、内容は無いからね」

女子2人に責めたてられるが、神道はもろともしない。

「皆！」

図書館の扉が急に開いて、木戸が現れた。

「他の皆が別々の場所で襲撃されてる！」

「何！？」

「頼む！助けに行ってくれ！」

「……チィ！」

誰よりもまず、羽賀が走っていく。場所も聞かずに。まあアイツなら人の気配で捜すだろう。

「どこに居る！？」

「応接室と多目的と体育館と会議室だ！」

「了解。僕は会議室に行く」

そう言ってから、僕はその部屋を去った。

|||||

「私は多目的へ行ってくるよ」

橋田はそう言って、外へ出る。

「では私は応接室へ」

無花果はそう言って去っていった。

「神道君は………?」

「俺はここで待機しよう。全員があわてていくところでもないだろう」

神道は言って、もう一度席に座る。

「そもそも落ち着いて行動しなければ、俺も格好の的だからな」

「それも………そうか。じゃあ僕もここで待機しようか」

「それがいい」

本を開いて、読み始める。

そんな神道の後ろに木戸は立つ。

「で、だ」

神道は言った。対象は木戸だが、視線は本にある。

「貴様は誰だ」

神道は、後ろで紐を握り締めて立っている木戸に向かっていった。

「あつれ………。ばれた?」

10日目：推理（前書き）

初めての神道君の戦い方ではないでしょうか。

## 10日目：推理

『木戸』は、発言のすぐ動いた。  
「死ね」

持っていた紐を神道の首に掛け、思い切り引つ張る。

が。

ブチッ、という音を立てて紐は切れた。

「!?!」

「敵がそこに居ると分かっている限り、見す見す死に行くような真似はしない」

そう言っただけ振り返った神道の口には、サバイバルナイフがくわえられていた。

「ああ……。ある意味凄いな。ホント……」

「他人の殺気でしか人を判断できん殺人鬼と殺し屋や、視力と勘のみでしか敵を理解できん奴らと、俺を同じにするなよ」

くわえていたナイフを、右手に構える。

「あれ……。もしかして、僕、何かミスった？」

「バカが。時間的に考えるだけで済む問題だ」

神道はそう言っただけから、ナイフを左手、右手と分ける。

「あんな短時間で、しかも全員が襲われる可能性は少ない」

「そうか？ありえないことでもないだろ？」

『木戸』はそう言っただけで笑う。

「もし襲われていたとしたら、襲われた事を知らせるよりも前に全滅だろう」

「さつきから可能性の話しかしてないじゃないか。明確な根拠を述べなければ、君の言う、『奴ら』に顔向けできないぜ？」

『木戸』の喋り方と声を完全にコピーしている。

「まあ、結論から言えば、貴様は木戸を知らない」

「……………どういうことだ？」

完全なコピーを批判されたように感じたのか、少し憤慨した様子を見せる。

「木戸は、もしも誰かが襲われたら、俺達のところに連絡しに来る前に自分から行く。自分でどうしようもなくなった時に、誰かに助けを求める。少なくとも、『危険だから』という理由で行動をやめたりしない」

故に、今、お前がここに居る事がお前が木戸じゃない証拠だ。

と神道は続けて、ナイフで『木戸』を差した。

「今一度問おう……………。貴様は誰だ」

「……………OK。ここまでばれちゃ仕方が無い」

そう言って笑う。そして両手を開いて、自分を見せびらかすような素振りを見せる。

「僕は飽く迄、木戸だ。それ以上でも以下でもない。僕のつけている装備は、『変装』に過ぎないのさ」

「変装……………か。なるほどな。そして木戸の『心』以外の全てをコピーしていたということか」

「そうだよ。だから、全てを木戸として僕はこれから生き続ける」

「残念だったな。貴様の命はココで終わり。最後に自分以外で死ぬというのか……………。哀れだ」

神道はそう言うから、ナイフを新しく左のポケットから出す。合計、2本へと増えた。

「如月の言う、殺人の覚悟というものを背負ってみることにするかね……………」

神道はそう言ってニヤリと笑った。



## 10日目：残酷

「くっそ……………」

思ったより距離がある。会議室は1階にあるため遠い。

「如月？」

「え？」

横から声を掛けられた。クラスの仲間だ。

「何やってんの？」

「何って……………」

「あれ？如月君じゃない」

そう言つて、現れたのはクラスの女子……………。

「??」

「如月君、何かあつたのか？」

「え……………」

今度現れた人物……………。それは。

「木戸……………!？」

「どうかしたのか？」

「どうかしたつて……………え、あれ？」

僕が戸惑っていると、

「如月！」

「如月君」

「如月イイ！」

と、例の3人が現れた。

「橋田、無花果、羽賀！」

「俺は、体育館に行ったけど誰も居なかつたぜ？しかも他の生徒に

聞いたら、何も起こってないらしいしな」

「私たちも確認してみたけれど、どこにも居なかつたわよ？」

橋田も頷く。



『木戸』はそのままナイフを押し返して、離れる。  
しかし神道はその応対を予測していたかの動きで、『木戸』に突  
っ込んでいく。

「く……………」

少し『木戸』は苦しそうに呟くと、日本刀を振り上げる。

「……………」

神道は床を一瞬這うように転がると、また一瞬で飛び上がるよう  
にして『木戸』の目の前へ。

「掛かった！」

『木戸』はそう叫んで、刀をもう一度強く構える。

「空中なら、避けられないだろ！」

『木戸』はそう言っつて刀を振り下ろした。

「知るか」

神道は言つと、刀を諸共せずに、体で受けた。

「な……………!？」

「死ね」

神道はそのまま真つ直ぐにナイフを2本突き立てた。

「うがああ!?!？」

「後、残念なお知らせ。俺は2刀流じゃない」

そう言っつてポケットから、何かを出した。

「自分でも数は知らん」

そこにあつた全てのナイフを『木戸』に突き立てた。

10日目：喧嘩（前書き）

今回は少し短いです。

|||||

「神道！」

図書館に入つて、誰よりも早く入つて叫んだのは木戸だった。

「何だ。騒がしいぞ」

本を持って座つたままの神道が言った。

全員がぞろぞろざわざわと入つてきたので、当然うるさくもなる。

「図書館ではお静かに、だ」

神道はそう言つて本を閉じて、立ち上がる。

「だ……大丈夫なのか？」

「見て分からないのか。俺は傷は負つたものの、死体の処理が出来るくらいに元気だ」

そう言つて、毛布が掛けられた死体（と断定）を指差す。

が、その指を差した左手の袖は破れており、その袖と思われる部分が右手の肩を止血していた。

「全然大丈夫じゃなさそうだな……」

羽賀がそう言つて、ウエストポーチを開けて、応急処置の道具を取り出した。そしてそれを橋田に渡す。

橋田は何も言わずに、神道の治療を始めた。神道も嫌そうながら、治療を受ける。

「ついでだ。ここで話を続けるぜ」

羽賀はそう言つて、席に座つた。初めて彼が議長になつたようなスタンスだ。

「単刀直入に話を始める。先生達がどこにいるか分かつたぜ」

「マジか!？」

「ああ……部室棟の奥にある、旧体育教官室だ」

「体育教官室……!？」

「昔の場所だから無意識に場所として外してしまっていたけど、相手は残り7人だ。だったら、そこまで大きな空間である必要は無いんだ。そして意識から外れやすく、環境的に整っている場所……・……ってわけだ」

そう言っつて羽賀は証明終了といわんばかりのドヤ顔。

「羽賀。そこまで計算して、搜したのか？」

神道は言う。

「そんなわけ無いだろ？」

「だろうな」

「殺すぞ、死にぞこない」

「脳の無い奴に殺されはしない」

神道と羽賀は相変わらずケンカを始める。

はあ………面倒だ。



「アホか」

神道と作戦とも言えないような作戦会議をした後、神道は寝る」

と呟いて、階段へと上がっていった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………木戸？」

「うえ！？」

突然の発言に木戸は驚いた、というような反応をした。

「どうかした？」

「どうかしたって？」

「いや、何か黙ってるから」

「……………あのさ」

木戸は言った。

「教卓の中に、封筒がいくつか入っているんだ」

「うん？……………うん」

「それだけ」

そう言って、木戸は階段を上がっていった。

もしも。

もしもこの僕らの戦いに戻りたい時間があるとすれば。

僕はこのとき、もう少し木戸を追及すべきだった。

11日目：絶望を司るのは、一瞬

次の日。

いつも通りに、誰よりも早く僕は目覚めた。  
当然のように食堂に向かった。

違和感。

いや、間違いなく何かが変わった様子など一つも無い。『間違いなく』だ。

それでも、この空間を異常におかしく感じる。

「何だ………?」

「どうかしたのか?」

「うおわ!」

突然、後ろから羽賀に声を掛けられた。

「お………脅かすなっつ!」

「あ、ああ、ゴメン」

羽賀は少しうるたえつつも謝った。

「で、どうかしたのか?」

「何か………変な感じしないか?」

「変な感じ?」

そう言っつて、羽賀はさきほどまでの僕の視線を追うように見てか  
ら、

「………別に」

と言っつて僕を見た。

「そうか………?」

「何だよ、答えは」

「いや………僕にも分からない」

「はあ?」



へと移動しました】

淡々とアイツは述べていく。

「どうということ？」

橋田がアイツに訊く。

【彼らは全員、昨日亡命し、形も残らないくらいの物になって、天へと召されていきました。或いは、人殺しが行くのは地獄でしょうか？】

「・・・・・・・・・・は・・・・・・・・・・？」

何を言っている・・・・・・・・・・コイツは。

違和感も嫌な予感も中していた。またも僕の『如月の血』が全てを感じ取っていたのだ。

11日目：絶望を司るのは、一瞬（後書き）

凄いでいいことですけど、

これを投稿したのが7月7日で、これでシンバトは77話です。

7時に投稿したかった！！

11日目：開演のブザー音は、もうすぐ

「どづいうことだ!」

神道が誰よりも早く叫んだ。

【私だつて驚いてますから。まさか、こんな結果になって、こんなに一気に人数を減らされるとは】

「だからどづいうことなんだ!」

神道はもう一度叫ぶ。

それへの受け答えとして、ヒラオカは

【このゲームのルール。戦線中以外に関する内容を覚えているでしようか?】

と言った。

「……………どづいうことだ?」

【戦線中以外でのルールです】

「……………戦線以外で、人を殺した場合、反発とみなし、お前がその人物を殺す……………」

【そういうことです】

証明終了とでも言わんばかりの言い方で、ヒラオカは黙った。

「……………まさか……………」

神道はそう言つて、少し青ざめる。

きっと、その推測は当たっている。

ここまでくれば全員分かるはずだ。

今ここにいない奴らは、ルールを無視して、戦線中で無いにも拘わらず、教師達を殺しに行き、ヒラオカによって無駄死にとなった……………と。

【残念なことに無駄死にはありませんでした】

ヒラオカは心を読んだようにそう言つた。

【彼らは、自分で爆弾を持って突っ込むという方法によって、私が殺す暇も無く死にました。手法としては、自爆テロです】

「自爆テロ……」

【私に殺される前に、先に相手を殺してしまうということでしょう。ルールにのつとるとすれば教師が死ぬまで、その人物がルールを破ったかどうかは分からないのですから。木戸さんはそこまで考えていたのでしょうかね】

そう言っつて、区切りがついたのか少し黙ると、

【さて】

と話題を転換した。

【これによつて、戦線は一気にクライマックスまで着ましたね。生徒、残り12人……教師は残り】

その人数によつて、俺達の運命は左右される。

一体、何人残っているのか。

【1人です】

ヒラオカはそう言っつて、

【以上の状況により、戦線はすぐに開始します。両者、準備を開始してください】

と続けると、ブツッ！という音を立てて通信を遮断した。

「……後、1人……」

誰かがそう呟いた。

「追い詰めた……けど」

「木戸たちは死んだ……」

「呟きは増えていく……」。

『死んだ』という事実が僕らの心を蝕む。

「あ……」

突然昨日の発言を思い出した。

木戸が言っていた。

『封筒』があると……。

僕は無我夢中という感じで教卓の中を見た。

ポツンと。

封筒が1つだけ置かれ、それ以外の何も置かれていなかった。

「これは……？」

僕が取り出したそれを見た神道が尋ねる。

「多分……木戸の遺書だろう」

「遺書……!?!？」

皆が様々な反応を見せる中、僕はその中から紙を取り出した。

## 11日目：絶望を進む訳は、友

さて。

君達がコレを読んでいるという事は、僕は死んだってことだろう。こんな言い方すれば、何か、冗談みたいだけれど、真実なのだから悲しい。

僕はちゃんと一矢報いて死んでいるだろうか？

どんな形であれ、皆のために死ねたのなら、僕に不満は無い。しかし、無駄死にだったとしたら、君らに心の痛みを与えただけで死んだ事になるだろうから、やっぱり一矢報いて死ぬ事が僕の責任なのだろう。

君達がこれをどんな気持ちで見ているかは分からないけれど、取り敢えず、これを書いている僕の現状だけ教えておこうと思う。

これを書いているのは、皆が寝静まった後だ。僕はこれから死に行く。

そう思っていたら、何かを感じ取ったのか、他の何人かも一緒に行くって言い出した。予想外だったし、それはまずいと思ったから、何度も止めようとしたけれど彼らは訊く気が無いらしい。君達には悪いけど、大人数を減らす事になりそうだ。だから、一矢以上の何かを期待してくれ。外れたら、その時は僕の死体を煮るなり焼くなり好きにしてくれてかまわないよ。

この封筒を見つけてくれただろう、如月君には感謝したい。如月君が僕らに覚悟を教えてくれていなかったら、この戦線は成立すらしていなかっただろう、と断言できる。

これから君らは戦争の続きを開始するはずだ。残りの人数が何人になっているかは分からないけれど、少なくとも全員を殺すことはできていないだろう。

本当は皆に相談してから行動を起こそうかと思っただけで、そんなことすれば、神道君と如月君は全力で僕を止めるだろう。また、もしかしたら、もっと大人数で突っ込む事になるのかもしれない。どちらにせよ、最悪だろうと判断したよ。

それに、待機部隊の面々に心配を掛けるわけには行かなかった。彼らは彼らで、別の方向から行動を起こしているらしいから。

僕に出来る事は最大限のことを出来たと思っている。君らの仲間として行動が出来たとも思っている。できていなくても、僕にはどうすることも出来ないけれどね。

僕は先に逝く。

僕は君らの役に立てたかな？

立てていなかったら申し訳ない。天国にはいけないだろうから、地獄からでも　もしそういう概念が無くても、無からだろうが、来世からだろうが、生まれ変わった先であろうがどこからでも君達を応援することで償わせてもらおうと思う。

最後に1つ。

如月君の言っていた覚悟に1つだけ追加しておきたい。

誰かのために死ねる覚悟。

それを考えておいて欲しい。

木戸 秀一

11日目：始まった絶望は、希望

「だそうだ」

手紙に書かれていた内容を読み終えて、僕は顔を上げた。

「ふん……、奴らしい文章だったな」

「最後まで俺達のこと考えてたな」

神道と羽賀はそう言って笑う。

「私達も負けてられないわね」

「頑張ろう！」

無花果と橋田も笑いながら、決意表明。

まあ、この辺は異常だから不思議ではないけど……。

普通の人間大丈夫なのだろうか？と、視線を向ける。

「絶対勝つぞ！！」

「ああ、俺達ならやれる！あと1人だ！」

「私達だって、木戸君に負けてられないよ」

「最低限、死ぬときでも全力でやろう！」

かつて。

かつてここまで死ぬことに前向きになっている人間たちを見たことがあるだろうか？

「だが、余裕ぶっても要られないな」

神道がそう言って教壇に立つ。

「ここまでくれば、相手の武器がどのようなものかもわからん。しかし、木戸たちの一斉攻撃を諸共していなかったらどうという事は予測できる」



男子の体は、大きな剣によって縦に引き裂かれた。

「な……！！！」

目の前で切り裂かれた体をみて硬直した男子生徒も同じように切り裂かれた。

というか……。

目の前に居るものをみて、僕達全員の体は硬直の一途を辿るしかなかった。

鎧を纏った4メートルくらいの巨体が、天井を壊しながら歩いてくる。そしてその手には、大きな大剣を構えている。

コイツは……。

コイツは一体何なんだ！？

11日目：始まった絶望は、希望（後書き）

最終決戦、始まる。

教師1人 生徒10人

## 11日目：振り乱す未来は、命

思考を中断させるかのごとく、その大剣は今度は横薙ぎに僕たちを狙ってきた。

「しゃがめ！」

僕は咄嗟にそう叫んでから、自ら体をかがめる。

僕の言葉に、ようやく意識を取り戻した皆も同じようにしゃがむというより、しりもちをつくといった感じで大剣を避けた。

「大丈夫か！？」

神道がそう叫んだ。

その声に返答したのは橋田だった。

「怪我人は居ない！今の内に態勢を整えなおそう！」

「了解だ！！」

そう言って神道は、羽賀と無花果に向かって言う。

「一旦、引くぞ！」

「了解」

「了解したぜ！」

返答後、2人はその『鎧』と距離をとる。

「バラバラに逃げて、数人と合流していけ！個人行動は取らず、2人以上で固まって散れ！」

そう言って、神道は階段を飛び降りる。

「1人で行くなって！お前が言ったんだろ！」

「私もいくよ！」

羽賀と橋田も一緒にいて行く。

「早く逃げろ！」

僕はそこに居た皆を押し出す勢いで叫ぶ。

ハツとした顔をして全員が教室を、遠いほうの扉を通って出て行く。

「如月君！」

無花果が叫んだ。

そう言われてから、自分の体を大剣の影が包み込んでいる事気がついていた。

「くっそ！」

僕は咄嗟に体をねじまげるようにして、その大剣をかわす。

ズドンと、剣とは思えない鈍い音を立てて廊下を破砕する。

「マジかよ……」

と、落ち着いた瞬間、剣が動いた。

「!?!」

横向きに僕を狙うように、剣が動き始めている。

やばい！

剣は持ち上がり、横向きの動きを見せた。

ズドン！！

と、もう一度剣は床へ落下した。

「油断しないで。逃げるわよ」

剣の上に立ち、無理やり動きを封じ込めている。

「悪い！」

僕はそう叫んでから、鎧の背後に回る。

「それでいいの」

そう言っ、無花果はスーパーボールのように飛んで、鎧の背後へ。

鎧が重く振り向いた時には、俺達はその階から離れる事に成功した。

「危なかった……」

「貴方、注意力散漫すぎよ」

「何だろう……、ちよつと衰えたな」

「昔の感覚？」

「ああ……」

殺人鬼だった当時の僕ならば、あの程度避けられたに違いない。  
「馴れ合い……ね」

無花果はそう言って僕を見下すように見た。身長的には僕のほうが上だけだ。

「当時の感覚はもう戻らないでしょう。貴方はちゃんと一線を描いていなかった……。」

「……」

「全力で人間関係を拒んでいた貴方が私は魅力的だったわ。今みたいに、殺人鬼として認めて、人間関係を築き上げたような男よりは……ね」

「……」

あれ？もしかして、僕振られた？

まあいいか。

「でも」

無花果は続ける。

「今の貴方の方が強そうね」

「……はあ？」

「守るものがあれば、人は強くなる。私ならば『伝統』ね」

「なるほどね……」

「中二的発想だけど」

「言っちゃダメだぜ」

僕はそう茶化すと、ようやく上がっていた息も戻ったので

「行こう」

と言って、僕は階段を降りて、先ほどの鎧の場所へ行こうとする。

「ええ」

とついてきた。

「……ふむ。」

「なんとなく実験というか、背水の陣がいいと思うんだ」

「そう。で？」

「この戦いが終わったら結婚しよう」

「死亡フラグね」

そう言って、笑った無花果は、

「いいわよ」

と続けて僕の前を歩き始めた。

「………はは！」

やれやれ、どうも、本当に負けられなくなった。

11日目：振り乱す未来は、命（後書き）

フラグ立てちゃったよ・・・WWW

## 11日目：音の無い世界は、畏怖

静まった……。

明らかに何の音もしていない。

「……………どうなってるのかしら……………?」

「分からないけど……………音がしていないってことは、誰も死んでいないってことだろ?」

「まあ……………そうなるわね」

そう言っつて無花果は、廊下を見る。

「……………鎧の姿は無いわ」

「じゃあ、取り敢えず進んでみよう」

僕はそう提案して、廊下に出た。

天井と床には鎧が動いた軌跡として、壊れた天井とそのコンクリート片が有った。

「ふむ……………」

取り敢えず、その形跡を追って歩く。

「……………ていうか、よく考えたら、あの鎧の中の人は教師なんだよな?」

「ええ、そうね」

「なのに、あの鎧は4メートル以上だった……………」

「……………それが?」

「おかしいだろ」

僕はそう言っつて無花果を見る。

「自分の2倍以上もある鎧を着たまま歩けるものなのか。しかもこっつやって天井を壊して……………」

「そんなこと考える必要は無いんじゃないかしら?」

無花果は尚も淡白にそう言う。

「だって、そんなこと言い始めたら、木戸君に完璧に変装すること

や突然変異の蚊などはどう説明付けるの？」

「それは……」

「大方、最新の機械が中に詰め込まれているとかじゃないかしら？  
なんにせよ、深く考えるべきではないと思うわよ」

そう言つて無花果は、僕の前を歩く。

僕はそれを追つて、東の階段に辿りついた。

「……さて」

「昇つたか、降りたか……どっちだろうか」

「分散するのは危険だから、どちらか選びましょう」

「だったら、羽賀たちと合流できる可能性の高い、下を選ぼう」

僕はそう言つて降りる。

そして到着した。

「お。期せずして、待機部隊全員集合か」

羽賀がそう言つて笑う。

そこには予想通り、神道と橋田が居た。

「これで、一応メンバーの半分が揃っているという事になるな」

「なるのか？」

「10人だからな」

そう会話して、鎧が居るであろう上の階を見る。

「アレは一体何なんだ？」

「さあな。しかし、ヤバイだろう」

「何故？」

神道の意見に対して、僕はそういつて聞き返す。

「恐らくだが、あいつの中には最新の機械があるんだろうな」

「それは、そうだろう。さっきそういう話もした」

「ということは、アレは鎧であつて、ただの鎧ではない」

そして、神道は絶望の言葉を続けた。

「アレは恐らく、かなり速く動く。熱光線だつて出せるだろう」

「な……」

その言葉に反応しようとした、その時だった。

上の階から、破砕音がした。

11日目：現れる姿は、紅い（前書き）

クライマックスまであと少し。

## 11日目：現れる姿は、紅い

凄惨な風景。

という言葉の意味を僕は知らなかった。凄惨だって、読み方を知らなかったくらいだ。

でも、隣で

「凄惨だな……」

と羽賀が使っていたのを聞いて、ああ、こういうのを凄惨というのだな、と理解した。彼の使用用途が正しいかどうかは不明だが。

閑話休題。

僕らが居た階から、2階上。

その空間の廊下は黒が占めていた。

廊下は立った5人分の血とは思えない量の血が滴り、緑がほとんど見えない。赤と緑の色合いが絶妙だったのだろう、見事に黒色になっていった。

ただ、1つ言うならば、死体は全て一突きで殺されているということだ。体験の一突きなので、上半身には穴が開いたようなものだが。

「快樂のためにやるようなことはやっていない。大量殺戮兵器……」

神道はそう言って、歩いていく。ぴちゃぴちゃと音になる。

「鎧はどこへ行ったのかな？」

橋田も気にせず血の海（あまり、使いたくない表現ではあるが）を歩いていく。

そういえば、どうして橋田は人の死体に関して耐性があるのだろうか。その辺りのことを聞いていない。

だが、今聞かなければならない事ではないだろう。

「足跡でもあれば見つかるんだろうけどなあ……」

2人に対して羽賀は天井を歩く。  
足を汚したくないのだろう。忍者は自分の足跡が残りかねないよ  
うなことを拒む。

「油断は禁物。できるだけ、注意力を底上げしておきなさい」  
そう言つて、無花果は動かない。

「ふむ……」  
天井には穴が開いている。つまり、あの鎧が『小さくなる』など  
ということはあるまいわけだ。

その天井の穴から見ると、上の階にも、その上の階にも穴が  
開いている。場所によって、雨のしずくが落ちてきている。

雨……。  
今日は雨ということか。というか、屋上まで穴が開いているとい  
うことだな。

「どうも、全ての階を歩く事で、穴を全ての天井に開けているよう  
だ。音でアイツを捜すのは困難そうだな」

僕はそう言つて、少しずつ血の海に足を踏み入れる。特に抵抗は  
無い。

こつやつて歩いていると、ぴちゃぴちゃと音が鳴る。これでは鎧  
が来ても、誰の足音か分からないな。

「無花果、アイツは来てるのか？」  
僕が振り向いた。

「分らないわ。それより集中の邪魔をしないでちょうだい」  
鎧が無花果の横に現れた。

「無花果！」  
「え」  
無花果の体に大剣が突き進む。

「くつそが！」  
僕は叫んで、飛び、無花果の体を押し倒した。

大剣は見事に空を切り、壁に突き刺さった。  
僕と無花果の服や肌は、赤く染まった。

鎧の体は、紅く鈍く光っていた。

さあ。最終決戦だ。

## 11日目：終末のためには、思考

「……………」

鎧からは空気の漏れる音しかしない。

「何故気付かなかった!!」

神道はこちらに走ってきたながら、言う。羽賀と橋田もやってきて、3人も距離を置いて止まった。

「彼が話しかけてきたから、と言いたいところだけれど、要因はいくつもありそうね」

「いくつも……………」

僕は状況を整理しなおす。

「そうか……………。この血だ」

「血？」

「ああ。羽賀なら、鎧の『匂い』を追えたかもしれないけれど、それを邪魔するように、『血』の匂いが充満していた」

「ああ……………」

羽賀がそう言って納得する。

「そして、この血の海によって雑音が増えた。雨によって、自然に音はなり続けるから、鎧が近づいてきても気付きにくい。そこに僕が話しかけて、無花果の集中力が切れかけた瞬間に襲ってきたんだ」

「くつそ……………。考えやがって……………」

神道がそう言って、ポケットからナイフを取り出した。ふたもしていないナイフだった。そして微塵も躊躇することなく飛び上がり、鎧に突っ込んだ。

東部に向かって、ナイフを突き立てる。

「!？」

弾かれた、なら分かる。

折れた、も頷ける。

『避けられた』。

「な！」

「……………」

鎧は黙って、大剣を振りかぶった。

「神道！」

羽賀は神道の下に潜り込んで、体を無理やり引っ張った。

「すまん！」

「お。素直じゃん！」

そう会話して、階段側に滑り込む。

「にしても……………速い」

羽賀は態勢を整えなおして、そう呟いた。

「こりゃあ、場所を変えるわけにはいかなさそうだな」

「時間も余裕もなさそうだ」

珍しく、羽賀と神道はケンカせずに会話している。

「せめて！」

羽賀は言って、煙球を床に向かって投げた。

破裂して、煙が出る。

「逃げるぞ！」

羽賀が叫んだ。

確かに、今は態勢を整えなおさなければならぬだろう。これで

何とかなるなら儲けものだ。

しかし。

「ダメ！」

橋田が叫んだ。

「赤外線レーザーが出てる！逃げられない！」

「マジかよ……………」

「大丈夫……………私に任せて」

橋田がそう言った。

煙が晴れる。

「……………あれ？」

羽賀が居ない。

どこ行きやがった？

「油断するな！来るぞ！」

神道はそう叫んだ。

見ると、鎧が大剣を振り上げていた。

僕はギリギリのタイミングで振り下ろされる大剣を避けた。

「私が、あの鎧の弱点を探します！」

橋田は叫んで、後ろに下がる。

「見つかったら教える！俺が作戦を考える！」

神道もそう言っつて、鎧に効くか効かないか分からない、ナイフ投げで攻撃をする。

「なら私達は鎧の錯乱かしら？」

「だな。羽賀が居ないのが心細いが」

俺達はそれぞれの役割を把握し、戦いを始めた。

## 11日目：最後と最期と、サイコ

僕は、神道のナイフを奪った。

「何をする！」

「お前は銃使ってる！ナイフ技術は俺の方が上だ！」

「武器の数が足りない！そんなに多用は出来ん！」

そう言っつて、神道は腰から2挺の銃を出す。そして構えた。

「いや。兆弾するな」

自らでそう言っつて、銃をトンファーのように持って、鎧の頭部を殴る。もはや天井の概念などなく、完全に開けている。なので頭部を狙うことも可能のようだ。

ガン！と。

無花果に気を取られていたのか、思い切り衝撃を受け、鎧の体が一瞬よろめいた。

「効いてる！」

「任せろ！」

神道に続いて、僕はナイフを持って鎧の顔面を柄の部分で狙う。

「……………」

鎧は黙って、それでも怒りを感じさせる雰囲気、右腕で僕と神道を払いのける。

「くっそ！」

しかし、その間に無花果も動いていた。鎧の足を自らのつま先で蹴る。

「……………」

相手は鋼鉄。当然、無花果も痛いはずだ。

しかし、鎧のほうにも予想外の攻撃だったようで、バランスを崩して、片膝を折る。

「もう一発！」

僕はナイフの柄を垂れ下がった頭に横殴りに叩き付けた。  
ドガン！

と、今度こそ鈍い音を立てて、鎧は倒れる。

「っしゃー！ダウンとった！」

「そういう問題じゃないだろう！」

「弱点が分かった！」

橋田は僕たちの会話にわって入るように言う。

「取り敢えず、現状をどうにかしよう！鎧から離れたい！」

橋田はさらにそう言う。

「でも、どうやって」

「任せろ！」

そう言っつて、大筒を持って現れたのは羽賀だった。

「ソイツは……」

「最新機械の詰まった、よく分からないバズーカだ！」

羽賀はソイツを倒れた鎧に向ける。

「俺に任せて、先に上げれ！」

「フラグじゃねーか！」

「俺は死なない」

羽賀は良く分からない、液体をポンプに流し込む。

俺達はそれを見て、上の階に上がる。

「それ何？」

無花果が訊きながら、階段を上がる。

「ガソリン」

「そう。お気をつけて」

「おう」

羽賀は引き金を引く。

バズーカの砲口にまるでアニメのようなエネルギーがたまる。

「食らえ！」

「……」

鎧は驚いた……と思う。

熱エネルギー。空気を圧縮したようなものが、発射され、鎧の体を包んだ。

上の階の僕らの教室。僕らの武器が置かれてある。残っているのはライフルが1挺。日本刀が1つ。ナイフが1つだ。

そこに、残った僕らは居た。

「単刀直入に言えば、隙を見つけてあの鎧の中の人を殺せば勝ちだよ」

橋田はそう言う。

「どういうことだ？」

「見ていて分かりましたが、アレはどうも鎧をかたどった、別の何かだ」

「鎧の中に何かがあるのではなく………ということだな？」

神道の発言に橋田は頷く。

「その証拠に、鋼鉄であるものを攻撃しても、へこみもしなければ、腕に痺れを感じていない」

「ああ………確かに」

「それに無花果さんの足が折れていないのも不自然だよ」

「そうね」

「そして、最大の弱点………それは」

橋田は勿体つけて言う。

「アレの頭部にはほとんど防御力がない」

「そう………なのか？」

「しかし、あのバズーカ程度の攻撃では殺せていないのもまた事実」  
「と………なれば」

羽賀が言う。

橋田が頷く。

「隙を突いて一気に頭部を狙おう」

「……貴様ら、武器を持って」

そう言って、神道は自分の腰から2挺の銃を取り出した。

僕は自分の腰から、愛用のナイフを出した。

橋田は武器置き場の銃を1つ持った。

羽賀は自分のクナイや手裏剣の数をチェックした後、日本刀を持つ。

無花果も武器を持つかどうかで迷い、結局ナイフを持った。

「どうするんだ？」

「自分の名前を刻め」

そう言って神道は自分の銃2つに『神道 結弦』と刻み込んだ。

「……」

黙って僕も自分のナイフの柄に『如月 幽鬼』と名を刻んだ。

無花果もナイフに『無花果 弥生』。羽賀は日本刀に『羽賀 祝

人』。橋田はライフルに『橋田 明日香』と刻み込んだ。

神道はそれを見て、言う。

「いいか。コレが使えなくなったときが、俺達の最期だ」

「……」

「『名』とは『命』だ。俺達の戦いを最後にするか。俺達自身が最

期になるか」

「戦争だな」

羽賀が言って笑う。

「泣いても笑ってもこれが『サイゴ』だぜ」

羽賀が言う。

「精一杯、できることをやった……って、慰めでしかない

よね」

橋田が言う。

「勝利より得るものなんて無い。私達は真っ当にはこれから生きて

いけないでしょうけど、勝利して命を勝ち取るしかないわ」

無花果が言う。

「俺達の戦線を終わらせよう。大人になるためにな」

神道が言う。

ドガンー!!

と下の階から、鎧が飛び出してきた。

「ラスト・バトローションだ」

僕は冗談交じりそう言った。

鎧は大剣を振りかぶる。

11日目：最後と最期と、サイゴ（後書き）

次話 戦線終了します。

かなり長い文字数になります。

11日目：戦線終了の合図は、鐘の音（前書き）

ラスト戦争。

一気に4000文字行きます。

覚悟してください。

## 11日目：戦線終了の合図は、鐘の音

大剣が思い切り、床を突き破る。

僕らは一気に全員で、廊下に飛び出した。

廊下の床は穴だらけで、動き回った形跡として下の階に合った血の海は更にその下の階に向かって流れていつている。その後、他の階もつろつきまわって、下の階の廊下にも穴が開いたということだ。「行くぜ！」

誰よりも先に羽賀がそう言って、手裏剣やクナイを一気に数多く投げた。

それらは、鎧の体に突き刺さった。

「なるほど………。確かに、鎧ではないようだ」

そう言って神道は鎧を睨んだ。

「でも効いてないぜ！」

僕はそう言って、橋田を見る。

「そりゃ、厚みもあるから効かないだろうよ」と。

言ったのは、橋田だった。

「橋田………？」

「気にするな。橋田にこの前聞いてみたことによると」と神道が言って、橋田を見る。

「殺人モードなるものがあるらしい。その状態になると、極度的に性格が変わる。認識方の多重人格に近いものだ」

「はは………。だから血の海も大丈夫だったのか………」

「ていうか、そんな設定がこんな最終決戦で出てくるとは………」

でも良く考えると、戦線中で始めて戦うんじゃないだろうか？よ

く生きてこれたものだ。

「厚みがある分ダメージが少ない！だから、出来るだけ貫通力のある攻撃で戦え！」

神道はそう言っつて銃を構えた。そして引き金を引く。

「……………」

鎧は、俊敏に移動してその弾丸を避ける。やはり、移動スピードが高いのは、防御力が少ないからだろう。

そして鎧は教室から出てきて、同じように廊下に立ち、橋田に向かって大剣を突き立てようと走る。

「舐めんなよ」

橋田はそう言っつて、銃を構えた。

大剣は橋田の体を的確に狙っている。鎧は体を屈めて突き進んでいる。

スピードはかなり速い。

大剣は橋田の眼前まで到着した。

「……………!!」

鎧は驚いた。

間違いない。

橋田は直前まで動いていなかった体を一瞬で半身にして、大剣を避けたのだ。

「私の目ならこのくらい、余裕だ」

そう言っつて、

「食らえ」

橋田は構えていた銃を鎧の頭に引っ付けて、撃った。

「……………!!」

鎧が叫び声を上げて、倒れる。

しかしそれと同時に、鎧は持っていた大剣を横に向かって振った。

「しまった！」

視覚からの予想外の攻撃に橋田は対応できず、固まった。

「橋田！」

羽賀が走りこみ、橋田を抱きかかえて、飛ぶ。  
しかし。

大剣はその羽賀の左目を捉えた。

「あああああああああああああああああああああー！」

羽賀は叫び、悶える。

「羽賀！」

橋田はその羽賀の体をゆする。

「！」

起き上がった鎧は追撃するように、羽賀の体を狙うように大剣を上  
上に振り上げた。

「く………！」

黙って橋田は、羽賀をかばうように上に覆いかぶさる。

鎧は大剣を振り下ろした。

「バカが！」

神道は叫びながら、鎧の頭部を銃で殴り飛ばした。

振り下ろした大剣の標準がずれ、2人の横の床を壊す。

「お前の相手はこの俺だ。そいつらは知らん」

神道はそう言って、鎧を睨む。

鎧は振り返り、視線を神道に向けた。

「………」

鎧は大剣をそのまま、引つ張り上げて神道側に振り下ろす。

「そこなくっちゃな！」

神道はそう言って、後ろに下がる。

しかし。

その衝撃で廊下にひびが入る。

「！」

羽賀と橋田の体が落下する。

「羽賀！橋田！」

僕は叫んで、2人の元へ走る。鎧が僕を狙ってきたが、そんな場

合ではない。

僕は身を挨拶よじつて、鎧の攻撃を避ける。そして、2人が落下した廊下の穴に到達した。

膝立ちの姿勢で穴を覗き込む。

2人は下の階の廊下に倒れていた。

「大丈夫か！」

「私は大丈夫！でも羽賀が……」

羽賀は目を押さえて、息を荒くしている。

「くっそ……」

「如月！」

今度は神道が僕の名前を叫んだ。

鎧が大剣を構えて、横薙ぎに振ってくる。

「ヤバイ！」

僕は膝立ちの姿勢から無理やり、前に向かって穴を飛び越える。

大剣はブオン！という、大きな音で空を切った。

「他人の心配をしている場合ではないわ。自分が大事よ！」

無花果はそう言って、僕の横に立った。

「でも、羽賀が」

「俺は大丈夫だ！」

下から羽賀が叫んだ。

「それより、今からそっちに武器を持っていく！何とか鎧を怯ませ  
てくれ！」

「羽賀……」

明らかに無理しているのが分かる。目の部分からは血が止め処なく流れている。

「分かったわ」

それでも無花果はそう言って、鎧を睨む。

「聴こえたでしょう？神道君」

「ああ。3人で何とかするぞ」

神道は銃を構えて、頭部を撃つ。

「……………」

鎧はそれら全てを腕でガードする。

「チッ！」

神道は舌打ちして、銃をおろして、突っ込んだ。

僕と無花果もナイフを構えて、鎧に突っ込む。

「……………」

鎧は黙って、体を1回転させる。

大剣はその動きに誘導されて、同じように回転する。

所謂、回転斬りだ。

そして、その大剣は僕らの体全てを捉えた。

「！」

体が思い切り投げ出され、壁や床にそれぞれ体を打ちつけた。

切れてはいないものの、その大剣によって受けたダメージと壁と

の衝突で、かなり痛い。

「くっそ……………」

僕はすぐに立ち上がったのもう一度突っ込む。

ナイフを構えて、鎧の懐に潜り込む。

「……………」

鎧は大剣を持つ手に力を込める。

「油断禁物だぜ！」

僕はそう言って鎧の腕を刺した。

「……………」

やはり端になればなるほど、薄くなっているようだ。鎧を貫通し、

手ごたえを感じる。

「追撃だ！」

「貴様に言われんでも」

「分かってるわ」

神道は2挺の銃を頭部に向かって乱射する。

無花果もナイフを持って、柄の部分で頭部を叩く。

「……………!!!」

鎧はうめき声を上げて、廊下につ伏す。

「今のうちに行くぞ！」

神道はそう言っつて、廊下を走り、階段の方向へ向かった。僕らもその後ろをついて走った。

「何とかなつたのか……」

羽賀は目を押さえたままそう言っつた。

「死んではないいな」

僕はそう言っつて神道に確かめる。

「あの程度で死ぬことは無いだろう」

「それより……」

無花果は羽賀と橋田が持つてきたものを見ていっつた。

「武器とはソレのこと？」

「ああ。使えるものは使っつべきだ」

「……そう」

無花果はそう言っつて、黙っつた。

「……神道、どうにか使える？」

橋田が尋ねる。

「……ああ。何とかできそつた」

そう言っつて神道は僕らに作戦を話した。

「……で、誰がその役目やるんだ」

羽賀はそう言っつて神道を見た。

「……………如月。お前だ」

「僕が……………」

「ま、妥当だわな」

そう言っつて羽賀は立ち上がる。

「任せたぞ、如月」

神道も立ち上がった。

「ファイト、如月」

橋田も。

そして、

「約束が果たせるといいわね、如月君」

と言っつて、無花果も立ち上がった。

「約束っつて？」

橋田が話しに割っつて入っつてきた。

「如月君にプロポーズされたのよ。この戦線が終わっつたら結婚するらしいわ」

「……………はあ？」

羽賀はそう言っつて笑っつた。

「お前らは一体この戦線中に何をしているんだ」

神道もあきれるように笑っつた。

「おめでとう、2人とも！」

橋田もそう言っつて笑顔を浮かべた。

無花果も思わず、笑っつた。

戦争中とは思えないほどの、団欒というべき空間だっつた。

今までで一度もなかつつたことが、こんなサイゴのタイミングだとは……………。

と、僕も笑っつてしまつた。

これから人が4人も斬られる事が、分かつているのに。

鎧が起き上がりこちらに近づいてくる。

「じゃ、任せたぜ」

「俺の判断ミスではないことを証明しろよ」

「では、お達者で」

「貴方に掛かってるわよ」

4人はそう言っつて、笑った。

そして4つの影は。

鎧に向かって飛び込んだ。

「……………」

鎧は黙って大剣を構え、1回転した。

先ほどと同じ、回転切りだ。

しかし、先ほどとは違った。

4人の体は上半身と下半身に分かれて落下した。

「くっそ……………!!」

悲しみや痛みを感じている場合ではない。

彼らは木戸の言ったように、他人のために死んだのだ。

だから、僕らはその意思を汲んでやらなくてはならない。

「うおおおおおおおおおお!!」

僕は飛び出して、あのバズーカを撃った。

ガソリンを入れて、火力は十分だ。

熱エネルギーの風圧が勢いよく発射された。

熱はロツカーや4人の死体を燃やし、鎧は熱を浴び続ける。

廊下も溶け始め、煙が上がる。

「……………やったか？」

煙の中には影は見えず、煙が晴れた先にも何も居なかった。

……………落ちたのか？

廊下の穴から、下の階を見下ろした。

……………居ない……………？

と、思った瞬間、殺気を感じた。

「!？」

後ろに鎧は居た。

鎧の鋼のような色はもはや見られず、若干赤黒くなっている。

大剣を引きずってこちらにやってくる。

そうか……………。1回落ちて、もう一度昇ってきたのか。

「……………死ね」

初めて鎧の口から発された言葉だった。

そして、鎧は自分の大剣に力を込めた。

「……………!」

しかし鎧は上がらなかった。

「……………残念だったな」

「作戦通りだ」

「掛かったね」

「後はよろしく、如月君」

4人はそう言って、大剣の上に立っていた。

作戦はこうだった。

穴に近い、ぎりぎりのところで奴に一齐に仕掛けて、油断したところを誰かがバズーカで撃つ。

そして死なずに落ちて、昇ってきたところで、止めを刺す。

で、どうやって奴に仕掛けるか……………。

そこで俺達は羽賀の持ってきた『武器』を使った。



それと同時にだった。

キーン、コーン、カーン、コーン……、キーン、コーン、  
カーン、コーン。

【授業終了です。卒業生は速やかに校門に集合してください】  
戦線で初めて、チャイムが鳴った。

11日目：戦線終了の合図は、鐘の音（後書き）

戦線終了。

御疲れ様でした。

そろそろ最終回直前ですよ。

12日目：願え！！自らの意思の赴くままに！

まあ。

鎧を倒したときにこぼれた光からも想像できたが、外は晴れていた。

この物語の流れとしては、そういうハッピーエンドの様な流れは好ましくないような気がするけれど。

ああ、そうか。

エンドじゃないのだろう。きっと。だったらこの晴れ間は、単純に僕らの話に介入してきた、1つの晴れの日に過ぎない、というわけだ。

閑話休題。この12日間で僕はこの言葉を幾度となく使ったね。それは僕自身、話がそれやすい性格だからだろうか。

12日……………。

つまり、図らずも時間は0：00だったのだ。

真夜中、月の光がまるで木漏れ日のように鎧の体を照らしたのだ。

「さて……………。どこから始めるべきか……………」

そう言って、学校の机と椅子を横一列に5つ並べ、教壇に座っている少年は言う。

眼鏡をかけ、いかにも軽薄そうな風貌だ。

「ああ、どうぞ。座って。青空教室と行こう」

「貴様……………一体何者だ」

神道はそう言って質問する。

「まあ、いいから座って座って」

「何者だと訊いているんだ」

「座れ。いいから。話はそれから」

そう言って、明らかな怒りを見せる。

「……………」

僕らはそれぞれ、席に座っていく。

「よるしい」

そう言って、少年は指を鳴らした。

キーン、コーン、カーン、コーン……キーン、コーン、コーン、コーン。

と、チャイムが鳴った。

「……はい、チャイム鳴りました。授業始めます起立着をつけ礼着席」

軽薄な調子で、一気に言った。どうでもよさそうだ。

「授業なんか、どうでもいい。貴様は誰だ」

「誰だつていいだろ？お前らには俺のことは分かっているはずだから」

「……ヒラオカか」

「はい、では適当に話を始めます」

少年は同意はせずに話を始めた。

「さてと、まず、この戦線についてだな」

「おい、貴様……」

「いいか？ここでは俺がルールだ。だから、君らは取り敢えず、話を聞け。」

少年はそう言っ僕ら全員を睨む。

「うん、これは昔からあった伝統行事なのさ」

「伝統行事……!?!?」

羽賀が反応する。眼には眼帯代わりのように包帯を巻いている。

「ああ、ゴメン。嘘」

「コイツ……!!」

怒りがたまってきたのか、神道は拳を構え身を乗り出す。

「はい、タンマ。俺は君らが思っているより弱いから、一発殴られたら、この学校中の銃火器を作動させちゃうよ」

「……くっそ」

「OK、嘘はつかないように頑張るよ」

相変わらず適当な調子で少年は続ける。

「伝統行事ではないけれど、長々と続いていた事は事実だ。俺は確か、273028回目の『黒幕』だから」

「はあ？」

いきなり嘘つきやがったぞ。

「いやいや、別に嘘はついていないからね？」

「……………どういう意味？」

橋田が訊く。

「南瓜生中学校は273028回、この戦線を行っているのさ。ま

あ、『シンデレラバトローション』は俺が名づけたんだけど」

「貴方、何を言っているの？」

「分からないか？うーん……………」

そう言っただけ少年は頭を掻いた。

それから、

「まあ、簡単に言ってしまうと、この戦線は勝利者の願いによって273028回、行われているんだよ」

と言った。

……………。

……………意味が分からない……………。

何が言いたいんだ？

「あー、ダメか。OK、そうだよ。先にこっちを話せばよかった」

何かを思いついたように少年は言う。

「さあ。君らの願いを叶えてあげよう」

「……………はあ？」

「言っただろ？君らのメリットとして、何か1つ願いを叶えてあげるとして」

「……………それなら、さっき1つ話し合った」

神道が言った。

「この戦争で死んだものの復活だ」

その発言を聞いた少年は言った。

「……やっぱりそれか」

ふう、と教卓の上に座り込んだ。

「何だ？出来ないのか？」

神道はそう言っつて、少年を見下す。

「いいや、出来るよ。現に、前回の戦いでただ1人の勝者になった者は同じ願いをした。そして、叶えてもらった。条件付でね」

少年は笑う。

何だ。出来るのか。

だったら、これで戦争終了。

本当にハッピーエンドだな。

「そして、その少年は今、君達の目の前に居る」

……は？

何言っつてんだ。コイツは。

「……まさか……そういっつことなのか!？」

「私も分かったわ……!」

神道と無花果がそう言っつて驚く。

「どっいっつことなんだ!？」

羽賀が尋ねる。

「先ほど言っつた奴の発言から考えて……」

神道は言っつた。

「この戦線での勝者が願っつこと出来る願いで、命に関わる事は願える。条件付で」

「条件っつて何なんだよ!」

羽賀は叫ぶ。

その問に答えたのは、少年だった。

「もう一度、この戦争を行う。そしてその黒幕となることだ」

「ど………どういう意味だ！訳わからねーぞ！」

僕も全く同意見だよ、羽賀。

どうということだ………。

「この戦争を始めた者が一体どんな奴だったのかはわからないけど、『黒幕』には、願いをかなえる力を与えられている。そしてその力を使い少年達の願いをかなえることが出来る」

それは勝利者だから、先生側であったり、生徒側であったりする。少年はそう言っただけ。

「俺がこの戦線で唯一の勝利者となった時、願った事は全員の復活。そしてその時に聴いたことによれば、この願いをかなえるためには、そのメンバーでもう一度戦争をすることだ」

「………待て！それはつまり」

神道が驚いた顔で言う。

「そう。俺達は元々は仲間なんだよ。結弦、祝人、明日香ちゃん、弥生さん」

笑えるだろ？

少年はそう言っただけ、苦笑する。

「そして、それと同じ事が、以前に27万近くも行われてたんだ」

僕なりにまとめるとすれば。

この3月の卒業式の日から、数日間の戦線が行われた。

そしてその勝者が願ったのは、死んでしまったものを生き返らせること。

そして黒幕はその代償として『その復活した人間をもう一度戦争

させる事』。

と、もう一つ。

『復活した人間の中で出てきた勝者が願った願いが『人の生命に関わるもの』だった時、その願いをかなえる際には、黒幕としての使命を課す事』だった。

この無限ループだったという事だ。

そして今回の黒幕・・・・・・・・あの少年も同じだったという事が・・・・・・・・。

道理で僕や無花果、神道や橋田や羽賀の隠された情報がばれてるわけだ。

「もちろん、黒幕の代わりに別の人間が入らなければならぬ。それはまるで昔から居たかのように、卒業式の日から始まる。そして俺の代わりに入ったのが」

そう言っって少年は指を差す。

「如月幽鬼・・・・・・・・貴様だ」

「・・・・・・・・」

「お前一人で、俺のときとは違い、5人も助かるなんてな・・・・・・・・。全く、俺が役に立たなかった事が浮き彫りじゃないか」

「知るか」

「強気に出るなあ・・・・・・・・。まあいいや」

少年はそう言っって、笑っって、そして最後の言葉を言った。

「願え！！自らの意思の赴くままに！！」

**12日目：願え！！自らの意思の赴くままに！（後書き）**

人は願いつける。

それが自らのためなのか、愛する人のためなのか、家族のためなのか、友のためなのか、命のためなのか、相手もわからぬ誰かのためなのか。

まあつまり、題名は僕のコメントです。

願え。自らの意思の赴くままに。

19日目：「桜咲け」と願ったところで桜はそれを聞き入れないことに気がつき  
勢いで書きましたね。

題名長い…………。

あ、最終話です。

19日目：「桜咲け」と願ったところで桜はそれを聞き入れないことに気付き

校舎の中には、もちろん血の跡も銃も刀もナイフも爆弾も銃の痕も刀傷も死体も鎧も壊された教室や廊下や天井はなかった。

そりゃそつだ。ここは普通の中学校なのだから。

おかしい点を強いてあげるなら、新入生以外の生徒が全員転校してしまったことくらいだろう。

高校にもおかしい事が起きた。

南瓜生中学校を卒業して入学するはずの人間は誰一人として入学してこなかった。

だが、それはそれでもういいのだ。

だって、誰一人としてそれをおかしいと思わないのだから。

僕ら以外。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「だったら僕は願わない」

僕はそう言って笑う。

「俺も願わない」

神道も同意した。

「私も同意するわ」

無花果もそう言って席を立つ。

「正気か……？戦線で死んだ者を生き返らせる唯一の方法だぞ……」

少年は少し焦ったような顔を見せた。

「知るか。だからって僕らの所為で皆が何度も死ぬなんて嫌だね」  
僕は率直な感想をぶつける。

「そして私としては、黒幕なんて立場をしなくてはならないほど、今の立場に困ってはいないわ」

無花果はそう言って珍しく笑う。まあ、立場上、黒幕より黒いからな。

「そもそも貴様の提案に俺は乗る気は無い」

神道はそう言ってようやく立ち上がった。

「く……」

少年は呻く。

それから羽賀を見た。

「……祝人……。お前はどうかんだ？目を治してやることも出来るぞ」

穴を見つけたように、勝利の目をした。

「……いいよ。俺は」

しかし、羽賀はそう言って、打ち砕く。

「……何故だ!？」

さらに少年の焦りが増す。

「俺の目なら、橋田が居るから」

「私……!？」

羽賀の申し出に橋田は驚く。

「お前がかなりに居てくれたら、俺はもう1つの目も必要ないよ」  
「……分かりました」

その返事があってから、2人とも立ち上がった。

「お前ら……一体何なんだよ!」

少年は声を荒げて叫んだ。

僕はようやく立ち上がったから、校門に向かう。  
それに順ずるように皆も校門へ行く。

「僕らはシンデレラじゃない。もう、大人だから。客観視だよ」  
格好よかったかどうかは全く分からないね

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

さて、僕は今どこに居るのだろうか？僕は昔から方向音痴というか、地名を覚える事が苦手だった。だから、例え地名を聞いても分からないだろう。

だが都会の街中という事だけは分かる。遠くに夕闇に光るネオンが見える。

「居たぞ！如月だ！」

あ、ばれた。

うーむ、いい加減逃げるか。

僕は路地裏に向かって走る。

「逃がすな、追え！」

数人の警察官が僕を追いかけてくる。

路地裏をうろちよると回り、何とか撒こうとしているが、向こうも中々しぶとい……………。

「失礼」

急にそういわれたかと思うと、上に向かって投げられた。

「女子の腕力とは思えない」

僕はそう呟いて、壁に張り付いた。

「な、何だお前！」

警察の人が叫んだかと思うと、首が飛んでいく。  
彼女の武器だ。

「失礼、貴方達の頭、飛ばしていくわ」

少女はそう言ったときには全員の手を飛ばしていた。

「無花果、サンキュー」

「向こうへ。神道君が待ってるわ」

無花果はそれだけ言うと、路地裏を出て行く。

僕もそれについていく。

「来たか」

神道は出たところに居た。目の前には車に乗った、運転席に眼帯の少年とその助手席に座った少女。

「高校生にして忍者が車とは……」

と、神道は笑う。

「時代だよ。これが、な」

そう言って羽賀は笑った。

「早く行こうよ。如月はただでさえ指名手配されているんだから」

橋田もそう言って笑った。

車はネオン街を進んでいく。後ろからはパトカーが走っている。

「貴様の事件は案外ばれるのが早かったな」

「わざとじゃない。戦線から開放された瞬間に逃走劇が始まるとは僕も思っていなかった」

「で、任務は遂行できたのかしら？」

「出来てなかったら、殴るぜ？」

「私も」

そう言って、まるで普通の会話のように話す。

「ちゃんと、殺したよ。計画は少しずつ進んでいる」

僕はそう言って返事した。

「そろそろ拠点も変更しようぜ。この計画にはまだまだ時間が必要だ」

羽賀はそう言って車を走らせる。

「絶対に遂行して見せよう。犯罪者抹殺計画」

神道はそう言って、上を見る。

「ええ」

「おう」

「だな」

「だね」

僕らは走る。

僕らは進む。

満月の夜だった。

19日目：「桜咲け」と願ったところで桜はそれを聞き入れないことに気がつき  
以上、シンデレラバトローションでした。

感想、評価、どしどしよろしくお願ひします！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2336q/>

---

シンデレラバトローション

2011年7月23日03時23分発行